

待兼山遺跡Ⅲ

—大阪大学旧医療技術短期大学跡地試掘調査報告—



2001年4月
大阪大学埋蔵文化財調査委員会

待兼山遺跡Ⅲ

— 大阪大学旧医療技術短期大学跡地試掘調査報告 —

序 言

大阪大学豊中キャンパス（石橋団地）のある待兼山丘陵は、西摂平野をのぞむ緑豊かな高台をなしている。この丘陵上には古墳や須恵器窯跡が存在することが古くからしられ、1968年に刊行された『豊中市史』にもすでにその記述が見られる。

1983年に大阪大学ラジオ・アイソトープ総合センター建設用地で弥生時代の集落跡が発見されたことから、丘陵一帯が待兼山遺跡として国の文化財台帳に登録され、周知の遺跡として文化財保護法の適用を受けることとなった。これを契機に大阪大学では遺跡の調査・保護と建物計画などの適切な調整を図るために、1985年に埋蔵文化財調査委員会を発足させ、そのもとで文学研究科埋蔵文化財調査室が調査を計画的に実施してきた。

1998年からは、吹田地区に移転した旧医療技術短期大学跡地の利用計画を策定するために、3年間にわたって大規模な試掘調査を実施し、その結果、多くの地点で弥生時代から中世までの遺跡の存在を確認した。本書はこの試掘調査の成果を中心に、これまでに各所で行ってきた試掘・立会調査の成果を加えてまとめたもので、豊中キャンパス内の埋蔵文化財について最新の情報を知ることができる。学内の文化財対策の資料としてのみならず、地域の歴史資料として学外でも広く活用していただければ幸いである。

市街化が早く進んだ豊中市域にあって、待兼山丘陵のような自然の景観と文化財を残す空間が存在することは、大学だけでなく市民にとっても貴重な財産である。遺跡の調査・保護とキャンパス整備との両立はかならずしも容易なことばかりではないが、「地域に生き世界に伸びる」という研究教育の理念をかかげる大阪大学にあって、本委員会も、地域の文化遺産を大切にしながら、キャンパス内の整備計画との調和を図るべく、今後とも責任をもってその任にあたる所存である。

2001年4月

大阪大学埋蔵文化財調査委員会
委員長 肥 塚 隆

例 言

- 1 本書は、大阪府豊中市待兼山町に所在する大阪大学旧医療技術短期大学跡地の試掘調査ならびに立会調査の報告書である。
- 2 1988年4月～2000年12月までに行われた大阪大学石橋団地内で行われた試掘調査と立会調査についても併せて報告を行った。1988年3月以前の調査にかんしては、大阪大学発行の『待兼山遺跡』・『待兼山遺跡II』において報告が行われている。
- 3 調査主体は大阪大学（総長岸本忠三）である。
- 4 調査は、大阪大学埋蔵文化財調査委員会の指導のもと、同委員会専門委員が担当した。各年次の専門委員は以下のとおりである。福永伸哉（～1994年3月）・杉井健（1994年4月～1998年3月）・清家章（1998年4月～）。発掘調査の実施にあたっては豊中市教育委員会から適宜指導と助言を得た。また、施設部をはじめ学内関連部局から多大な御協力があった。
- 5 各調査の調査期間は文中に記した。
- 6 調査と遺物の整理には、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室の学生が主として参加した。参加者氏名は本文中に記す。
- 7 写真撮影は、調査担当の専門委員が中心となって行った。なお、図63・図64については文部科学技官大橋哲郎氏のご協力を得た。
- 8 本書の執筆は、福永伸哉（大阪大学大学院文学研究科助教授）・杉井健（熊本大学文学部助教授）・清家章（大阪大学大学院文学研究科助手）・寺前直人・西谷彰・石井智大・瀬川貴文・中村大介・福辻淳（大阪大学大学院文学研究科大学院生）が行い、分担は文末に記した。
- 9 編集は、清家が担当した。

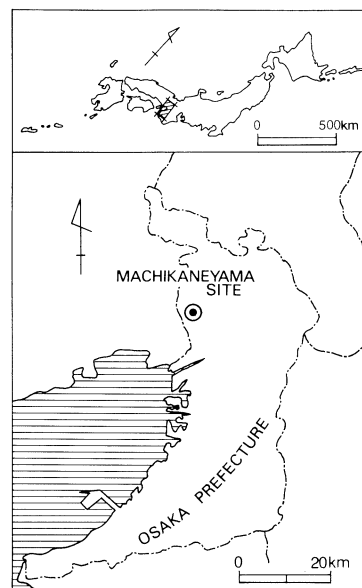


図1 待兼山遺跡の位置

待兼山遺跡Ⅲ

—大阪大学旧医療技術短期大学跡地試掘調査報告—

目次

序言

例言

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の環境	2
2 大阪大学石橋団地内の地形と遺跡	4
3 試掘調査の契機と経過	8
4 基本層序	10
第Ⅱ章 旧医療技術短期大学跡地の埋蔵文化財試掘調査	11
1 第1調査地点の成果	12
2 第2調査地点の成果	14
3 第3調査地点の成果	23
4 第4調査地点の成果	27
5 第5調査地点の成果	29
6 第6調査地点の成果	30
7 第7調査地点の成果	32
8 第8調査地点の成果	34
9 第9調査地点の成果	36
10 第10調査地点の成果	42
11 第13調査地点南半部の成果	44
第Ⅲ章 大阪大学石橋団地内における試掘調査と立会調査	47
第Ⅳ章 考察	61
1 古墳時代中期における倭王権の地域支配方式 —豊島地域における小古墳の検討を通して—	62
2 猪名川左岸域における小古墳の意義 —埴輪の規格から見た地域支配—	74
第Ⅴ章 総括	89

挿図目次

	頁		頁
図 1 待兼山遺跡の位置 (中村 (里) 製図) … (ii)		図34 土器 2 …………… (25)	
図 2 周辺の遺跡 (瀬川製図) …………… (3)		図35 出土遺物 (中村 (大) 製図) …………… (26)	
図 3 石橋団地とその周辺で検出された主な遺構と遺物 (石井製図) …………… (6)		図36 調査区配置図 (渡辺 (今) 製図) …………… (27)	
図 4 旧医療技術短期大学跡地調査計画図 (柏原製図) …………… (9)		図37 第 4 トレンチ …………… (28)	
図 5 基本層序モデル (森先製図) …………… (10)		図38 第 5 トレンチ …………… (28)	
図 6 トレンチ配置図と旧医療技術短期大学跡地地図との対応 (長友製図) …………… (11)		図39 調査区配置図 (櫻田製図) …………… (29)	
図 7 調査区配置図 (望月製図) …………… (12)		図40 調査区配置図 (吉田製図) …………… (30)	
図 8 調査地点全景 (南から) …………… (13)		図41 全景 …………… (31)	
図 9 第 1 トレンチコーナー部 (南から) …… (13)		図42 第 1 トレンチ北側壁面 …………… (31)	
図10 第 4 トレンチ全景 (南から) …………… (13)		図43 第 1 トレンチ土器出土状況 …………… (31)	
図11 調査区配置図 (向井製図) …………… (14)		図44 第 7 トレンチ …………… (31)	
図12 第 1 トレンチ平面・断面図 (福辻製図) … (15)		図45 調査区配置図 (柏原製図) …………… (32)	
図13 調査区全景 (南から) …………… (16)		図46 第 2 トレンチ土層 …………… (33)	
図14 第 1 トレンチ全景 (北から) …………… (16)		図47 第 3 トレンチ土層 …………… (33)	
図15 第 1 トレンチ東壁土層 (北半) …………… (16)		図48 第 4 トレンチ …………… (33)	
図16 第 1 トレンチ東壁土層 (南半) …………… (16)		図49 第 5 トレンチ土層 …………… (33)	
図17 第 1 トレンチ埴輪出土状況 1 …………… (17)		図50 調査区配置図 (伊藤製図) …………… (34)	
図18 第 1 トレンチ埴輪出土状況 2 …………… (17)		図51 第 2 トレンチ …………… (35)	
図19 第 2 トレンチ全景 …………… (17)		図52 第 4 トレンチ …………… (35)	
図20 第 5 トレンチ東壁 …………… (17)		図53 第 6 トレンチ …………… (35)	
図21 埴輪実測図 1 (寺前製図) …………… (18)		図54 出土羽釜実測図 (福辻製図) …………… (35)	
図22 埴輪実測図 2 (寺前製図) …………… (19)		図55 調査区配置図 (小川製図) …………… (36)	
図23 円筒埴輪 1 …………… (19)		図56 第 2 トレンチ平面・断面図 (西谷製図) … (37)	
図24 円筒埴輪 2 …………… (19)		図57 第 2 トレンチ …………… (38)	
図25 円筒埴輪 3 …………… (19)		図58 土器棺出土状況 1 …………… (38)	
図26 形象埴輪 …………… (19)		図59 土器棺出土状況 2 …………… (38)	
図27 調査区配置図 (中川製図) …………… (23)		図60 第 7 トレンチ …………… (38)	
図28 第 3 トレンチ全景 …………… (24)		図61 土器棺平面・断面図 (西谷製図) …………… (39)	
図29 第 4 トレンチ全景 …………… (24)		図62 出土遺物実測図 (西谷製図) …………… (40)	
図30 第 4 トレンチ土器出土状況 …………… (24)		図63 土器棺 1 …………… (40)	
図31 第 5 トレンチ全景 …………… (24)		図64 土器棺 2 …………… (40)	
図32 第 4 トレンチ南西壁断面図 (塩谷製図) … (25)		図65 調査区配置図 (中村 (里) 製図) …………… (42)	
図33 土器 1 …………… (25)		図66 第 1 トレンチ …………… (43)	
		図67 第 6 トレンチ …………… (43)	
		図68 調査区配置図 (安東製図) …………… (44)	
		図69 全景 …………… (45)	

図70	第1トレンチ……………(45)	図105	附属図書館建設工事試掘調査……………(56)
図71	第3トレンチ……………(45)	図106	上山池埋め立て工事試掘調査……………(57)
図72	第8トレンチ……………(45)	図107	仮食堂建設工事試掘調査……………(57)
図73	共同溝ステーション立会調査……………(48)	図108	排水処理施設設備更新工事試掘調査…(57)
図74	ガス整圧機試掘調査出土遺物……………(48)	図109	旧医療技術短期大学跡地内駐輪場設備工事 ……………(57)
図75	ロ大講裏自転車置場撤去立会調査……………(49)	図110	大高の森石垣整備工事立会調査……………(58)
図76	教養部物理学棟裏法面補修工事立会調査 ……………(49)	図111	旧医療技術短期大学跡地内第9調査地点の 土器棺……………(58)
図77	教養部ニ号館解体工事試掘調査……………(49)	図112	石橋団地内試掘・立会調査地点位置図(望月 製図)……………(59)
図78	言語文化研究科校舎建設工事立会調査…(49)	図113	待兼山遺跡における古墳の分布(寺前製図) ……………(62)
図79	駐車場建設工事試掘調査出土遺物……………(50)	図114	大阪北部地域における中期古墳の規模と形 態(寺前製図)……………(64)
図80	基礎工学部ボンベ庫建設工事試掘調査…(50)	図115	桜塚古墳東群および周辺地域における中期 古墳の展開(寺前製図)……………(65)
図81	教養部校舎建設工事立会調査……………(50)	図116	猪名川左岸域の首長墳と関係遺跡(高橋順子 製図)……………(75)
図82	理学部宇宙物理科校舎建設工事試掘調査(50)	図117	猪名川左岸域の首長系譜と小古墳(高橋製 図)……………(76)
図83	国際交流会館建設工事試掘調査……………(51)	図118	大石塚古墳・小石塚古墳出土埴輪(高橋製図) ……………(77)
図84	文学部美学棟エレベーター工事立会調査(51)	図119	小石塚古墳埴輪棺使用埴輪(高橋製図) ……………(78)
図85	旧教養部エレベーター工事立会調査……………(51)	図120	桜塚古墳群における中期の円筒埴輪と待兼 山5号墳の円筒埴輪(高橋製図)……………(79)
図86	石橋福利会館改築工事立会調査……………(51)	図121	中期における中丹波の円筒埴輪(高橋製図) ……………(83)
図87	共同配水管設備工事立会調査……………(52)		
図88	井水配管及び給水管改修工事立会調査…(52)		
図89	災害復旧(中山池周辺)工事立会調査…(52)		
図90	石橋福利施設建設工事試掘調査……………(52)		
図91	仮設課外活動施設建設工事試掘調査……………(53)		
図92	ゴルフ練習場建設工事試掘調査……………(53)		
図93	理学部東側配管工事立会調査……………(53)		
図94	配水管敷設工事立会調査……………(53)		
図95	文法経棟中庭プレハブ建設工事試掘調査(54)		
図96	図書館本館西側入口前掘削工事立会調査(54)		
図97	鑿井工事立会調査……………(54)		
図98	共通教育校舎新当配管理設工事立会調査 ……………(54)		
図99	機械整備工事立会調査……………(55)		
図100	共同溝工事立会調査……………(55)		
図101	配管工事(基礎工学部北側)立会調査…(55)		
図102	国際公共施設建設工事試掘調査……………(56)		
図103	旧医療技術短期大学跡地建物撤去立会調査 ……………(56)		
図104	基礎工学部研究科実験棟建設工事試掘調査 ……………(56)		

表紙写真：待兼山5号墳埴輪出土状況

I 調查經過

I 調査経過

1 周辺の環境

地理的環境 待兼山遺跡は、大阪府北西部の豊中市・箕面市と池田市の境にある丘陵上に位置する。この丘陵は待兼山丘陵と呼ばれ、丹波山地を水源とする猪名川が形成する西摂平野の東端に位置する。待兼山丘陵の北には箕面川が東西方向に流れ、低位・中位段丘が発達する。その北方に五月山丘陵を含む北摂山系が広がる。東には千里川を挟んで千里丘陵が連なり、千里川の下刻により桜井谷とよばれる谷が形成される。南にはいわゆる豊中台地がなだらかに南方へのびる。この台地のさらに南には沖積地が広がる。

このように待兼山遺跡周辺は沖積地から高位段丘まで多様な地形がみられ、この地形に応じた遺跡が形成されている。

歴史的環境 待兼山遺跡周辺における人間の生活の痕跡は旧石器時代から見られる。実態が明らかな遺跡は少ないが、低位段丘上にまばらに分布するようである。待兼山丘陵周辺の蛸池西遺跡(29)⁽¹⁾、蛸池北(宮の前)遺跡(19)、柴原遺跡(26)や五月山丘陵南麓の伊居太神社参道遺跡(3)からナイフ形石器などが発見されている。

縄文時代になっても明確な遺構はみつかっていない。五月山丘陵南麓には石鏃が出土した伊居太神社参道遺跡、石鏃・石匙が出土した京中遺跡(9)が存在する。待兼山丘陵裾の低位段丘では、宮の前(蛸池北)遺跡で石棒が採集され、内田遺跡(25)や豊島南遺跡(18)で後期・晩期の土器が、丘陵北麓の瀬川遺跡で前期と晩期の土器が石鏃・石匙とともに出土している。豊中台地南方の沖積地でも服部遺跡(51)、穂積遺跡(54)、原田遺跡(46)で土器が出土しており、沖積地にも遺跡があったようである。

弥生時代になると大規模な集落が形成され始める。前期では勝部遺跡(44)、小曾根遺跡(55)が拠点集落として形成され中期まで継続して営まれる。宮の前(蛸池北)遺跡は弥生時代中期に発達し、竪穴住居

群と方形周溝墓群が分布を明確に分け、集落構造を考える上で良好な資料を提供する。新免遺跡(35)も大規模な集落であり、方形周溝墓や住居跡などの遺構や遺物が多くみつまっている。また、中期後葉には待兼山遺跡(1)においても集落が形成され、立地から高地性集落であったと考えられる。位置関係より宮の前(蛸池北)遺跡との関係が想定される。

弥生時代後期になると豊中台地南方の沖積地で、穂積遺跡や服部遺跡、小曾根遺跡などが新たな展開をみせる。特に穂積遺跡では銅鏃の未製品が出土するなど青銅器の生産に関わる大規模な集落であったことがわかる。これらの遺跡では吉備や東海地方など東西各地からの搬入土器が出土し、交通の要所として発達したことが推測される。

ところで、待兼山遺跡北方の箕面川流域では現在のところ弥生遺跡の動向はあまり知られていない。ただ、上流の如意谷から突線鈕式6区袈裟襷文銅鐸がみつまっていることから箕面市付近にも集落が存在した可能性が高い。

古墳時代前期になると集落の様相は判然としない。しかし、この地域では有力な古墳が数多く造られその動態を明瞭に捉えることができる。前期は河川に区切られた単位ごとに古墳が築造される。箕面川右岸の池田市周辺では前方後円墳の池田茶臼山古墳(7)、娛三堂古墳(4)が出現し、待兼山丘陵では待兼山古墳(2)が、豊中台地では大石塚・小石塚古墳が築かれる。

中期になると池田市周辺や待兼山丘陵には大規模な古墳が築造されなくなる一方で、豊中台地に古墳が集約され、大石塚・小石塚古墳に続き大塚古墳、御獅子塚古墳、狐塚古墳、南天平塚古墳が築かれ、桜塚古墳群(40)が形成されるのである。往時は40基を越える古墳群であったが、開発などのため現在は先述のうち狐塚古墳以外の5基の古墳を残すのみである。この古墳群では多量の武器・武具が出土し、百舌鳥・古市古墳群との関係が注目されている。また同時期に蛸池東遺跡(28)で大阪府法円坂遺跡や和歌山県鳴滝遺跡の大型倉庫に匹敵する大型掘立柱建物为数棟検出されており、大型倉庫群であると考え



1. 待兼山遺跡 2. 待兼山古墳 3. 伊居太神社参道遺跡 4. 娛三堂古墳 5. 娛三堂南古墳 6. 池田城跡 7. 池田茶白山古墳 8. 五月ヶ丘古墳 9. 京中遺跡 10. 野田塚古墳 11. 鉢塚古墳 12. 鉢塚南遺跡 13. 狐塚古墳 14. 石橋古墳 15. 二子塚古墳 16. 脇塚古墳 17. 神田北遺跡 18. 豊島南遺跡 19. 蛭池北(宮の前)遺跡 20. 大鼓塚古墳群 21. 野畑春日町古墳群 22. 野畑遺跡 23. 野畑春日町遺跡 24. 少路遺跡 25. 内田遺跡 26. 柴原遺跡 27. 桜井谷竃跡群 28. 蛭池東遺跡 29. 蛭池西遺跡 30. 蛭池遺跡 31. 麻田御神山古墳 32. 金寺山廃寺 33. 新免宮山古墳群 34. 本町遺跡 35. 新免遺跡 36. 山ノ上遺跡 37. 走井遺跡 38. 岡町北遺跡 39. 岡町遺跡 40. 桜塚古墳群 41. 長興寺遺跡 42. 梅塚古墳 43. 原田西遺跡 44. 勝部遺跡 45. 勝部東遺跡 46. 原田遺跡 47. 曾根遺跡 48. 曾根東遺跡 49. 豊島北遺跡 50. 豊島南遺跡 51. 服部遺跡 52. 利倉遺跡 53. 利倉南遺跡 54. 穂積遺跡 55. 小曾根遺跡

図2 周辺の遺跡

られる。以上のことから、桜塚古墳群を中心とする地域には古墳時代中期に大きな勢力が存在し、中央権力と強い関わりを有していたと考えられる。

桜塚古墳群では御獅子塚古墳以後、古墳の規模が縮小し、中期後葉の南天平塚古墳をもって古墳の造営が停止する。これに対し、中期中葉以降、桜塚古墳群の周辺地域では、小規模な古墳が数多く作られるようになる。蛸池北(宮の前)遺跡、利倉南遺跡(53)、穂積遺跡で方墳・円墳数基が発掘調査で見つかっている。新免遺跡においても帆立貝式古墳を中心に古墳群が新たに形成される。待兼山遺跡でもこの頃を前後するいくつかの古墳が知られている。今回の調査においても新たに古墳が発見されたこととあわせて考えると、今後、小古墳の発見が増加する可能性がある。

池田市周辺では、首長墳として前方後円墳の二子塚古墳(15)、円墳の鉢塚古墳(11)が築かれる。特に鉢塚古墳の横穴式石室は周辺地域で抜きん出た規模を誇り、当地域の勢力の大きさを物語る。

千里川水系では新免古墳群に続き、太鼓塚古墳群(20)、新免宮山古墳群(33)が形成されるが、首長墳や大規模な群集墳は発達しない。これらの群集墳中には陶棺を内蔵するものがある。陶棺は桜井谷の須恵器窯からも出土することから、須恵器工人集団との密接な関係があったと考えられる。この桜井谷窯跡群は五世紀中頃から生産を始め、六世紀に生産を拡大する。これに伴い千里川沿いに立地する柴原遺跡、本町遺跡(34)、新免遺跡などの集落が発達し、これらの遺跡からは不良品を含む多量の須恵器が出土する。このことから、水運を利用しながら集落を介した須恵器流通の一端が窺われる。

歴史時代になると古代寺院が築かれ、豊中市に飛鳥山田寺系の瓦が出土する金寺山廃寺(32)が、池田市に白鳳時代の瓦を出土する石積廃寺が造営される。

律令国家の成立にともない当地域も摂津国豊島郡となる。陸路の山陽道などの街道と水路の猪名川との交差点という交通の要所であるため街道沿いに集落が発達し、旧山陽道に近接して蛸池北(宮の前)遺跡、伊丹街道沿いに山ノ上遺跡(36)、桜塚街道沿い

に曾根遺跡(47)、猪名川下流域には上津島南遺跡、島田遺跡がある。蛸池北(宮の前)遺跡では柵列をともなった掘立柱建物群が、上津島南遺跡では大規模な建物群とともに帯金具が出土しており、官衙的な性格を有する遺跡ではないかと考えられる。

平安時代後期になると、小曾根遺跡や穂積遺跡では摂関家領垂水西牧として荘園化されていたようであり、定住度の高い建物群が集まって集落を形成する。中世では池田市神田北遺跡(17)で建物跡が検出され、後白河院領として開発された呉庭荘との関連が指摘される。また、室町から戦国時代に豊島郡一帯を掌握した国人池田氏の池田城(6)が五月山丘陵南麓に営まれる。この池田城址や地名から待兼山遺跡に存在する可能性が指摘される刀根山城などが、織田信長による有岡攻めの際に最前線として利用される。(瀬川)

2 大阪大学石橋団地内の地形と遺跡

大阪大学石橋団地内の地形 大阪大学石橋団地、通称豊中キャンパスは、待兼山丘陵上に位置し猪名川を西方に望むことのできる場所にある。丘陵の最頂部付近からの眺望は極めて良好で、北の箕面川流域・西の猪名川流域、そして南は大阪湾付近までが一望できる。その丘陵最頂部は豊中キャンパスの北西側にあり、この付近は一般に待兼山と呼称されている。

待兼山丘陵は、かつては尾根や谷からなる起伏に富んだ地形を呈していた。しかし、現在はキャンパスの造成や宅地開発などで丘陵上は大きな改変を受けており、旧地形をとどめる場所は少ない。豊中キャンパス内においては、旧医療技術短期大学跡地付近や中山池南側付近が旧地形を比較的とどめているものと思われる。

旧医療技術短期大学跡地は待兼山丘陵の西端に位置する。待兼山の最頂部にあたる部分はその跡地内に存在している。最頂部付近には建築物などもなく、現在は雑木林となっており、旧医療技術短期大学跡地内でも最も良好に旧地形をとどめている。この最頂部が存在する部分を中心として、北・北西・南西

の各方向へ短い尾根がのびる。これらの尾根のうち、北西の尾根と南西の尾根の間、ちょうど最頂部の西側にあたる地区は谷地形となっているが、この地区には旧医療技術短期大学の建物が集中して建てられていた。これらの建物の建築に伴う削平や埋め立てによって、この地区の旧地形は大きく改変されている。こうした改変は一部尾根上にまで及んでいる。また、北の尾根と北西の尾根の間も谷地形をなし、テニスコートなどが造られていたが、基礎を地中深く設置するような建物は建てられておらず、比較的旧状を保っているようである。

一方、旧医療技術短期大学跡地の南側は東から西に向かってひらける大きな谷地形となっており、待兼山最頂部から谷底に向かい緩やかな斜面を形成している。この谷地形を利用して、近世以降に造られた溜池であると思われる上山池・中山池・下山池の3つの池が造られていた。そのうち下山池は豊中キャンパス外に存在しており、宅地開発に伴い埋め立てられた。その後、豊中キャンパス内に存在する2つの池のうち上山池も埋め立てられ、現在は中山池を残すのみとなっている。

大阪大学石橋団地内の遺構と遺物 待兼山丘陵における遺跡の存在は、第二次世界大戦以前から一部では知られていた。しかしながら、大阪大学豊中キャンパスがこの地にできる以前には十分な埋蔵文化財調査は行われてこなかった。豊中キャンパス造成後、ここに遺跡が存在していることが周知の事実となり、豊中キャンパスとその付近に存在する遺跡は、豊中市教育委員会によって待兼山遺跡として遺跡台帳及び遺跡地図に登録されることとなった。そして、その後の調査によって、弥生時代から現代までにいたる人の営みの痕跡が遺構・遺物として検出されている。また、マチカネワニに代表される、それ以前に遡る第4紀の種々の化石も発見されている。

キャンパス内の遺跡については、これまでに大阪大学埋蔵文化財調査室によって、キャンパスの造成や校舎建設などの工事に伴って調査が行われている。その結果、いくつかの調査地点より、遺構・遺物が検出されている。

豊中キャンパス内におけるこれまでの調査では、弥生時代より前に遡る遺構・遺物は検出されていない。しかし、周辺の遺跡からは旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が発見されていることから、今後豊中キャンパス内においてもそうした時期の遺構・遺物が発見される可能性はある。

弥生時代の遺構・遺物としては、理学部ラジオ・アイソトープ総合センター地点（図3-23）や刀根山テニスコート地点（図3-17）などから、弥生時代中期から後期に属すると考えられる土器や、石庖丁の未製品・石鏃などの石器が検出されている。

ラジオ・アイソトープ総合センター地点の遺物は、弥生時代中期に属するものであり、遺構が伴わないことなどから、この地点の西方に位置するやや高い地点より流出して堆積したものであると考えられている（都出編1984）。また、この調査地点の北側では、豊中市民病院建設に際して豊中市教育委員会によって調査が行われている（図3-A）（豊中市教育委員会編1996：p.34）。この調査においても弥生土器や石斧などが出土しているが、明確な遺構は検出されておらず、やはりラジオ・アイソトープ総合センター地点付近のやや高い地点から流出して堆積した遺物であると考えられている。

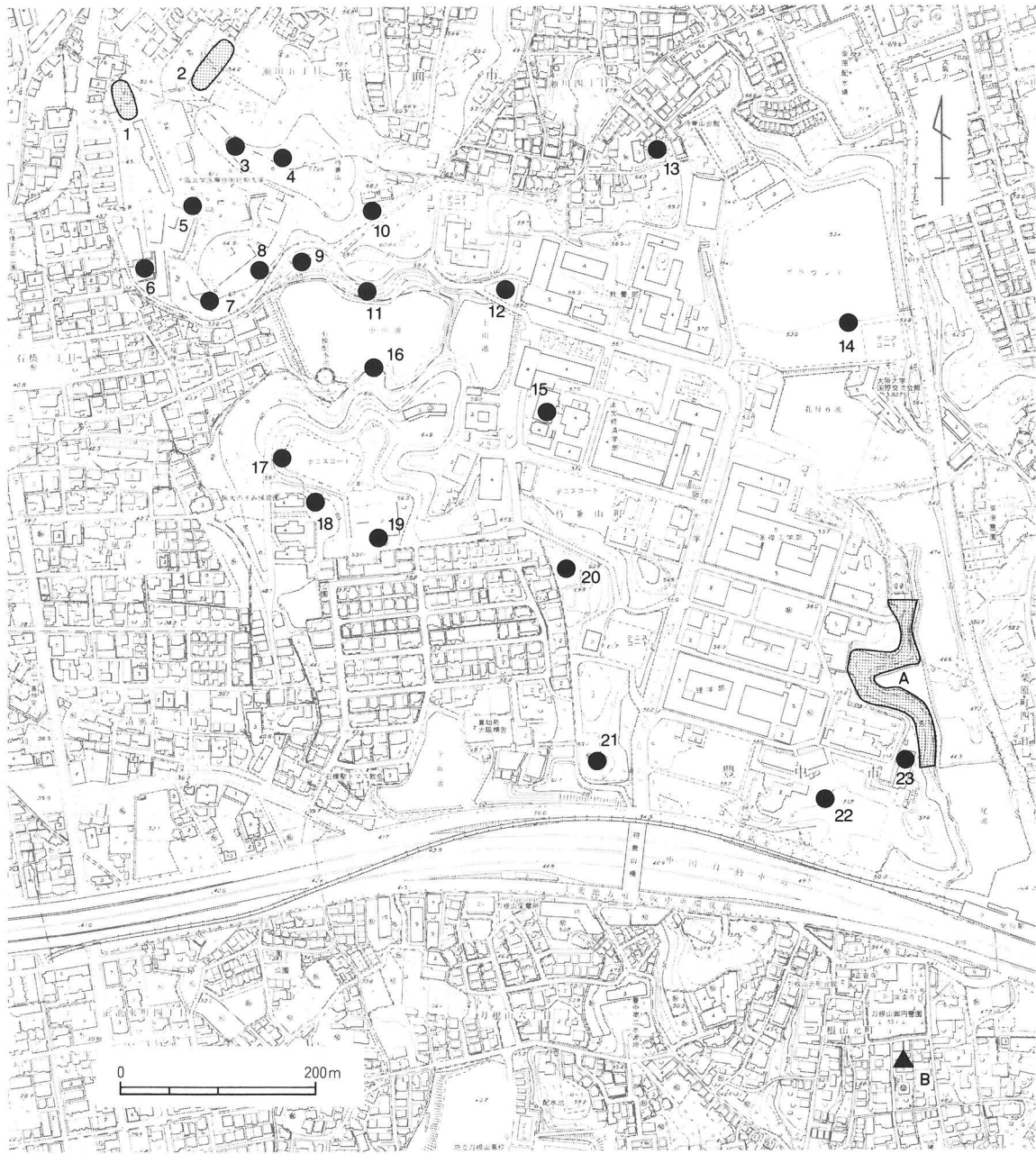
刀根山テニスコート地点では壺・甕・高坏・器台などの弥生土器が出土しており、これらは弥生時代後期中頃から終末期に属するものである。これらの弥生土器は埴輪片などと共に出土しており、削平された古墳の盛土中に含まれていたと考えられる。

こうした調査結果を踏まえれば、遺構は検出されていないものの、キャンパス内に弥生時代中期から後期の終わり頃まで集落が存在していた蓋然性が高い。この集落は周囲を一望できる場所にあるので、高地性集落の性格を有するものと考えられる。待兼山丘陵近辺には同時期の遺跡として、南西に豊中市勝部遺跡、西側に池田市宮の前遺跡（豊中市蛍池北遺跡）がある。高地性集落は低地の大規模な母村集落と有機的な関係を持ちつつ、そこから分岐して成立するという。こうした観点から、待兼山丘陵における弥生集落と猪名川流域の大規模な集落との関係

が問題となろう。

続く古墳時代には、この丘陵上にも多くの古墳が営まれた。現在の大阪大学プール付近には、前期の前方後円墳である待兼山古墳（図3-13）がかつて

存在し、唐草文帯四神四獣鏡や車輪石・石釧・鉄形石など多くの遺物が出土している。待兼山丘陵近辺には、待兼山古墳の他にも前期の前方後円墳といわれる麻田御神山古墳が築かれており、当時待兼山周



1. 旧医療技術短期大学第1調査地点
 2. 旧医療技術短期大学第3調査地点
 3. 待兼山2号墳
 4. 待兼山遺物散布地（須恵器）
 5. 旧医療技術短期大学第6調査地点
 6. 待兼山5号墳
 7. 旧医療技術短期大学第8調査地点
 8. 旧医療技術短期大学第9調査地点
 9. 中山池北岸遺物散布地（須恵器・土師器）
 10. 旧医療技術短期大学第10調査地点
 11. 中山池北岸遺物散布地（土師器）
 12. 上山池北岸須恵器窯跡
 13. 待兼山古墳
 14. 乳母谷池北岸窯跡
 15. 上山池南東V字溝検出地点
 16. 中山池南岸刻印石・石塊集積地点
 17. 刀根山テニスコート地点（待兼山3号墳）
 18. V字溝検出地点
 19. 極限物質研究センター地点（待兼山4号墳）
 20. ラフォレ駐車場地点
 21. 石塚古墳
 22. 古銭出土地
 23. 理学部ラジオ・アイソトープ総合センター地点
- A. 待兼山遺跡第2次（弥生土器・石斧）
 B. 待兼山遺跡第1次（戦国時代埋甕群）
 （A・Bは豊中市教育委員会待兼山遺跡調査地点）

図3 石橋団地とその周辺で検出された主な遺構と遺物

辺に有力な勢力が存在していたことが想像される。

古墳時代中期には、待兼山丘陵上に特に大規模な古墳は築かれていない。しかし、刀根山テニスコート地点(図3-17)や極限物質研究センター地点(図3-19)などでは、古墳時代中期後半から後期初頭に属する埴輪や須恵器が出土している。

刀根山テニスコート地点から出土した埴輪には円筒埴輪のほかには鞍形や家形といった形象埴輪の破片が含まれ、中期後半に比定されている。遺構は伴っていないが、この調査地点付近に古墳が存在していたことは間違いなく、この古墳は待兼山3号墳と呼ばれる。

極限物質研究センター地点で出土した埴輪や須恵器は古墳時代中期末葉から後期初頭のものと考えられている。この地点でもやはり遺構は検出されていないが、まとまった量の円筒埴輪片が検出されたことから、待兼山3号墳と同様に削平された待兼山4号墳の存在が推定されている。

このように、古墳時代中期から後期にかけてキャンパス内を中心にいくつかの小規模な古墳が営まれていたことが明らかにされている。これらの古墳に樹立されたと考えられる埴輪の中に数種類の形象埴輪が含まれていることは、この古墳群に葬られた被葬者の性格を考える上で重要である。

また、正門の西北側にある、現在「大高の森」として整備されている地区には、過去に前方後円墳とされる石塚古墳が存在したといわれ、埴輪片が採集されている(図3-21)。この埴輪に関してはすでに報告されている通り(福永編1988: pp.29-32)、中期に所属する可能性が高い。さらに、旧医療技術短期大学跡地の丘陵の最頂部付近には、古墳状の高まり(図3-3)があり、現在は待兼山2号墳と呼ばれている。墳丘の裾にあたる場所から中期末葉から後期初頭の須恵器片が採集され、当該期の古墳であると推定されている(福永編1988: pp.29-30)。

このように、古墳時代中期の待兼山丘陵上には、石塚古墳をはじめとしていくつかの古墳が点在して存在する様子がうかがえる。待兼山丘陵の南4kmには、摂津でも有数の規模を誇る桜塚古墳群が存在す

る。桜塚古墳群とキャンパス内の小規模古墳との関係が今後注目されよう。

古墳時代の集落址は豊中キャンパス内では未検出であるが、周辺では豊中市柴原遺跡や内田遺跡など複数の遺跡から竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、当時この付近に大規模な集落が展開していた様子がうかがえる。

また、待兼山丘陵の東側に広がる丘陵地には、大規模な須恵器生産地として知られる桜井谷窯跡群が存在しており、豊中キャンパスはその西端に位置する。乳母谷池の北岸(図3-14)や旧上山池北側(図3-12)などで、その窯跡の一部が発見されている。こうした窯跡は、豊中キャンパス内やその周辺に存在する多くの古墳や集落址と、有機的な関連を持って成立したものであると考えられ、大規模に展開していた須恵器生産に従事した集団の存在がうかがわれる。

このほかには、中山池付近で人為的なものと推定される集石が発見されている(図3-16)、その性格は不明である。しかし、過去、旧上山池南東側(図3-15)や刀根山寮付近(図3-18)でV字状の溝が検出されたことや、見晴らしのよい立地条件なども考えると、山城などの施設が中世に存在していたと考えることもできよう。待兼山丘陵付近には、戦国時代に刀根山城が置かれたとされている。豊中キャンパスの南側の待兼山丘陵南端部で行われた豊中市教育委員会による調査では、戦国時代に比定される埋甕群が検出され、刀根山城に関連する貯蔵施設であると推定されている(図3-B)(豊中市教育委員会編1995: p.36)。こうしたことから、豊中キャンパス内には刀根山城に関連する遺構や遺物が存在する可能性も考えられる。

以上のような個別の性格付けが可能な遺構・遺物とは別に、待兼山の最高所よりやや西の地点(図3-4)で須恵器、中山池北岸(図3-9・11)で須恵器や土師器が採集されている。また、それらより時代が下るが、理学部南東の土壇状の高まり(図3-22)から寛永通宝が採集されている(福永編1988: pp.29-32)。こうした遺物に関わる何らかの遺構が

豊中キャンパス内に存在している可能性が高い。

大阪大学豊中キャンパスを含む待兼山丘陵は、平野や川を臨む丘陵という生活に絶好の地であるばかりでなく、旧西国街道に面した交通の要所でもある。そのため、過去の人々によって多様な形で利用されてきたのであろう。(石井)

3 試掘調査の契機と経過

調査の契機と計画 医療技術短期大学部(現医学部保健学科)が吹田地区へ移転した後の跡地(以下、医短跡地)について、教職員や学生、外部の研究者、市民を対象にした文化施設等に利用するなどの案が出された。ただし、これには新たな建設を伴うことが予想されたため、埋蔵文化財調査室は、施設部と協議の上、1997年早春、医短跡地の埋蔵文化財調査計画の策定に着手した。

まず、現状の地形や土地利用状況、およびそれまでの調査成果などを勘案し、医短跡地を20の地点に区分した上で、それらを「旧地形が良好に残存していると思われる箇所」、「丘陵頂部が削平されていると考えられる箇所」、「丘陵が削平あるいは斜面に盛土がなされていると思われる箇所」の3つに大別した。そして、1997～1999年度の3年をかけて、以上の20地点すべてについて、本格的な発掘調査を行う上で必要な基礎資料を得るための試掘調査を実施するという調査計画案を作成した(1997年4月)。

これをもとにして、再度施設部との協議を行ったが、その際、3年で20地点すべての試掘調査を終了するという当初案とは別に、当面長期計画において建物用地として使用しようとしている範囲とその周辺に限定して試掘調査を実施し、緑地として保存する予定の丘陵頂部についてはそれ以降の事態に従って対処するという第2案も検討の対象とした。

1997年6月13日に開催された埋蔵文化財調査委員会において、以上の調査計画案が検討され、保存緑地は当面のあいだ調査範囲からはずし、残りの部分について3年計画で試掘調査を実施すること、ただし予算確保が困難な場合は4年計画となる可能性があるという基本方針が確認された。また、測量基準

点の設置や詳細な測量図の作成、あるいは発掘調査に必要な測量機器などの備品を常備することの必要性も確認された。

これを受けて、埋蔵文化財調査室では、あらためて調査計画の検討に入り、幾度かの協議と修正を重ねた結果、1998年1月に最終的な調査計画案を作成した。そこで示された内容のうち、調査目的と方法について以下に整理する。

調査目的は、医短跡地における埋蔵文化財についての基礎データを収集し、新規の開発計画に伴う事前発掘調査に必要な資料を作成することである。この目的を達成するために、以下の方法で調査を実施する。

①3級基準点に相当する恒久的な測量基準点を、当面必要だと思われる3地点に設置する。ただし、将来的には丘陵頂部にも恒久的な測量基準点をいくつか設置することが望ましい。

②医短跡地を16地点に区分する(図4)。これは、当初計画における20地点を、保存緑地部分等を考慮し再検討したものである。

③16地点を「当面、立会調査で対応する地点」、「1997～1999年度に試掘調査を実施する地点」、「2000年度以降の調査地点」に大別する。

④「当面、立会調査で対応する地点」(第11～第14地点)とは既存建物が存在する地点であり、当面、建物撤去に伴う立会調査で対応する。ただし、建物撤去が完了し、進入路の確保がなった場合は、試掘調査を行う可能性があるため、計画の再検討を含め今後の柔軟な対応が必要な地点である。「2000年度以降の調査地点」(第15・第16地点)とは保存緑地部分であり、2000年度以降の調査計画を立てる際に、試掘調査実施の可能性をも含め、調査方法の再検討を行うべき地点である。

⑤「1997～1999年度に試掘調査を実施する地点」(第1～第10地点)では、バックホウおよび人力によりトレンチを掘削し、土層の堆積状況や遺物の包含状況、遺構の有無などを確認する。この試掘調査は、今後の本格発掘調査に必要な基礎資料を得ることを目的とするものであり、新規開発計画が具体化した

際には、今回の試掘調査のデータをもとに、本格発掘調査の範囲や方法などを含めた再度の計画立案が必要である。

⑥試掘調査後は旧状に復する。

⑦出土遺物や調査で作成した図面・写真などを整理し、予定の試掘調査が終了した時点で、報告書を作成する。

⑧出土遺物の保存処理を行い、展示と保管を行う。
建物撤去と基準点設置 さて、医短跡地の既存建物撤去作業が本格化したのは1998年2月のことである。上記調査計画に従い、頻繁に立会調査を行なったが、建物基礎部分を超えて大きく掘削することはほとんど行われず、この時点では埋蔵文化財の存在を確認することはできなかった。

またこれに並行して、測量基準点設置のための選点作業を行った。そして3月になって基準点の設置が完了し、ようやく今後の試掘調査実施へ向けての

準備が整ったのである。

(杉井)

試掘調査の経過 試掘調査の準備はこのように進んだ一方で、建物撤去作業は遅れていた。そのため、1997年度に調査を行う予定になっていた第1・第2調査地点を当該年度に調査することができなくなってしまったのである。建物撤去作業の完了を待っているのは、調査遂行に支障が生じ、ひいては文化財保全という所期の目的を達成できなくなる可能性もあった。そこで、医短跡地における遺跡の全容を効率よく把握するため、1997年度は、建物撤去作業がいち早く終了した第13地点南半部を調査することとなった。1997年度に行う予定であった調査地点が次年度以降に繰り越されることとなったため、当初の3年計画では調査を完了することが困難となり、4年計画に変更されることになった。

1998年度は第1・第2・第5・第6調査地点を調査した。調査は、重機により筋掘りを行い、人力で

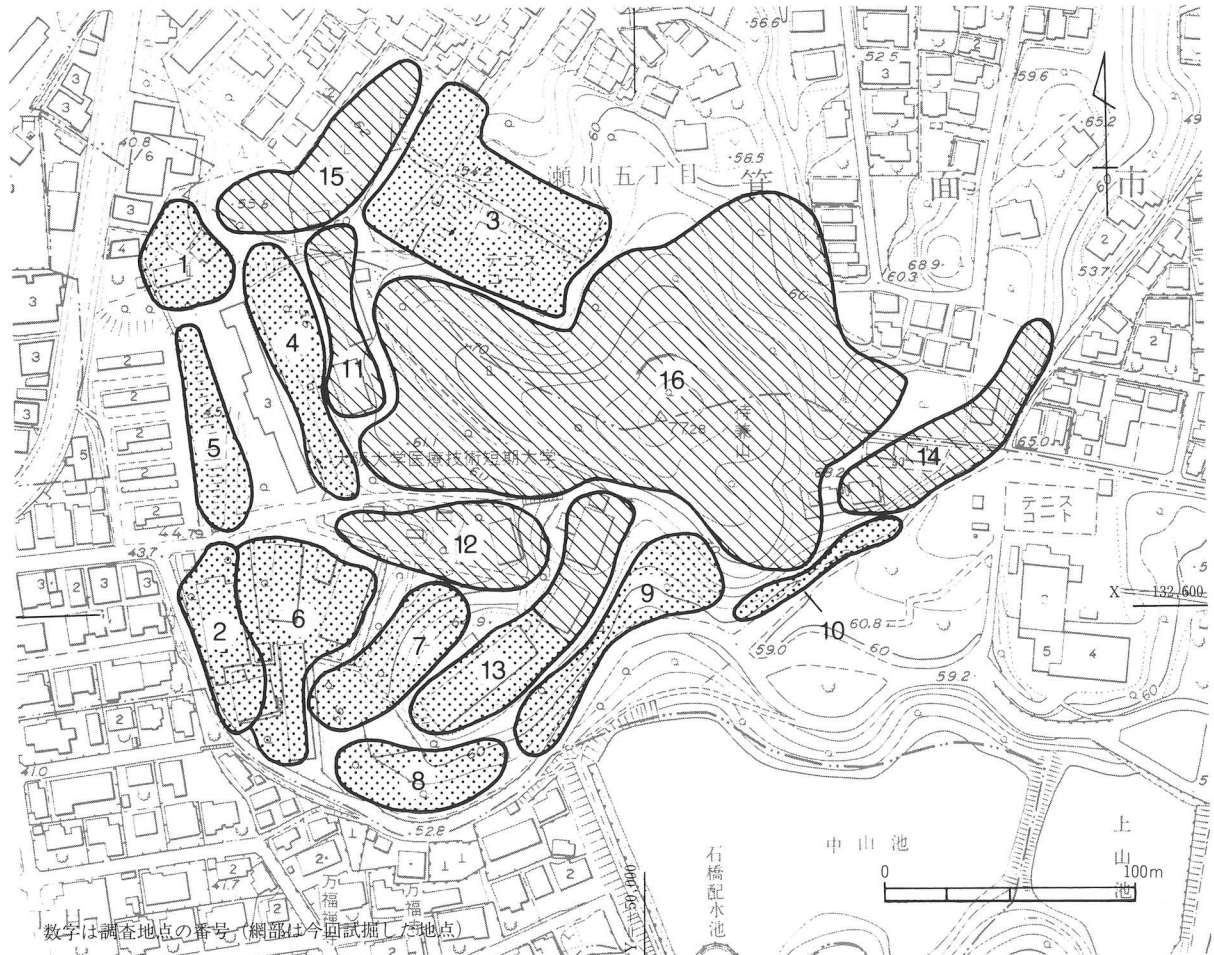
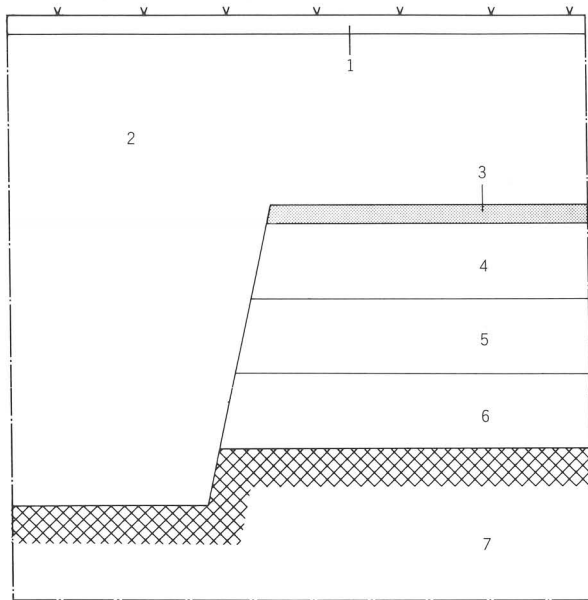


図4 旧医療技術短期大学跡地調査計画図



1. 現地表 2. 造成土 3. 旧地表
4~6. 流土層 7. 地山 (大阪層群)

図5 基本層序モデル

精査を行い、遺構と遺物の有無を確認するという方法を行った。ただ、キャンパス造成によってできた崖面が医短跡地各所にあるので、この部分も精査を適宜行い、埋蔵文化財の遺存状況を把握するよう務めた。

1999年度は第3・第4・第7・第8調査地点、2000年度には第9・第10調査地点を調査した。整理作業は、調査が終了した地点から随時開始し、本報告刊行に向けて作業を進めた。

調査は杉井が第13調査地点を担当したほかは、すべて清家が担当した。調査には大阪大学大学院文学研究科考古学研究室の大学院生と学部生、ならびに大阪大学考古学研究会の会員が参加した。各年次の参加者は次の通りである。

【1997年度】寺前直人・林正憲・忽那敬三・藤井章徳・重松辰治・瀬川貴文・中原計・福辻淳

【1998年度】寺前直人・岡寺良・上田健太郎・忽那敬三・後藤理加・三浦俊明・藤井章徳・中村大介・石井智大・瀬川貴文・中原計・福辻淳・森岡環・渡辺佑典・上坂裕子・高松雅文・和田一之輔

【1999年度】寺前直人・長友朋子・西谷彰・林正憲・三浦俊明・石井智大・瀬川貴文・中原計・中村大介・

上坂裕子・河奥祥子・河盛久美・北村順子・西念祐馬・高松雅文・若菜愛・和田一之輔・小川智子・柏原龍嗣・塩谷晃世・向井佑介・森先一貴

【2000年度】長友朋子・西谷彰・林正憲・石井智大・瀬川貴文・中原計・福辻淳・安東裕世・伊藤文彦・大西美緒・塩谷晃世・中川二美・向井佑介・森先一貴・望月誠子

整理作業は調査参加者のほとんどが従事し、これ以外に前田敬映・小埜光樹・久田祥子・松本史彦・横田深一郎・樫田妙・金田啓・田中由理・中村里美・吉田知史・渡辺今日子が作業に加わり、整理作業を遂行した。

4 基本層序

先述のように、旧医療技術短期大学跡地は、キャンパス造成のため、削平を被ったり、新たに造成土が盛られた箇所が多い。削平を受けずに土が盛られた場所は、かつての地表が薄く黒い層となって残る(図5)。これを旧地表あるいは旧表土と本報告では呼ぶ。旧地表が遺存しておれば、それは造成前の旧地形が保存されている証拠であり、旧地表の下層は、造成前に堆積した土である。多くは、丘陵上部の土砂が流出し、堆積した層であるが、調査地点によっては遺物包含層が存在する場合もある。また、本報告では洪積層を地山と表現する。旧医療技術短期大学跡地で観察できる地山は基本的に大阪層群である。(清家)

注

(1)遺跡の後の番号は図2に対応する。

参考文献

都出比呂志編 1984『待兼山遺跡』大阪大学、大阪

豊中市教育委員会編 1995『豊中市埋蔵文化財年報』3、大阪

豊中市教育委員会編 1996『豊中市埋蔵文化財年報』4、大阪

福永伸哉編 1988『待兼山遺跡II』大阪大学埋蔵文化財調査委員会、大阪

Ⅱ 旧医療技術短期大学跡地の埋蔵文化財試掘調査

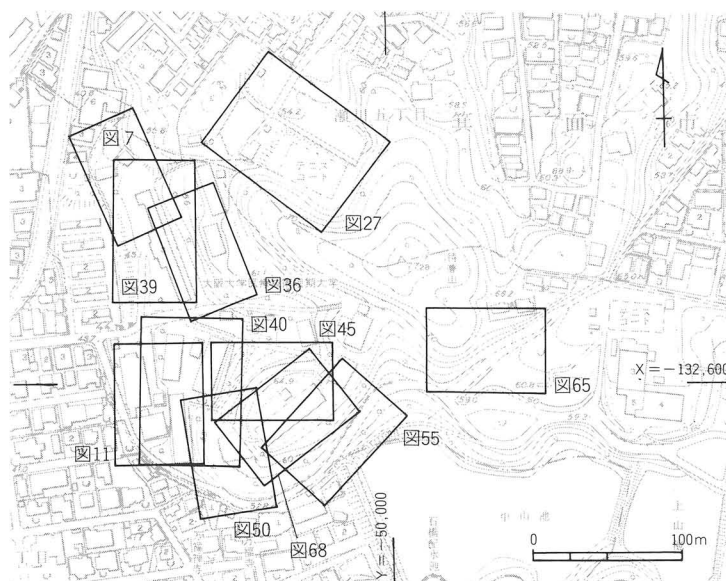


図6 トレンチ配置図と旧医療技術短期大学跡地地図との対応

第1調査地点の成果

調査面積：50㎡

調査期間：981201～990331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第1調査地点は旧医療技術短期大学跡地の北端に位置し、旧短期大学本館のすぐ北側にある。当地点の北側に隣接するマンションでは、豊中市教育委員会と箕面市教育委員会による建築前の立会調査で二重口縁壺が採集されたという。地形的には待兼山の頂上から北西にのびる尾根の西側斜面にあたるが(図4)、現在は調査区の北端を除いて平坦地となっている。この平坦地は、旧本館建設の際に行われた造成によって形成されたと考えられ、当地点は大きく改変を被っている可能性が高いことが調査前から予想された。

そこで、旧地形が保存されている可能性が高いと考えられた当調査地点北半を中心に5カ所のトレンチを設定した。

調査成果 当調査地点の北半では、第1トレンチと第2トレンチを設定した。第1トレンチでは地山までおよぶ削平が部分的にみられたものの、おおむね旧地形が遺存していることが明らかになった。地山

の上に堆積した流土層から埴輪の小片が出土した。この第1調査地点の東側に位置する第15調査地点は、待兼山頂上から西側に続く尾根の頂部にあたり、古墳の築造を行うには絶好の場所である(図4)。第1トレンチから出土した埴輪の存在は、第15調査地点に古墳が存在する可能性を示すものとして注目される。

第2トレンチではまったく攪乱が認められず、旧地形をとどめていることが確認された。上から表土、明黄褐色粘質土、黄褐色砂質土、黒褐色粘質土が堆積し地表下1mで地山に到達する。遺物は認められなかった。

第3トレンチは当地点の北西に設定したトレンチである。第1調査地点は基本的に東から西に向かって下る緩やかな傾斜面上に存在するが、第3トレンチを設けたこの部分だけが周辺より1～2m程度高く、小山状を呈していた。調査の結果、この小山は造成土によって構成されていることが判明した。

第4トレンチは、当調査地点の平坦面中央に設定した試掘坑である。ここでは表土から1mまで造成

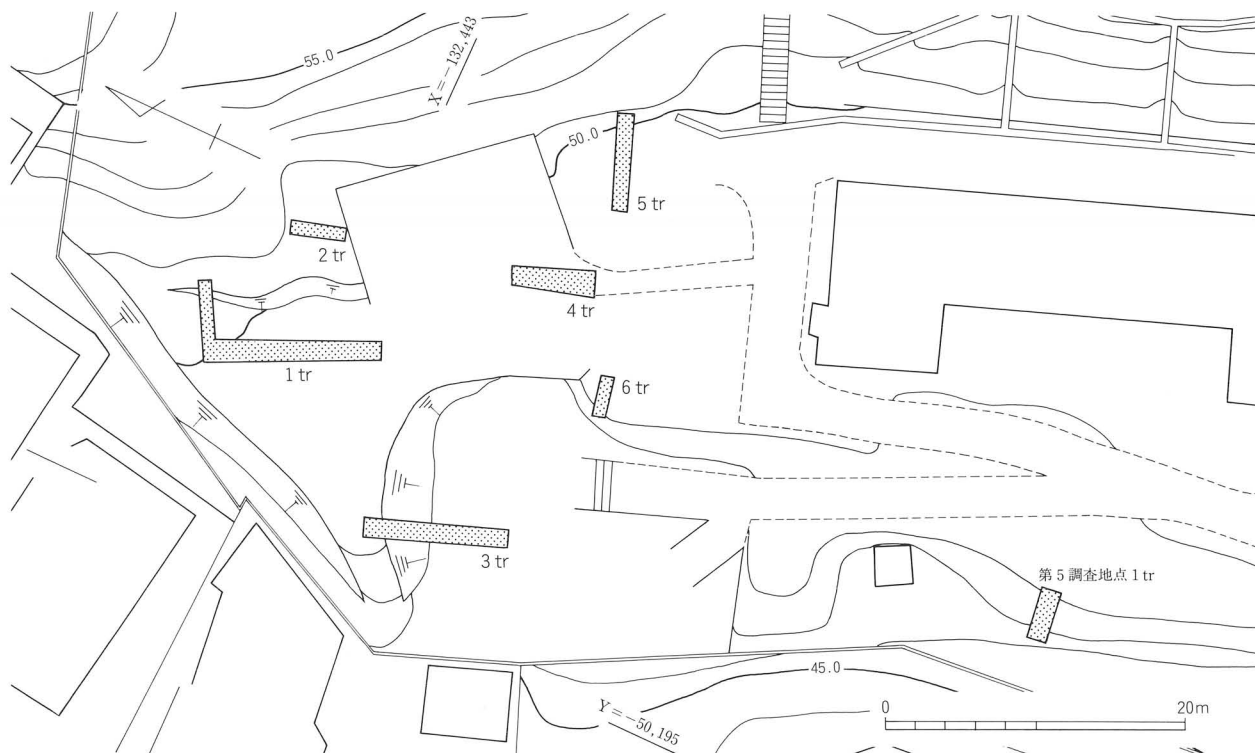


図7 調査区配置図

土が堆積していたが、それ以下では旧地形をとどめていた。上から表土・造成土・黒褐色粘質土・灰黄褐色粘質土が堆積し、地表下1.4mで地山に到達する。遺物ならびに遺構は検出されなかった。このトレンチで検出された黒褐色土は第2トレンチの黒褐色土ときわめてよく似ており、同一層の可能性があろう。ただ、第4トレンチで検出された黒褐色土と地山面は、第2トレンチで検出された黒褐色土と地山面より2.5mも低い。このことから考えて当トレンチ周辺の旧地形は、部分的に谷地形を呈していると考えられる。

第5トレンチは調査区の東端に設定したトレンチである。ここは地山にまで及ぶ削平を被っていた。深さ80cm程度の造成土直下から地山が検出された。遺構は検出されなかったが、廃土中から須恵器片が1片出土した。

当調査地点から出土した遺物はいずれも小片であるため図示するには至らなかった。須恵器は甕の胴部破片であり、内面に同心円タタキを残す。6世紀代のもと考えられる。埴輪片と土師器片は、細片のため所属する時期を決定しがたい。

小 結 今回の調査では、遺構は認められなかったものの、第1トレンチと第5トレンチから埴輪片・土師器片・須恵器片が出土した。第1・第5トレンチはともに、待兼山の頂上から北西にのびる尾根の傾斜面あるいはその裾部分にあたる。よって、これらの遺物は、当調査地点の東にある第11調査地点、あるいは第15調査地点周辺から流出してきた可能性が高い。当調査地点北側隣接地にあるマンション建設に伴う立会調査では二重口縁壺片が出土したという。この土器も同様に丘陵の上部から流出してきた可能性が高い。つまり、当地点の東側には、古墳や弥生時代の墳墓などの遺構が存在する可能性が高いのである。とくに第15調査地点は、旧地形が保たれている様子が地形図から読みとることができるので、そうした遺構が遺存している可能性は十分に考えられる。遺物が出土した当調査地点の北半とその周辺の開発行為には十分注意ををらう必要がある。(清家)



図8 調査地点全景（南から）

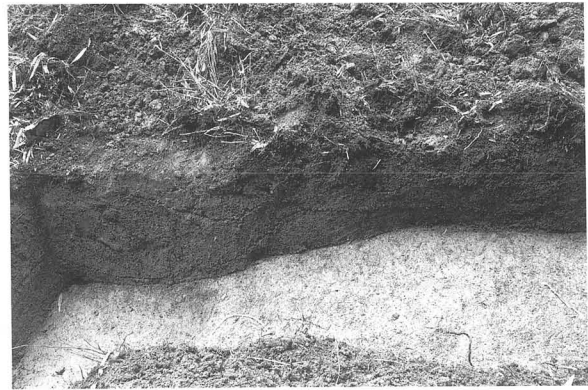


図9 第1トレンチコーナー部（南から）



図10 第4トレンチ全景（南から）

第2調査地点の成果

調査面積：200㎡

調査期間：981201～990331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第2調査地点は旧医療技術短期大学本館の南側にあたり大阪大学石橋団地に通ずる通学路沿いに位置する。ここは旧医療技術短期大学跡地の中でも、第6調査地点に次いで広い平坦地であり、かつては平屋建ての食堂が建ち並んでいたという。この平坦地に6箇所のトレンチを設定した。

調査成果 当調査地点の南半に設置した第1トレンチと第2トレンチでは古墳の周溝と思われる溝を検出することができた。

第1トレンチでは旧表土は失われており、一度削平が行われた後、造成土が積まれたものと推定される。造成土の下には3～11層が堆積する。旧表土は認められないが、3～11層からは埴輪片が少量出土

したほかは新しい遺物が含まれていないので、造成前から堆積していた土層であると思われる。トレンチの南半部ではトレンチ東壁面の22層上面から掘削された溝状の遺構を検出した。溝は東西方向を直線的に走り、溝内から多量の埴輪が出土したことから、古墳の周溝と考えられる(図12)。

周溝の幅は、溝の南側の肩が調査区の外にあるため不明であるが、深さは75cmを計る。埴輪は北側から倒れ込んだような状況で出土した(図17・図18)。溝の底は平坦ではなく、若干の凹凸が認められる。周溝の北側でも遺構がいくつか存在するので、古墳が築造される前の遺構である可能性が考えられる。

周溝は22層から掘削されている。このことから、22層は周溝掘削以前に堆積した土であり、古墳の盛

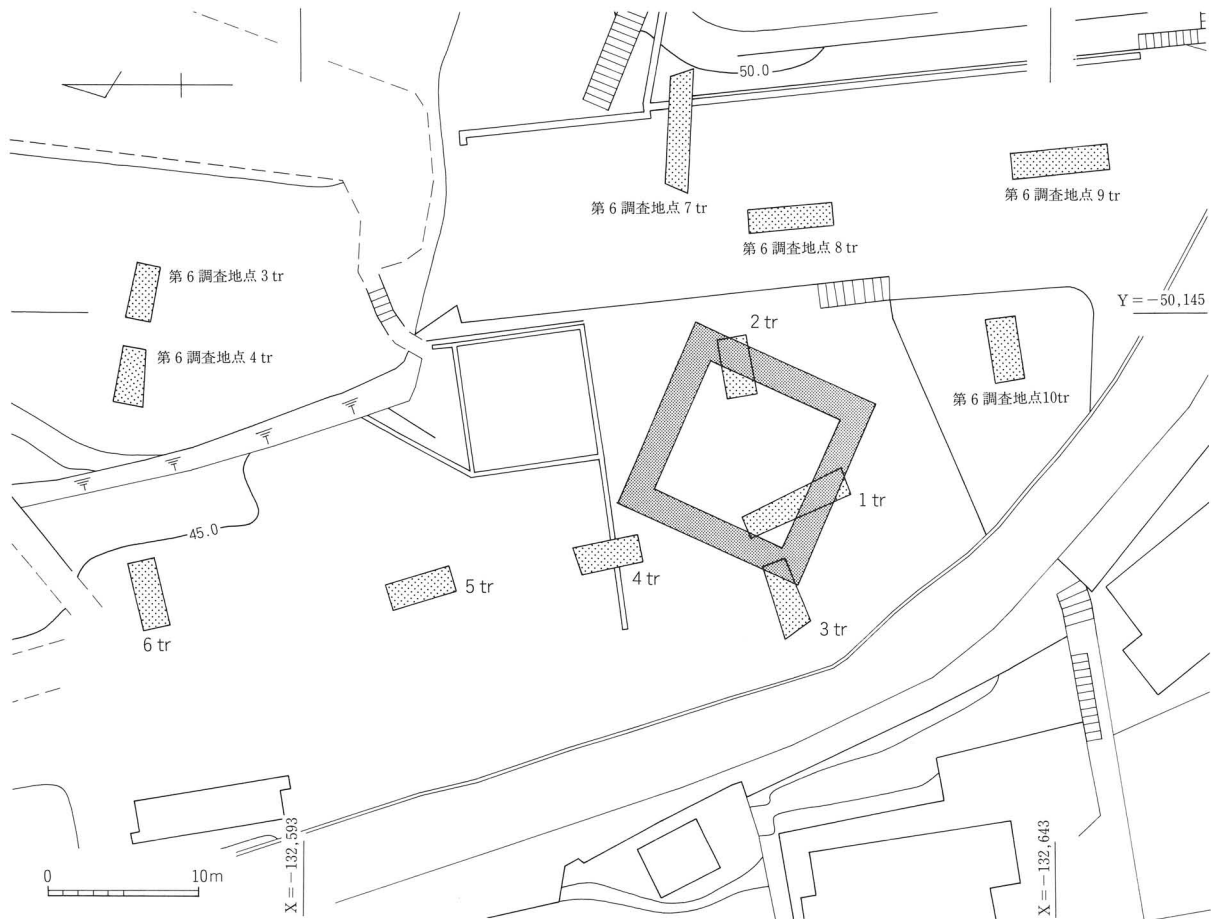
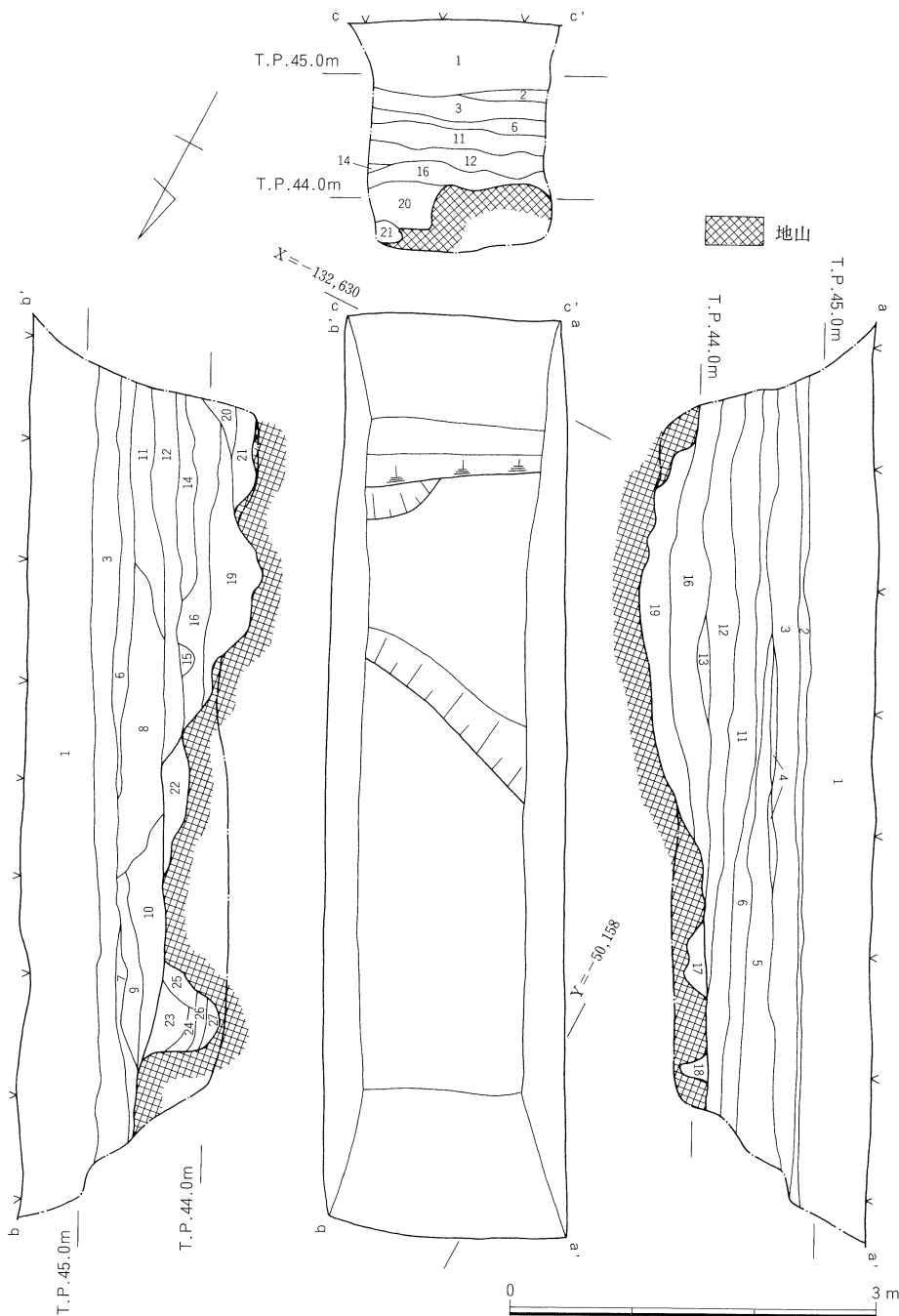


図11 調査区配置図



1. 黄褐色(2.5Y6/6) 細粒砂～粗粒砂+褐色(10YR4/4) シルト～中粒砂
2. オリーブ褐色(2.5Y4/4) シルト～粗粒砂
3. にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト～粗粒砂
4. にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト～粗粒砂+褐色(10YR4/4) シルト～中粒砂
5. 黄褐色(10YR5/6) シルト～粗粒砂
6. 灰黄褐色(10YR4/2) シルト～粗粒砂+褐色(10YR4/4) シルト～中粒砂
7. 灰黄褐色(10YR4/2) シルト～粗粒砂+にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト～中粒砂
8. にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト～中粒砂
9. 褐色(7.5YR4/4) シルト～粗粒砂
10. 褐色(7.5YR4/4) シルト～粗粒砂+にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト～中粒砂
11. にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト～粗粒砂+褐色(10YR4/6) シルト～粗粒砂
12. 褐色(10YR4/6) シルト～粗粒砂+黄褐色(2.5Y5/3) シルト～粗粒砂
13. 褐色(10YR4/4) シルト～粗粒砂
14. 褐色(7.5YR4/4) シルト～粗粒砂
15. 暗褐色(10YR3/3) シルト～粗粒砂
16. 褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂
17. 褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂
18. 褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂
19. 灰黄褐色(10YR4/2) シルト～中粒砂
20. 褐色(10YR4/6) シルト～粗粒砂+暗褐色(10YR3/4) シルト～中粒砂
21. 暗褐色(10YR3/4) シルト～中粒砂
22. 褐色(10YR4/6) シルト～粗粒砂
23. 褐色(10YR4/4) シルト～中粒砂
24. にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト～中粒砂+褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂
25. 褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂+にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト～中粒砂
26. 褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂+にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト～中粒砂
27. 褐色(10YR4/6) シルト～中粒砂

図12 第1トレンチ平面・断面図



図13 調査区全景（南から）

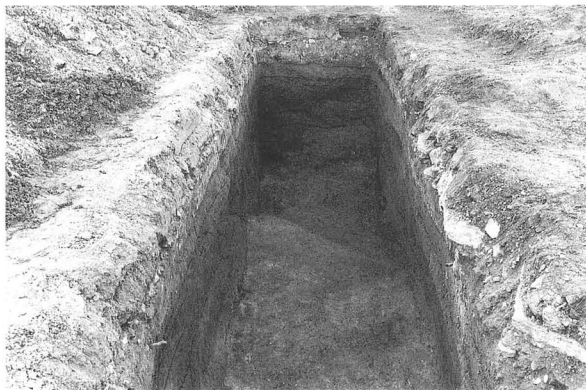


図14 第1トレンチ全景（北から）

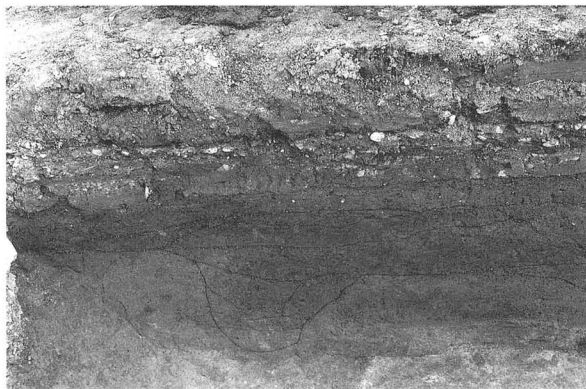


図15 第1トレンチ東壁土層（北半）



図16 第1トレンチ東壁土層（南半）

土である可能性を持つ。盛土が部分的に残っているのであれば、埋葬施設が削平されずに残っている可能性は高い。周溝の北側に人為的掘削の跡が見られるが(23~27層)、この遺構が埋葬施設の端部である可能性も捨てきれない。周溝の中から埴輪に混じって鉄器片が一片出土しているが、この古墳の埋葬施設に伴う可能性がある。

また周溝埋土のさらに上にある10層・11層でも掘削された痕跡が見られる(8層)。この掘削も古墳埋没後の遺構である可能性がある。

第2トレンチは、地山直上面まで削平を受けたようであり、造成土直下から地山を検出した。しかしその地山直上で古墳の周溝と考えられる溝を検出している。溝内からは第1トレンチと同時期と考えられる埴輪が出土している。

第2トレンチで検出された周溝は第1トレンチの溝よりも60cmもレベルが高く、同一の古墳の周溝と想定するには躊躇を覚える。しかし、第2トレンチの東側は擁壁があり、擁壁が作られる前は、急な斜面あるいは崖が形成されていたと推測される。そのため第2トレンチの溝は東側に屈曲することは考えられず、西側に屈曲せざるを得ない(図11)。さらに第1トレンチと第2トレンチで検出された溝は、延長すると直角に交わる。出土した埴輪も同時期に属すると考えられるので、2つの溝は同一古墳の周溝と考えた方がよい。

第1トレンチの周溝肩が直線的であることや、第1・第2トレンチの周溝が直交することから、墳形は方墳と考えられる。また、先述の通り第2トレンチの東側は擁壁があり、もともと崖状の地形があったことが想定され、この擁壁手前で周溝が曲がらざるをえないので、その墳丘規模は一辺10mを大きく越えることはないと考えられる。

これまでに待兼山遺跡では4基の古墳あるいは古墳跡の存在が確認されている。戦前に唐草文帯四神四獣鏡を出土した古墳は待兼山古墳と呼ばれている。大阪大学考古学研究室ならびに埋蔵文化財調査室の調査により3基の古墳の存在が確認されている(福永編1988)。それぞれ待兼山2号墳・3号墳・4号墳

と呼ばれている。よって、今回検出された古墳は待兼山5号墳ということになる。

第3トレンチは第1トレンチの西側に設定したトレンチである。待兼山5号墳の西側周溝が検出されると予想されたが大きく削平を被っており、その存在を確認することはできなかった。第4トレンチもキャンパス時の造成が及んでおり、地山直上まで攪乱が及んでいた。しかし、地山面には人為的な掘り込みが認められた。時期は明確ではないが新しい遺物は混入していないので、キャンパス造成時のものではないと考えられる。これも遺構と考えてよい。なお、造成土中から埴輪片が数点出土している。

当調査地点の北半に設定した第5トレンチと第6トレンチでは、表土直下から地山が検出された。当調査地点の旧地形は現在の標高よりも高く、キャンパス造成時に削平を被ったものと思われる。以上のことから、第2調査地点の旧地形は、北東から南西方向に下る緩斜面であったと思われる。当調査地点の南側に位置する第6調査地点第10トレンチでは旧地表が遺存しており、その高さはT.P.+46.5mであり、第2調査地点第1トレンチの遺構面よりも2m高い。つまり、古墳は谷地形の低いところに築かれていたものと思われる。谷部に古墳が一基だけ孤立して立地することは不自然な現象であるので、待兼山5号墳以外にも周辺に古墳が存在した可能性も考えられる。(清家)

出土遺物 第2調査地点から出土した遺物は1点の不明鉄器以外すべて埴輪である。図22-7・8は第2トレンチから、それ以外は第1トレンチから出土している。なかでも1~6はいずれも第1トレンチの周溝から出土しており、とくに5や6など完形に復元できた個体の破片は溝底部より、まとまって出土している(図17)。出土した埴輪片はいずれも土師質であり、無黒班であることから窖窯焼成であると考えられる。

図21-1は円筒埴輪の胴部片で、復元最大径約15.5cmである。外面には9条/cmのタテハケが認められ、タテハケ後に突帯が貼り付けられている。この

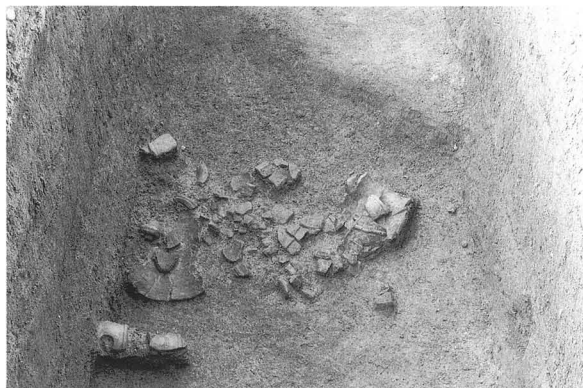


図17 第1トレンチ埴輪出土状況1



図18 第1トレンチ埴輪出土状況2



図19 第2トレンチ全景



図20 第5トレンチ東壁

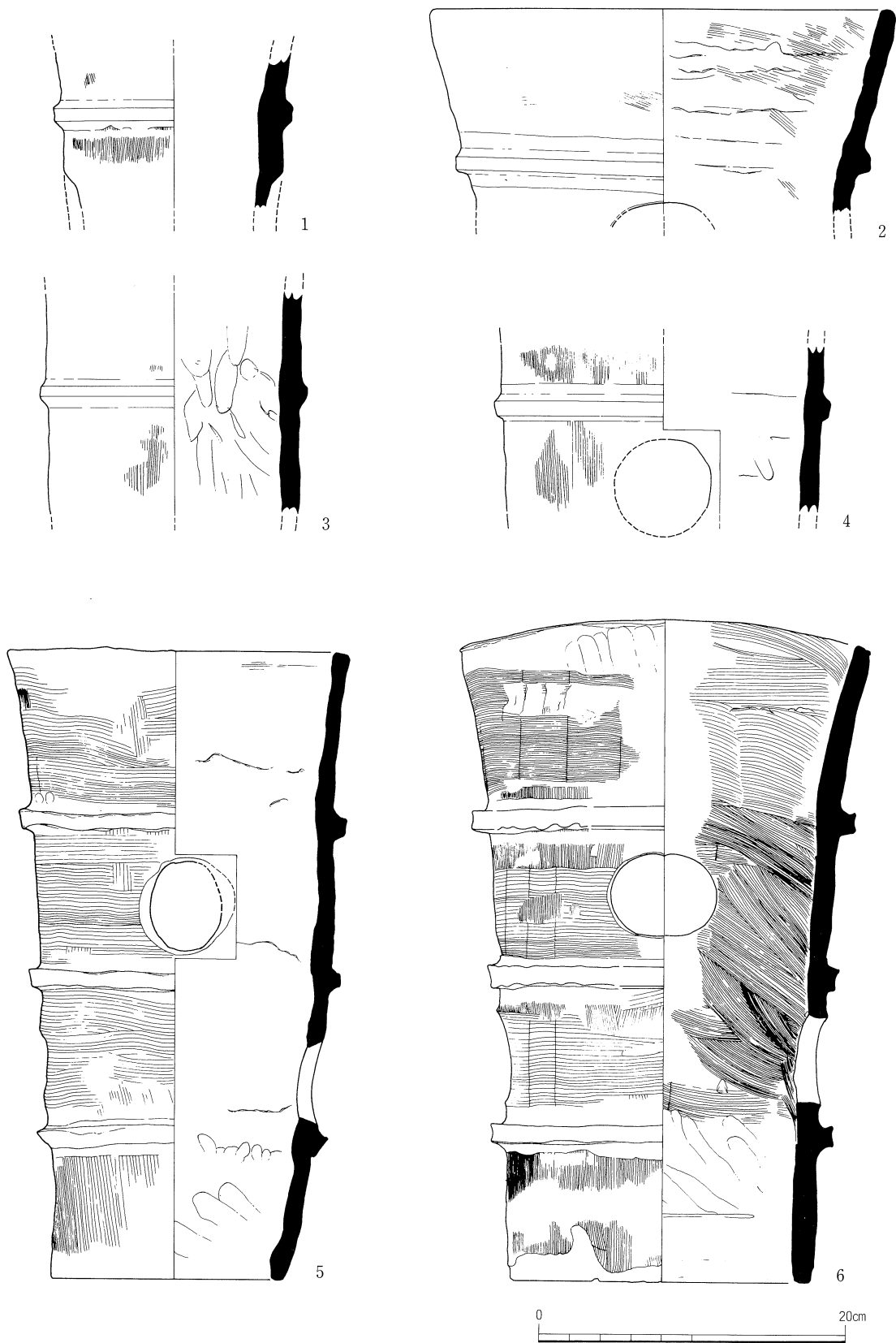


図21 埴輪実測図1

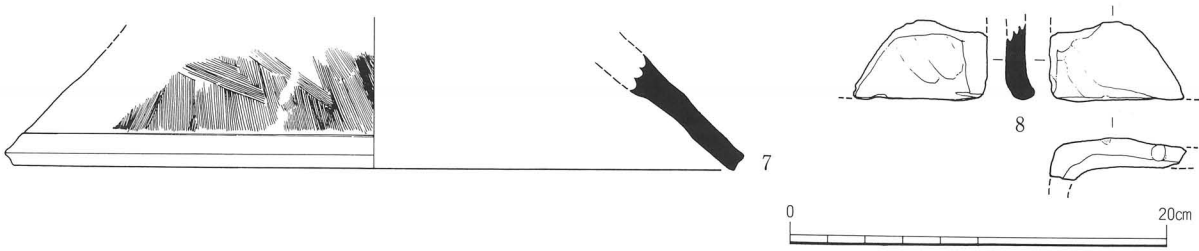


図22 埴輪実測図 2



5

図23 円筒埴輪 1



6

図24 円筒埴輪 2

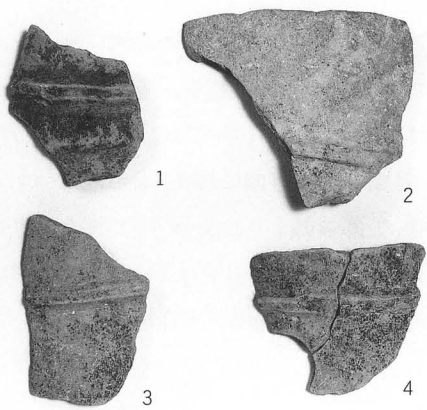


図25 円筒埴輪 3

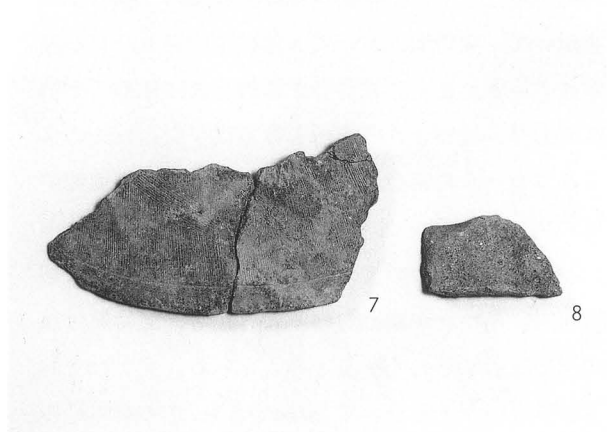


図26 形象埴輪
(写真内の番号は図21・図22に対応)

破片の下端は粘土紐の剥離面である。この剥離状況から最下段を含む個体である可能性が高い。2は普通円筒埴輪の口縁部片で口径のうち1/6が残存しており、復元口径は約30cmである。外面にはわずかに斜め方向のハケが認められるが、器面の磨耗が激しく詳細は不明である。内面にはナデの後、斜め方向に8条/cmのハケメが施されている。また粘土紐の継ぎ目が部分的に残存しており、およそ2cm間隔で粘土紐の継ぎ目が観察できる。3は円筒埴輪の胴部片で、復元最大径約16.5cmである。1、2同様器面の風化が激しく外面にはかろうじてタテハケが観察できるにすぎない。内面には縦方向のナデが認められる。4は円筒埴輪の胴部片で、復元最大径21cmである。比較的器面の残存状況は良く、突帯貼付時のヨコナデに切られる7条/cmのタテハケが認められる。また、内面には縦方向のナデが観察できる。突帯下半に円形スカシ孔がみられることから、本例については突帯貼付後のハケ調整は行われていないと考えられる。

5は完形に復元し得た普通円筒埴輪で、全体の約7割が残存している。器高41.1cm、口径20.2cm、基底径14.7cm、突帯3段を有する。胴部1段目と2段目のそれぞれ2箇所位置をたがえて直径5cmほどの円形スカシが設けられている。突帯の形態は断面台形が主であるが、最下段は突帯上端が突出し、断面三角形となっているのが特徴的である。また、最下段を含め突帯間隔は10cm前後と共通している。外面調整としては突帯貼付後に原体幅約3cmの工具を用いて、突帯間において3周程度のヨコハケが施されている。また、ヨコハケの静止痕は極めて不明瞭であり、観察される箇所も非常に少ない。このようなヨコハケの特徴は、一瀬和夫による円筒埴輪の外面調整分類Bb-1種ヨコハケに相当する(一瀬1988)。最下段については突帯貼付時のヨコナデに切られるタテハケが認められることから、突帯貼付後の調整は省略されていると考えられる。タテハケおよびヨコハケとも6~7条/cmであり、他の個体にみられるハケメに比べてやや粗い。内面には、ほぼ全面にナデ調整が施されている。

6も完形に復元し得た普通円筒埴輪で、全体の約5割が残存している。器高は43.1cm、復元値ではあるが口径は約26cm、基底径は約20cmで、突帯3段を有する。5と同じく1段目と2段目のそれぞれ2箇所位置をたがえて直径6cmの円形スカシがヨコハケ後に穿孔されている。全体の形態は、底部から口縁部にかけてやや外反する。突帯の形態は断面台形であるが、強めのナデにより端部はM字状を呈する。最下段および突帯間隔ともに10cm前後であり、各突帯の間隔が5と共通していることには注意が必要である。外面調整としては7~8本/cmのタテハケが施されており、突帯貼付後、胴部1段目と2段目には明瞭な静止痕をもつヨコハケが施されている。口縁部にも静止痕をもつヨコハケが施されているが、前者が原体幅約6cmで5~6条/cmの調整具を用いているのに対し、口縁部には原体幅約7cmで9条/cmの調整具が使用されている。内面にも底部から約10cmの範囲を除く全面に原体幅2.5cm以上で9条/cmの斜め方向のハケメが認められる。

また、口縁部より12cmの範囲には4~5条/cmのハケメが施されており、外面における胴部と口縁部のヨコハケの差異に対応する。このような内外面の調整における胴部と口縁部の相違より、胴部を仕上げた段階で乾燥工程がおかれた可能性が想定できよう。また、基底部から5cmの範囲には横方向の軽いケズリが認められることから、製作工程の最終段階で埴輪を倒立させて、底部調整を行っている可能性がある。

次に図22掲載の形象埴輪の説明に移る。7は蓋形埴輪の笠部片と考えられる。笠部最大径を復元するならば約39cmとなり、復元径に対して約1/7の残存となる。外面には縦方向に10条/cmと密なハケメが施された後、笠部端部より1.5cmの幅でヨコナデが認められる。このヨコナデ時に幅0.7mmの沈線が形成されているものの、この沈線が文様を意図しているかは不明である。また、内面にはやや強めのヨコナデが施されている。

8は不明形象埴輪片である。細片であるうえに風化が著しいため不明な点が多いが、下端がわずかに

外反しており、底部である可能性がある。

埴輪の編年的位置 では、次に当調査区出土埴輪群の帰属時期について考えてみたい。まず、いずれの個体も無黒斑であることから窠導入以後であることは確実である。さらに突帯貼付後の外面調整のありかたに注目すると、静止ヨコハケが施された個体が存在する一方で、突帯貼付後の外面調整が省略された個体も認められる。

円筒埴輪の編年は、川西宏幸による5期編年が今日最も普及している(川西1978)。今回の資料は、氏の編年観によればIV期とV期に属するものが同一の溝より出土していることから、川西氏の編年案を採用するならば、これらはIV期からV期の移行期として位置づけられよう。しかしながら、川西氏以後の円筒埴輪研究の中で、次のような研究の深化がなされていることには注意が必要である。例えば、天野末喜と松村隆文は、大阪府南部に位置する古市古墳群の円筒埴輪の変遷を述べるなかで、次のような指摘を行っている(天野・松村1992)。それは、突帯貼付後の器面調整、いわゆる2次調整の比率が、川西氏の編年観でいうところのIV期からV期にかけて徐々に低下していくということ、そして2次調整省略の動向が埴輪の法量ごとに異なるということである。例えば底部径15cm程度の小型円筒埴輪では2次調整の採用期間が極めて短いことから、円筒埴輪を法量によって大・中・小型に分類し、それぞれに編年基準を設ける必要があると述べている(天野・松村1992：p.67)。また、大阪府中部に位置する長原古墳群出土の埴輪を編年した積山洋は、氏がC類とする無黒斑で外面に2次調整をもつ円筒埴輪をもつ古墳と、C類と無黒斑で2次調整をもたない円筒埴輪(D類)をもつ古墳は、両者とも陶邑編年I型式1段階(田辺編年TK73型式)から3段階(TK208型式)の須恵器が出土しており、現状では明瞭な時期差は認められないと述べている(積山1992：p.37)。

では、以上の指摘をふまえた上で、当埴輪群には、どのような編年的位置を与えることができるであろうか。まず、注意が必要なのは今回検出した円筒埴輪のうち径が復元できたものでは、口縁部径が

30~20cm、底部が20~15cmとなり、小型のものがほとんどであるという点である。したがって、近年の研究成果を参考にするならば、小型円筒埴輪で構成された当調査区の円筒埴輪を、川西氏による円筒埴輪編年のIV期からV期への移行期とすることは必ずしも適当ではない。

同様の状況は当古墳群の南東約3.5kmに位置する豊中市桜塚古墳群のなかでも見受けられる。例えば、1992年に行われた桜塚古墳群第4次調査では、北天平塚古墳の周濠の可能性のある遺構が検出された。当遺構からは、静止ヨコハケが施された小型の円筒埴輪と突帯貼付後のハケ調整が省略された円筒埴輪が相伴して出土している。さらにこれらの埴輪とともに内面スリケシが施された須恵器大甕が出土しているのである(橘田1993)。このような特徴をもつ須恵器大甕は、TK23型式以前に一般的である(田辺1966：p.40)。また、TK73型式の須恵器が出土しており、副葬品の内容からも時期の評価が定まっている桜塚古墳群の御獅子塚古墳の円筒埴輪には、当調査区出土の埴輪群に認められない最下段に対するヨコハケが施されており、かつ静止ヨコハケはBb種ヨコハケである(山元1986)。

待兼山遺跡でも1987年に行われたテニスコート用地内地点の調査において、斜面地山直上から静止ヨコハケが施された小型の円筒埴輪に少量の突帯貼付後のハケ調整が省略されたものが伴って出土している。両者の関係は、包含層出土であるため明確ではないが、同一層からTK208型式と考えられる須恵器片が出土している(福永1988：p.19)。

以上のような周辺地域におけるありかたを参考にすれば、本調査区出土の埴輪の帰属時期は、須恵器編年のTK208型式に相当する時期、すなわち古墳時代中期中葉段階を想定するのが妥当であろう。

(寺前)

小 結 今回の調査では、新たな古墳の存在を確認することができた。これまで、待兼山丘陵には多くの古墳が分布することが知られていたが、発掘調査で遺構を検出したのは今回が初めてである。試掘調査

査という限られた状況の中ではあったが、古墳は1辺10m程度の方墳であると推定される。周溝だけではなく古墳の盛土や埋葬施設も遺存している可能性がある。正式な発掘調査で全面を発掘すれば、周溝が全周する遺存状況のよい古墳が確認されるであろう。周溝からは、ほぼ完形に復元することができた円筒埴輪2個体や蓋形埴輪の破片も出土した。

古墳時代中期の中小古墳は複数が群をなして存在することが一般的であるので、5号墳周辺にも未知の古墳が埋没している可能性は高い。

待兼山丘陵のある猪名川左岸には西摂でも屈指の古墳群である桜塚古墳群が存在する。今回検出された待兼山5号墳は桜塚古墳群造営期間中に築かれたと考えられる。桜塚古墳群の被葬者との関連が注目されよう。

また古墳以外にも複数の遺構が調査区南半で検出されている。こうした状況から当調査地点の南半部の建築・造成には十分な注意を払う必要がある。とくに待兼山5号墳は地下で良好に保存されていると考えられるので、保存処置をとることが望ましいと考える。(清家)

参考文献

- 天野末喜・松村隆文 1992「円筒埴輪—近畿」『古墳時代の研究』9 古墳III 埴輪 雄山閣、東京：pp.56—68
- 一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・V 応神陵古墳外堤・I 古室遺跡・III』大阪府教育委員会、大阪：pp.65—100
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻 第2号 日本考古学会、東京：pp.1—70
- 橘田正徳 1993「桜塚古墳群第4次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1992(平成4)年度』豊中市教育委員会、大阪：pp.7—14
- 積山 洋 1992「長原古墳群と難波地域の円筒埴輪」『古代文化』vol.44No.9 財団法人古代学協会、京都：pp.36—42
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ、京都
- 福永伸哉編 1988『待兼山遺跡II』大阪大学埋蔵文化

財調査委員会、大阪：pp.19—21

山元 健 1986「御獅子塚古墳調査概要報告」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』豊中市教育委員会、大阪：pp.1—22

第3調査地点の成果

調査面積：130㎡

調査期間：000228～000331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第3調査地点は待兼山最高所から北西に延びる尾根の北側に位置する(図4)。当地は、その尾根と第15調査地点にあたる小高い丘に挟まれた谷部に相当する。待兼山最高所から北西に延びる尾根の北東斜面は、一部が造成されてテニスコートが設けられていた。また、谷地形の中央部も造成が行われ、広い平坦面をなしている。この谷部に4箇所、尾根の斜面に2箇所、テニスコート跡地に1箇所の計7箇所の調査区を設定した(図27)。

調査成果 テニスコート跡地に第1トレンチを設定した。テニスコートの整地層と造成土直下から地山が検出された。テニスコートの平坦面は尾根の斜面を削り出すことで造り出されたものと考えられる。テニスコート跡地から谷部へ下る斜面に第2・第3

トレンチを設定した。第2・第3トレンチ付近は造成土が見られず、表土下約1mで地山を検出した。表土と地山の間には明黄褐色シルト層や黄褐色シルト混細粒砂層が堆積していた。これらの層は、尾根上部より土砂が流出して堆積した層であると思われる。遺構と遺物は認められなかった。

このように、尾根の傾斜面には遺構も遺物も検出されなかったのであるが、谷部の平坦面に設置した第4トレンチと第5トレンチでは以下に述べるような遺構と遺物が検出されたのである。

第4トレンチは現地表から1.9～2.7mの深さまで造成土が堆積していた(図32)。造成土下には旧表土が全面に遺存しており、キャンパス造成前の旧地形が完全に保たれていることがわかる。旧表土は、調査区の北西から南東にむかって傾斜している。この

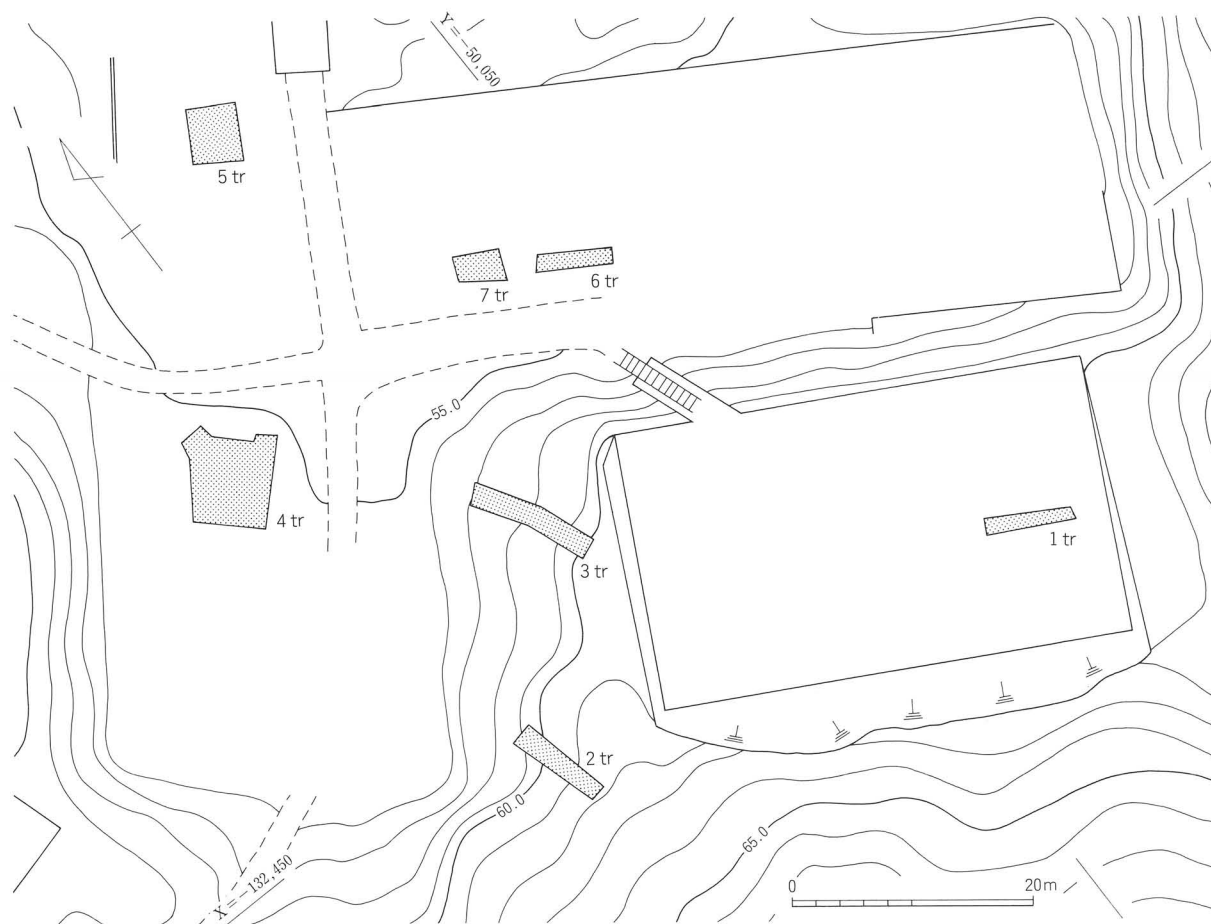


図27 調査区配置図

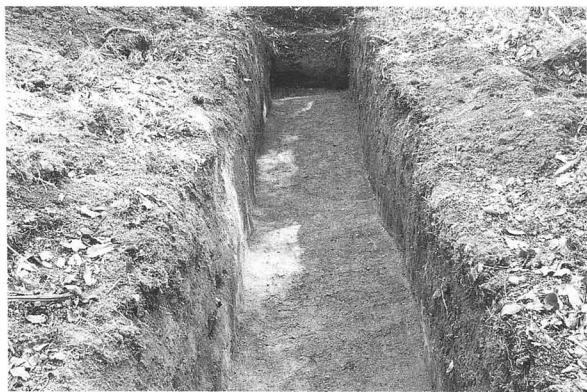


図28 第3トレンチ全景

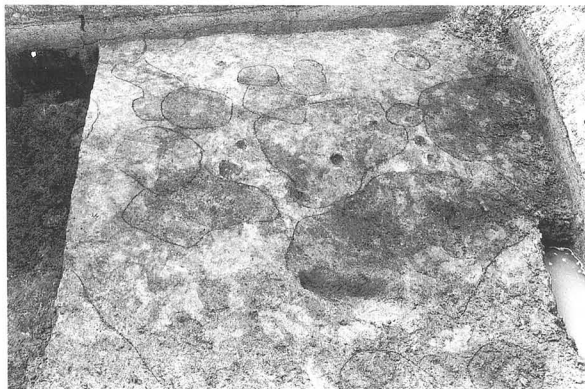


図29 第4トレンチ全景



図30 第4トレンチ土器出土状況



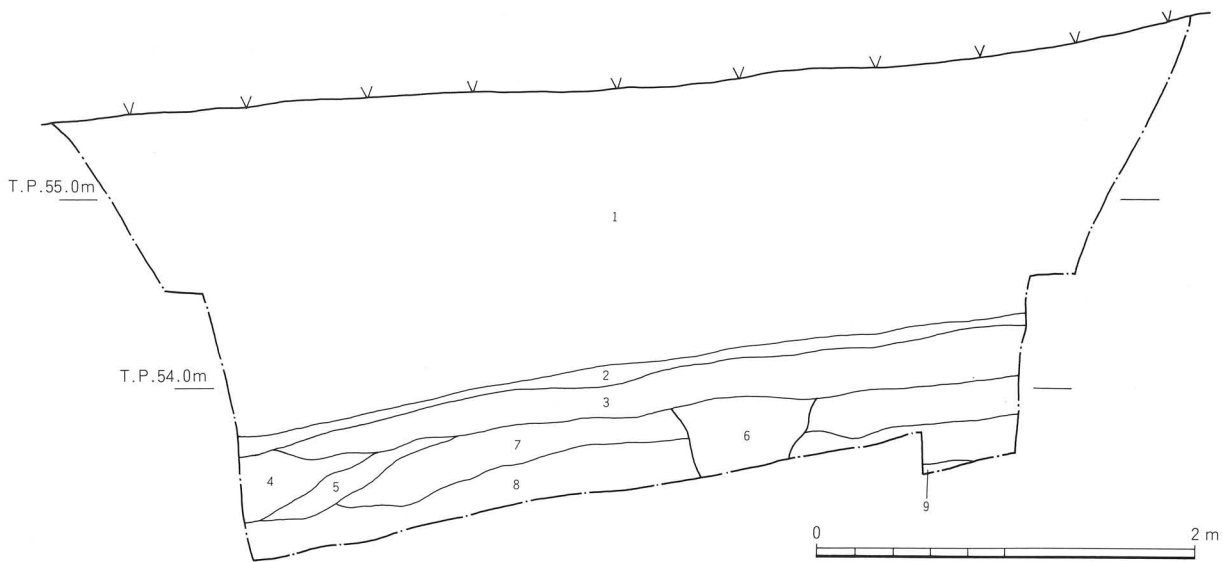
図31 第5トレンチ全景

第4トレンチ付近は、現在でこそ平坦面をなしているが、ほんらいは西側にある小高い丘の南東斜面に当たるものと思われる。旧表土下には、上から順に明褐色シルト層(図32-3層)・褐色シルト層(同7層)・暗褐色シルト層(同8層)が堆積する。明褐色シルト層からは須恵器と土師器が多量に出土した。この明褐色シルト層の上面には遺構が認められないので、遺物包含層と考えられる。この明褐色シルト層を掘り下ると褐色シルト層が現れる。この上面では複数のピットを検出している。本調査は遺跡の分布調査を主たる目的としているので、遺構を検出するだけにとどめ、遺構の掘削は行わなかった。この褐色シルト層以下の状況を把握するため、調査区の南西壁沿いに幅30cmのサブトレンチを設定した。褐色シルト層とその下の暗褐色シルト層には遺物はまったく含まれていないことが判明している。

第5トレンチにおいても、第4トレンチと同様な観察が得られた。現地表から1.3mまで造成土が堆積し、その下から旧表土・黄褐色シルト層・暗褐色シルト層が検出された。黄褐色シルト層は第4トレンチの3層に対応するものと思われる、この層からは須恵器片が出土している。暗褐色シルト層も第4トレンチの7層かあるいは8層に相当するものと思われる。この層からは遺物は出土していないが、その上面には遺構と思われる土の変色が認められた。しかし、湧水が激しく壁面の崩壊も激しかったため、確実に遺構であるかどうかは確認できなかった。

テニスコートの北側にある平坦面に第6・第7トレンチを設置した。このうち第6トレンチでは、厚さ40cmの造成土下に厚いコンクリートが敷きつめられており、これを破壊することができなかったため、これ以上の掘削を断念した。第7トレンチでは現地表下70cmの深さまで造成土が堆積し、その直下から地山が検出された。この第6・第7トレンチ付近は、もともとは尾根の斜面であったものを、削平により平坦地に造成したものと思われる。両トレンチからは遺物・遺構ともに検出はされなかった。(清家)

出土遺物 今回図示する遺物は、すべて第4トレン



- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 造成土 2. にふい黄褐色(10YR5/3)シルト+黒褐色(5YR2/1)シルト (旧表土) 3. 明褐色(7.5YR5/6)シルト (包含層) 4. にふい黄褐色(10YR5/4)シルト (包含層) 5. 褐色(7.5YR4/3)シルト (包含層) | <ul style="list-style-type: none"> 6. 暗褐色(10YR3/3)シルト+褐色(7.5YR4/4)シルト (遺構埋土) 7. 褐色(7.5YR4/3)シルト+褐色(7.5YR4/4)シルト 8. 暗褐色(7.5YR3/3)シルト 9. 黒褐色(7.5YR3/2)シルト |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図32 第4トレンチ南西壁断面図

チの包含層（第3層）から出土したものである。器形が確認できるものとしては、須恵器では杯身・高坏・平瓶・甕・短頸壺・甑がある。また、土師質の土錘も出土している。

杯身は全部で7点である。1～3は受部を有す底部が平底のタイプであり、口径が10.9cm～11.2cm、器高が2.5cm～2.7cmの範囲に収まる。4～6は受部を有し、底部が尖り底のタイプである。4・5は口径が10.2～10.8cm、器高が3.5cmの範囲に収まるが、6のみ口径が12.3cm、器高が4.1cmとなり、他の個体よりもわずかに大きい。7は受部がないタイプであり、口径13.0cmで器高4.6cmである。

杯身にみられる調整は器形の差を問わず、内面はすべて回転ナデ、外面は底部から僅かな部分が回転ヘラケズリによるほかは、体部の大部分が回転ナデによる。受部のあるタイプで、回転ヘラケズリの幅が判明するものについてみると、多くが1/4～1/6の範囲になるが、4のみ1/2以上となる。

口径と器高にみる小型化の傾向や受部のない個体の存在などから、これらの杯身はTK209～TK217型



図35-6

図33 土器1



図35-4

図34 土器2

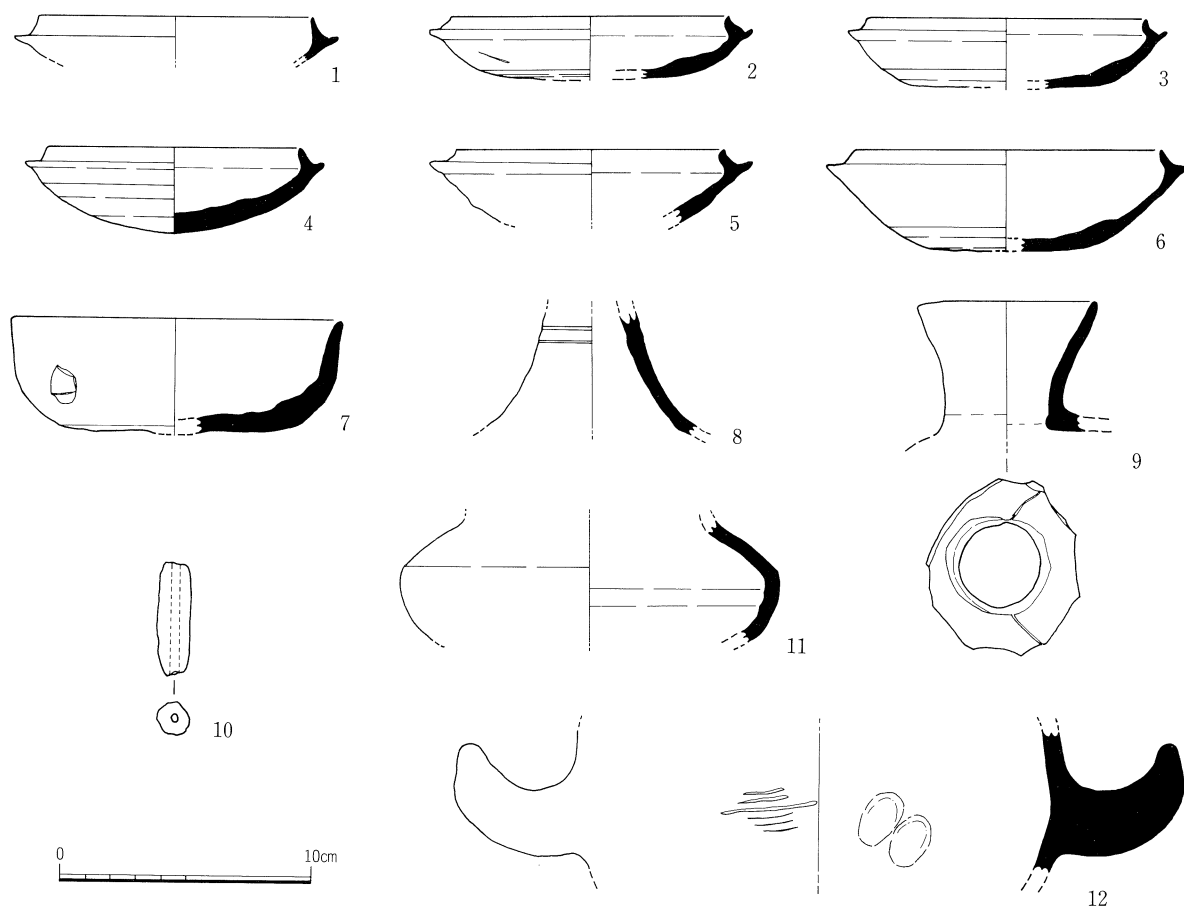


図35 出土遺物

式期のものであると考えられる。

8は高杯の脚部であると思われるが、スカシ孔は残存部からは確認できない。調整は内・外面ともに回転ナデによる。また、上部に2本の沈線が認められる。9は平瓶の頸部であり、体部との接合部まで残存する。調整は内面がユビナデ、外面が回転ナデによる。復元口径は6.8cmである。11は短頸壺であり、内外ともに調整は回転ナデによる。復元される胴部最大径は15.1cmである。10は土錘であり、長さは4.6cm、幅は1.3cm、孔の直径は0.3cmである。調整は確認できなかった。12は甑の把手とそれに付属する体部の一部であり、調整は内外ともにユビナデによる。ただ、外面には部分的にタタキメが認められ、把手の取り付けの際に付いたと思われる指頭圧痕が残る。体部復元径は約20cmである。(中村)

小 結 谷部に設置したトレンチからピットが検出

され、遺物が多量に出土した。本調査以後に行われた立会調査(本報告:p.58)において、第4トレンチの南側でも遺物包含層が存在することが確認された。谷部の平坦面のほぼ全域に包含層が広がっているものと思われる。ピットも検出されているので、当調査地点ならびにその付近で古墳時代後期の集落が営まれていた可能性が高い。

本調査地点は、2つの丘に挟まれた谷間にあたり、通常の集落を営むには条件が良くない場所であるので特殊な性格を有した集落の存在が予想される。大阪大学石橋団地の一部は桜井谷窯跡群の分布域内にあり、石橋団地内には2基の窯がこれまでに知られている。さらに未知なる窯が遺存している可能性も指摘されている。今回出土した須恵器は、桜井谷で須恵器窯が操業されていたころの遺物であることから、当調査地点周辺に営まれた集落が、須恵器製作と何らかの関連を有することも考えられよう。(清家)

第4調査地点の成果

調査面積：35㎡

調査期間：000307～000331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第4調査地点は旧医療技術短期大学本館東側にある緩斜面である。ここは待兼山頂上から西に延びる尾根の西側斜面にあたる(図4)。かつての校舎配置図を見る限り、当調査地点には校舎は立っていなかったようである。当調査地点の東側には待兼山2号墳があり、さらに、当調査地点と第6調査地点の境界をなす道路付近で須恵器が採集されている。このことに加えて、過去に建設された校舎も存在しなかったことから、後世の攪乱が少なく、遺跡が存在するのであれば、良好に遺存していることが予想された。そこで、等高線に直交する方向に6箇所のトレンチを設定した。

調査成果 第1トレンチと第2トレンチを本調査地点の南半に設置した。第1トレンチでは、キャンパス造成時のものと思われる造成土が約80cmの厚さで堆積し、その下からは20～30cmの間層を挟んで地山が検出された。第2トレンチでは、厚さ約60cmの造成土直下から地山が検出されている。第1・第2ト

レンチともに旧表土は認められなかった。すなわちこの付近は削平を被り、その後、盛り土が行われたのである。第1トレンチの造成土と地山の間認められた土は、人工的な遺物はまったく含まれていなかったが、しまりが悪いので地山とは考えられない。丘陵の上方から流出し堆積した土であろう。

第3トレンチと第4トレンチは、当調査地点中央部の緩斜面に設定したトレンチである。両トレンチとも、厚さ1.0～1.2mの造成土下から旧表土が検出された。この付近は削平はされずに、旧表土の上に造成土が堆積したものと推測される。旧表土の下から厚さ40cm程度のシルト層を挟んで地山を確認した。

調査区北半には第5トレンチと第6トレンチを設置した。第5トレンチでは、厚さ70cmの造成土直下から地山が検出された。第6トレンチでは旧表土は存在せず、表土あるいは造成土直下から地山面が検出された。このことから、この付近はキャンパス造成時に削平を被ったものと思われる。

このように当調査地点の各所で造成による盛土が

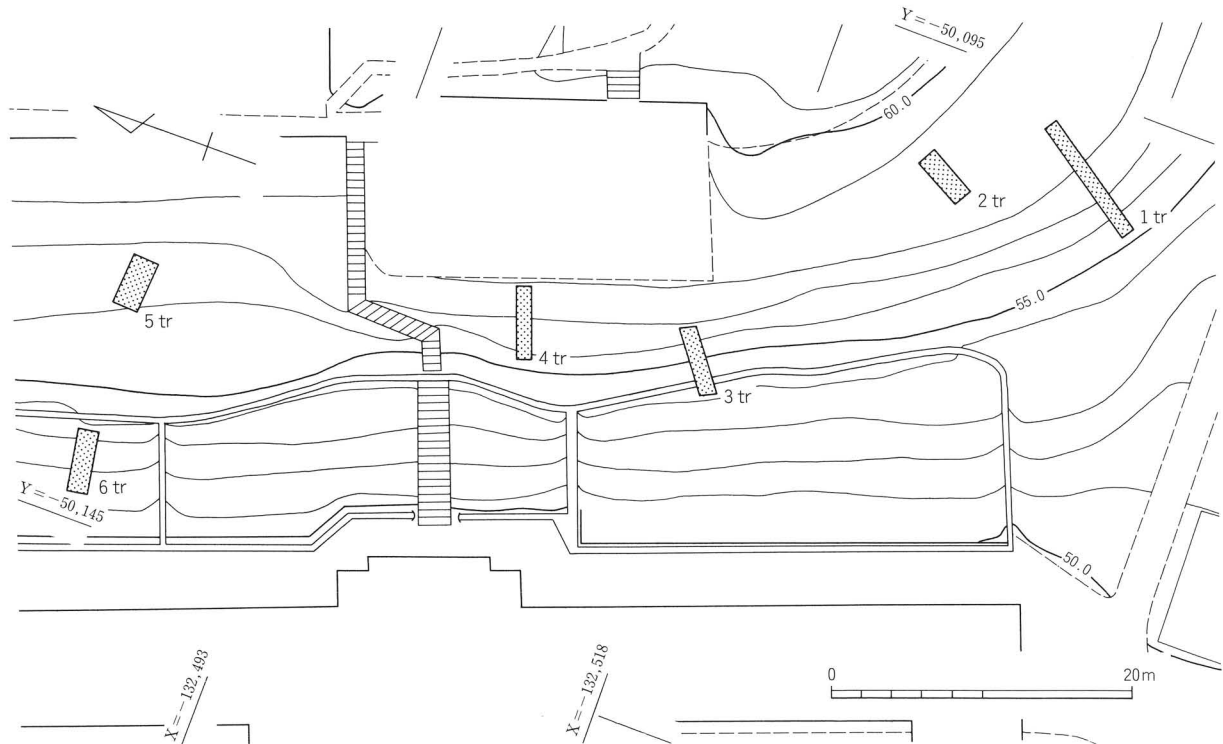


図36 調査区配置図

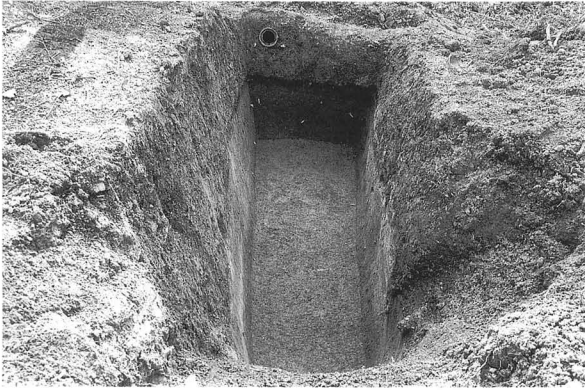


図37 第4トレンチ



図38 第5トレンチ

堆積した様子が認められた。これは、当調査地点の東に位置する第11調査地点にあった医療技術短期大学の校舎建築に伴う造成によるものであろう。

なお、遺物と遺構はいずれのトレンチからも確認されなかった。

小 結 調査の結果、第3・第4トレンチで旧表土が検出され、当調査地点の中央部分は旧地形が保存されていることが判明した。その一方で、斜面の下方に位置する第1・第2・第5トレンチならびに第6トレンチでは、旧表土は検出されず、大きな削平を被った様子が窺われた。

以上の結果から、以下のような結論が導き出せよう。当調査地点の地形はもとより緩斜面であり、キャンパス造成にともなう盛土こそ堆積しているものの、その地形は基本的に保たれている。ただ、旧本館の東側にある擁壁に近い部分や南側の道路に近い箇所は造成の際に大きな削平が行われたものと思われる。遺構と遺物はともに検出されず、当調査地点には遺跡は存在しなかったと見て良いだろう。

(清家)

第5調査地点の成果

調査面積：10m²

調査期間：981201～990331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第5調査地点は、旧医療技術短期大学本館の前面にある道路と、そこから敷地の境界まで続く傾斜面からなるエリアである(図4)。道路部分は厚いコンクリートが敷かれており、調査が困難であったため、植え込み部分のみ調査を行った。傾斜面では、道路との境に植木が並んでいたため、重機が入ることのできる部分のみ、トレンチを設けた。

調査成果 第1調査地点との境界付近とその南側30mの斜面部分に第1・第2トレンチを設けた(図39)。この2箇所では、重機のバケットが届く深度まで掘削を行ったが、地山面まで到達することができなかった。両トレンチにおいて、地表面から深さ3m以上も灰や瓦礫などの廃棄物が堆積していた。第5調査地点の北側に隣接する第1調査地点西端には、ゴミ収集場跡とゴミ焼却施設跡が存在する。短期大学で出たゴミがここで焼却され、その灰や廃棄物が傾斜面に廃棄されていたのであろう。

第3トレンチは旧医療技術短期大学正門の北側25

mに設置した。ここではトレンチ全面にわたって地山まで及ぶ攪乱が認められた。この周辺は大きく地形が改変されている可能性が高い。

第4トレンチは旧本館の西側にある植え込み部分である。ここでは、現地表から70cmの深さで地山面を検出することができた。表土と地山面の間には、黄褐色シルト層が存在するが、これには人工的な遺物は含まれていなかった。旧本館に近いところに位置するが、旧地形を保っている可能性が高い。

小 結 上記の通り傾斜面部分は、灰や廃棄物が大量に堆積し、それより下層の状況は不明である。斜面地の西側では1箇所しか掘削はできなかったが、大きな地形改変が行われている可能性が高い。ただし、旧本館前の植え込み部分では、旧地形が保存されており、第1調査地点でも遺物が出土していることから、旧本館周辺に遺構や遺物が存在する可能性もある。旧本館解体後は試掘調査等の処置を施す必要がある。(清家)

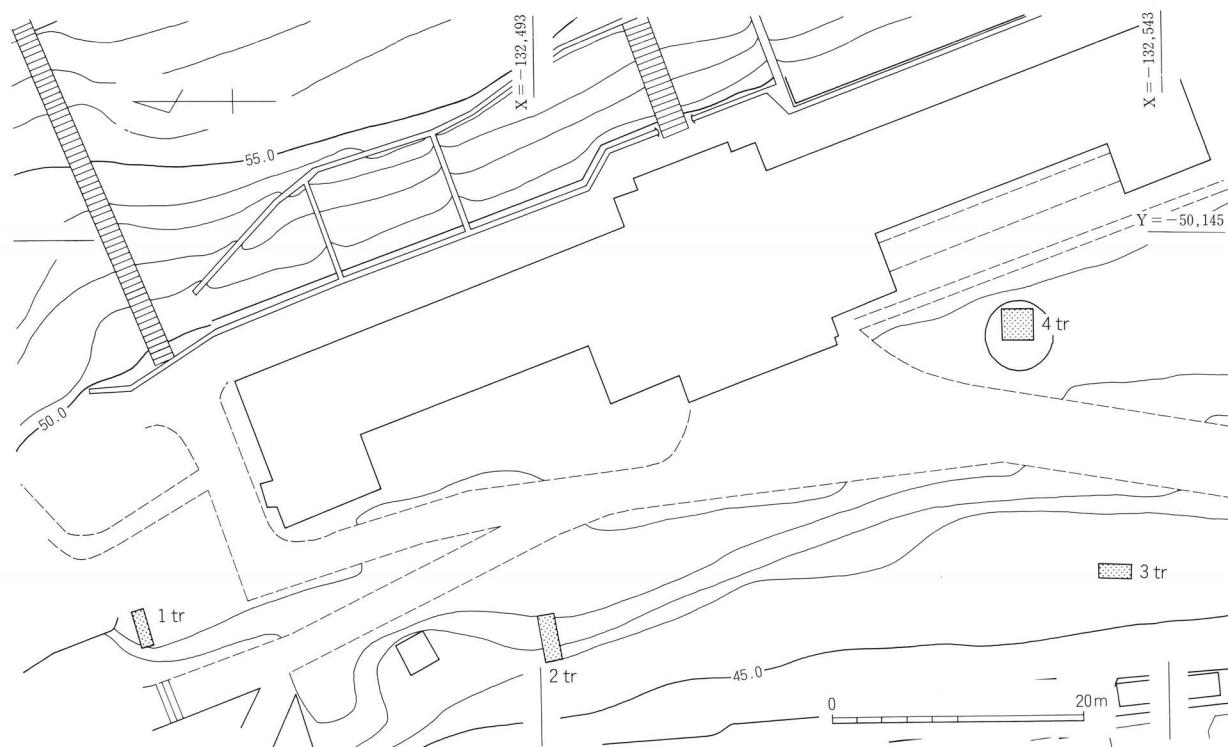


図39 調査区配置図

第6調査地点の成果

調査面積：80㎡

調査期間：981201～990331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第2調査地点の東側には擁壁が築かれているが、その擁壁上の平坦面が第6調査地点である(図4・図40)。第6調査地点の東側には、待兼山山頂から南に続く尾根が延びる。当調査地点はその尾根の西側斜面にあたるが、この尾根の斜面を削り出すことにより校舎建設のための平坦面が確保されたと思われる。そのため旧地形は大幅に改変されている可能性が高いと考えられたが、第2調査地点では古墳の周溝が検出されているので、この第6調査地点においても古墳などの遺構が遺存している可能性も予測された。当調査地点の北側を通る道路の法面に1箇所、平坦面に8箇所、東側にある尾根の斜面に1箇所のトレンチを設定した。

したトレンチである。当調査地点の北側には、正門から尾根上部へ続く歩道が通じている。この歩道から当調査地点に向かって高さ約1mの崖面が形成されている。ほんらい、当調査地点の旧地形はこの歩道の高さまでであったと思われるが、校舎建設の平坦面確保のため現在の高さまで削平を受けたと思われる。第1トレンチはこの崖面に設定したものである(図42)。壁面を観察したところ、地表面から30～40cmの深さまで造成土が堆積し、その下から明黄褐色砂礫混シルト層と褐色シルト層をはさんで地山が検出された。遺構は検出されなかったものの、造成土の中から土師器片が出土している。第1トレンチから東に続く崖面を精査したところ明黄褐色砂礫混シルト層から須恵器片と土師器片が出土した。土器が小破片であるため時期の確定は難しいが、古墳時代

調査成果 第1トレンチは当調査地点の北端に設定

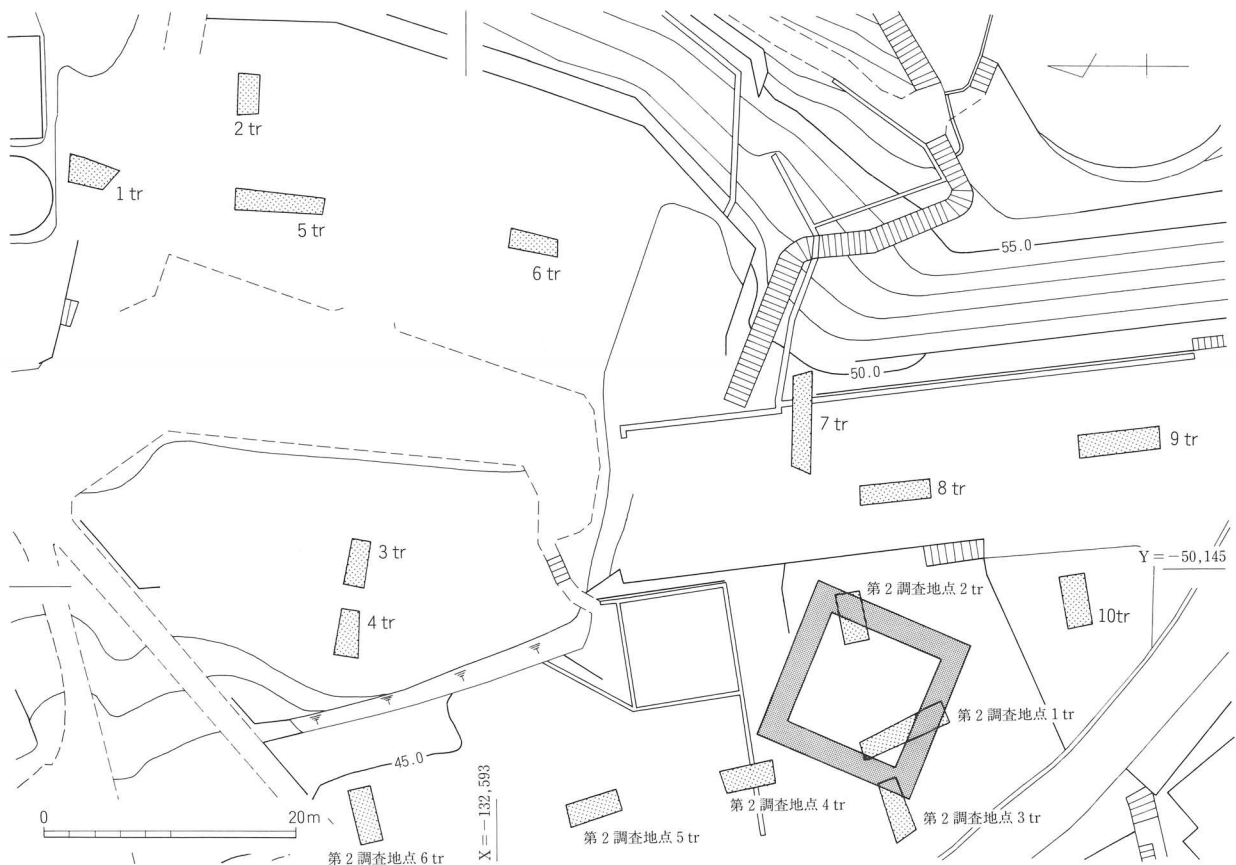


図40 調査区配置図

後期のものである可能性が高い。これらの遺物はおそらく、第1トレンチの北東にある待兼山山頂方面（第16調査地点）から流出してきた遺物と考えられる。待兼山山頂付近ではこれまでも須恵器片が採集され、古墳の可能性を持つ高まりも存在するので、古墳をはじめとする遺跡がその周辺に点在する可能性が高いとされてきた。第1トレンチから見つかった土器は、その可能性を強く支持するものである。

第2～第6・第8・第9トレンチは当調査地点の平坦面に設置したトレンチである。すべてのトレンチにおいて、表土直下あるいは造成土直下から地山が検出された。当初の予想通り、尾根の斜面部を削平し、平坦面が造成されたことが確認される。

東側にある尾根の斜面に設定した第7トレンチでも表土の直下から地山が検出された。当調査地点の平坦面を造成する際に削平を被ったのであろう。

第10トレンチは当調査地点のもっとも南に設置した調査区である。第2調査地点の南側にあり、そこよりも約1.5m高い位置にある。ここでは地表面から約1mほど盛土が堆積しているが、その下から旧表土が認められたので、第10トレンチ周辺はキャンパス造成時の削平を免れていることがわかる。黄褐色砂質土層をはさんで地表下1.3mで地山を検出している。遺物ならびに遺構は検出できなかった。

小 結 当調査地点の中央にある平坦面部分は、当初の予想通り、旧地形は大きく削平されていることが判明した。しかし、第1トレンチから土師器片と須恵器片が出土した。これらの遺物は、丘陵の上部にある第16調査地点周辺から流出してきた可能性が高い。遺物が見つかったことにより、第1トレンチ周辺の開発行為には十分注意をはらう必要があろう。また、第10トレンチ周辺は造成時の削平から免れており、旧地形が保存されていることが明らかとなった。古墳の存在が明らかとなった第2調査地点第1トレンチと近接する箇所であるので、遺構や遺物が検出される可能性は十分に存在する。第10トレンチ付近の開発行為にも注意が必要である。（清家）



図41 全景



図42 第1トレンチ北側壁面



図43 第1トレンチ土器出土状況



図44 第7トレンチ

第7調査地点の成果

調査面積：36㎡

調査期間：991001～991210

調査担当：清家 章

調査区の設定 待兼山の最高所から南西に延びる尾根の西側斜面にあたる(図4)。この尾根頂部は第13調査地点であり、第13調査地点は校舎建設に平坦地を確保する目的で丘陵頂部を削平するような地形の改変が行われている。当調査地点の下方には第6調査地点が広がる。第6調査地点も校舎建設のため削平が行われ、平坦面が広がっている。第6調査地点を造成する折りに、第7調査地点にある斜面部分も大きく削平されたようで、第7調査地点と第6調査地点の境界は崖面を呈しており、擁壁にて土留めが行われている。

しかし、第7調査地点そのものは、中央に歩道が敷設されているほかは、人為的な改変の痕跡が少ない。待兼山最高所から西へ延びる尾根上には古墳と考えられる高まりが存在し、須恵器片も採集されている。南西に延びる尾根上にも西尾根と同様に遺跡が広がっていたとすれば、尾根頂部の削平行為に伴

い、当調査地点に遺物が流出し堆積している可能性が考えられた。

当調査地点の中央を通る歩道の上方(東側)と下方(西側)にそれぞれ4箇所の調査区を設定した。

調査成果 調査の結果、歩道を境にして造成による影響が異なることが判明した。歩道の下方に設定した第5～8トレンチでは数十cmの造成土直下から地山が検出されている。とくに、第7トレンチと第8トレンチの西端では、擁壁建設のための掘り方が確認された。当調査地点の西半部は地山に及ぶ削平を被っていることが理解される。

一方、歩道の東側に設けたトレンチのうち、第1トレンチでは、旧表土こそ検出されなかったが、表土と地山の間、にぶい黄褐色シルト混中粒砂から構成される厚さ30cm程度の土層が確認されている。この土層にはコンクリートなど現代に属する遺物が

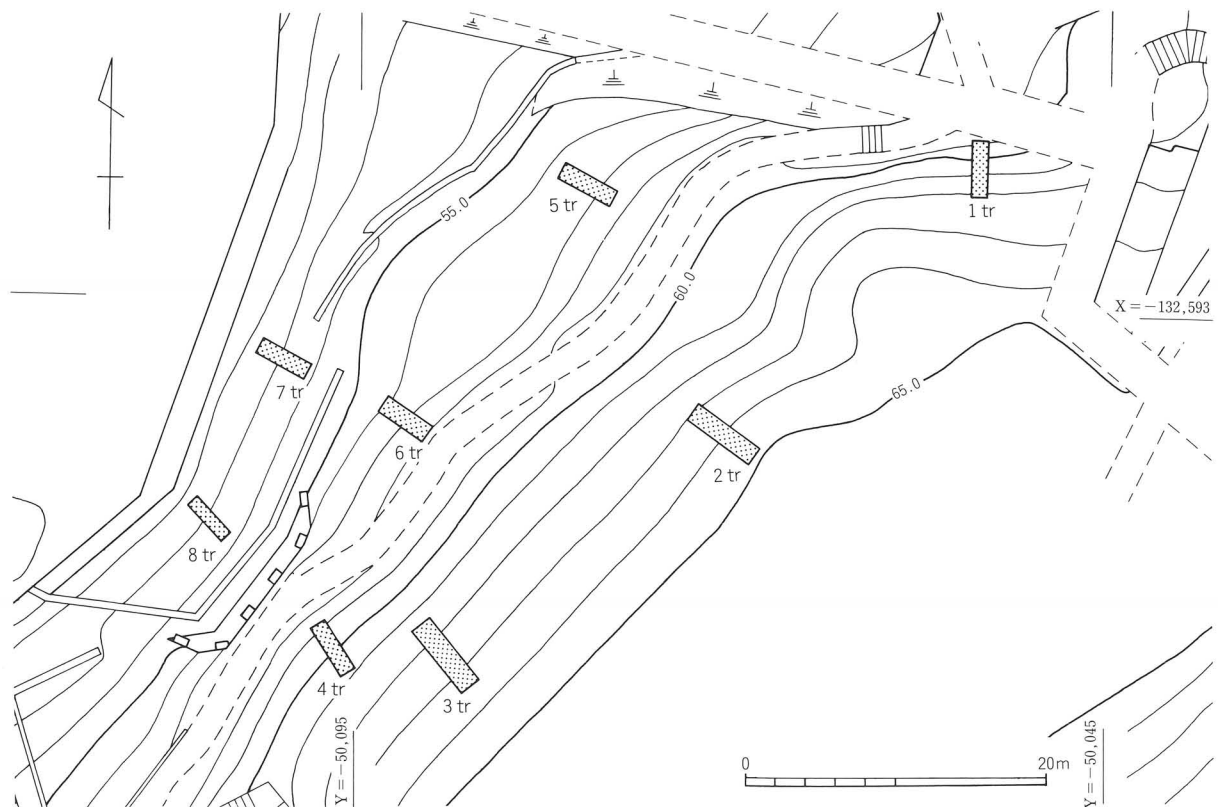


図45 調査区配置図

まったく含まれていない。この層は造成土ではないことがわかる。第2トレンチでは、南半部において表土ならびに造成土直下から地山が検出されたが、上半部では旧表土が地表下60cmで見つっている。遺構はまったく見つっていないが、造成土中から土器の破片が出土している。この遺物の表面は摩滅していることに加え、小さな破片にすぎないので、土器の種類を断定することは難しい。しかし、胎土の砂粒の入り方や焼成がやや甘いことから現代の土器片ではなく、埴輪片であると思われる。なお、この土器片以外に、当調査地点から遺物は出土していない。

第3トレンチならびに第4トレンチでは、造成土の堆積もなく、表土下からにぶい黄色細粒砂からなる均質な土層と暗灰黄色粗粒砂からなる土層が地山上にあることが確認された。これらの土層も、人工的な遺物をまったく含まないので、造成土ではなく、尾根の上方から自然に堆積した土層であると考えられる。つまり、第3トレンチと第4トレンチは削平をまったく被っておらず、造成前の地形をそのまま維持しているものと思われる。

小 結 以上のことをまとめると、当調査地点は歩道よりも西側にあたる下方において、地山にまでおよぶ削平が行われたのであるが、歩道よりも上方では、改変が小さかったと考えられるのである。

第2トレンチからは埴輪片と考えられる土器片が出土している。造成土中からの出土であるので、当調査地点の遺構に伴うものではないと考えられる。先述の通り、当調査地点の上方にある尾根頂部が削平を被っていることから、ここから流れ込んだ可能性が高いと言えよう。当地点には遺構が遺存している可能性は低いと考えるが、第2トレンチ付近については遺物が出土する可能性があるため、第2トレンチ周辺の開発行為には十分注意を払う必要があろう。

(清家)



図46 第2トレンチ土層



図47 第3トレンチ土層



図48 第4トレンチ



図49 第5トレンチ土層

第8調査地点の成果

調査面積：30m²

調査期間：991001～991210

調査担当：清家 章

調査区の設定 第8調査地点は、第7調査地点と第13調査地点の南側にあたる(図4)。地形的には待兼山の最高所から南西方向に延びる尾根の南側斜面にあたる。当調査地点は、第13調査地点と隣接する平坦面とそれから南に下る傾斜面に分けることができる。平坦面に1箇所、傾斜面には5箇所のトレンチを設定した。

調査成果 当調査地点の中央にある平坦面に第6トレンチを設定した。ここでは、表土直下から地山が検出された。このことにより、平坦面は旧地形を反映しているのではなく、造成により削平が行われて、平坦面が造り出されたものと考えられる。

次に第1トレンチと第2トレンチを当調査地点の北西に設置した。両トレンチともに表土あるいは造成土直下から地山が検出されている。造成土の厚さは平均30cm程度である。つまり、第1・第2トレン

チの周辺は、キャンパス造成時に削平を受け、その後、造成土が盛られたと考えられる。遺構と遺物はともに見られない。

第3トレンチでも地山までおよぶ削平が行われたようで、造成土直下から地山が検出されている。このように当調査地点の西半部に設定したトレンチでは旧表土はすべて失われており、大きな削平行為がなされたことが理解できる。

第4トレンチと第5トレンチでは厚く堆積した造成土の下から旧表土が観察された。旧表土の直下は地山であり、遺構は見つからなかったものの、この周辺は旧地形が遺存していると考えられる。また、第5トレンチの造成土から羽釜片が出土した。おそらく室町時代に属する土器と考えられる。遺構こそ検出できなかったものの、羽釜片の出土は、中世の集落が当丘陵のいずこかに存在した可能性を示すものである。当調査地点の北東250mのところにあるガ

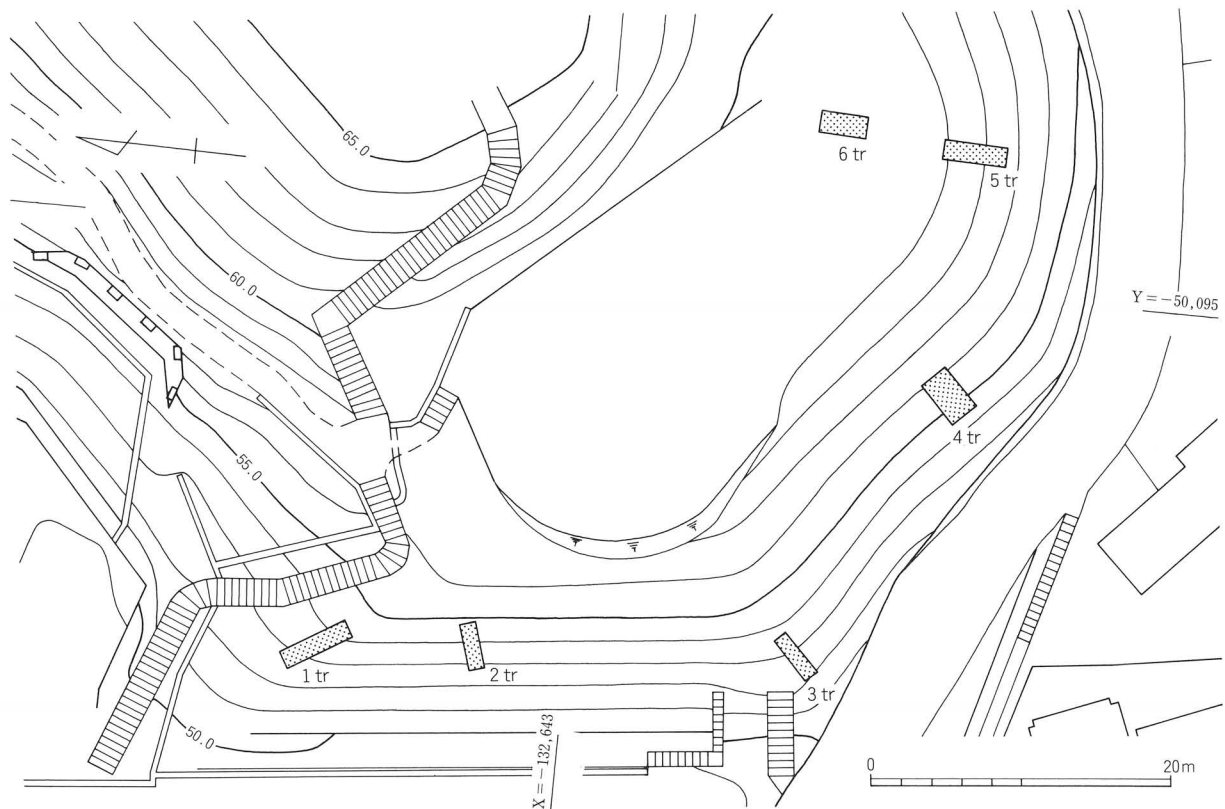


図50 調査区配置図

ス整圧機を設置する際に行われた試掘調査でも、中世の土器が出土している(本報告：p.48)。このガス整圧機のある場所は、第13調査地点が位置する尾根と待兼山最高所から南東に張り出す尾根に挟まれた谷地形にある。当調査地点から出土した土器とガス整圧機地点の土器が上方から流れ込んできたとなると、それらの土器が本来あった場所は、第13調査地点の位置する尾根頂部である可能性がもっとも高い。待兼山最高所から南東に張り出す尾根は、傾斜が急であるため、集落を営むことが困難である。また、そこから当調査地点の第5トレンチまで土器が流出することを想定することは、造成工事がなされたことを考慮に入れても、難しいと考えられるからである。(清家)

出土遺物 第5トレンチ造成土中から瓦質羽釜片が一点出土した。口縁部から胴部上半にかけての一部が残存し、復原される口径は約15.8cm、口縁が内傾する半球形に近い器形である。焼成は良好、色調は内面灰色(5Y6/1)、外面灰色(5Y4/1)で、胎土は少量の長石とごく微量の黒色粒を含む。内面及び外面の口縁から鋸部にかけてはヨコナデを施し、胴部外面は横方向のケズリ調整をおこなう。また口縁部外面には3条の凹線がめぐらされている。これらの特徴から当遺物は河内または和泉で生産された可能性が高く、時期は15世紀頃と考えられる。(福辻)

小 結 第8調査地点では、西半部と中央部分は大きな削平を被っていることが判明した。南半の傾斜地では旧地形が遺存していることが明らかとなった。また、造成土中からではあるが、中世の羽釜片が出土した。以前の試掘結果とあわせて考えれば、おそらく第13調査地点にあたる尾根上に中世集落が営まれていた可能性が高い。とするならば、旧地形が遺存している当調査地点の南半にある傾斜面から、集落由来の土器が他にも出土する可能性がある。さらには、こうした傾斜面に集落をとりまく溝などの遺構が存在する可能性もあるので、今後の開発行為には十分な配慮が必要である。(清家)



図51 第2トレンチ



図52 第4トレンチ



図53 第6トレンチ

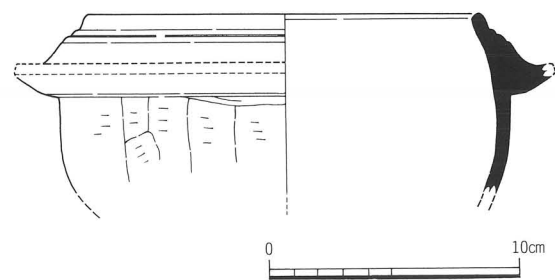


図54 出土羽釜実測図

第9調査地点の成果

調査面積：36m²

調査期間：010130～010331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第9調査地点は待兼山の最高所から南西に延びる尾根の南東斜面と、同じく待兼山の最高所から南に延びる尾根の西側斜面にあたる場所である(図4)。2つの尾根に挟まれた谷部のほぼ中央にはガス整圧機が存在する。その建設の折りに行われた試掘調査では、遺構こそ検出されなかったものの中世の土器片が出土した(本報告：p.48)。このことから周辺に当該期の遺跡が存在する可能性が考えられていた。

ガス整圧機建設に伴う試掘調査で谷部の状況は判明しているため、南西に延びる尾根の南東斜面を中心に調査を行うこととした。尾根の斜面に直交する方向に6箇所、斜面に平行する方向に2箇所の調査区を設置した。

調査成果 第1トレンチと第2トレンチは当調査地点のほぼ中央に、斜面に直交する方向で設けたトレンチである。第1トレンチは表土直下で地山が検出されたため、この近辺が削平されたことがわかる。しかし、他の調査区では削平を被ったトレンチが少ない。この尾根の斜面はほんらい一様な傾斜をなしているのではなく、若干の起伏を有しており、第1トレンチ付近の旧地形は周囲よりやや高かったであろう。

第2トレンチは、幅1.5m・長さ3.8mの調査区である。調査区のほとんどが現代の掘削により攪乱されていた。攪乱から免れていたのは調査区の両端部にすぎない(図56)。攪乱を受けていない箇所で土層を観察すると、造成土は堆積せず、表土・黒色シルト層と3つの褐色シルト層を経て大阪層群に至る。

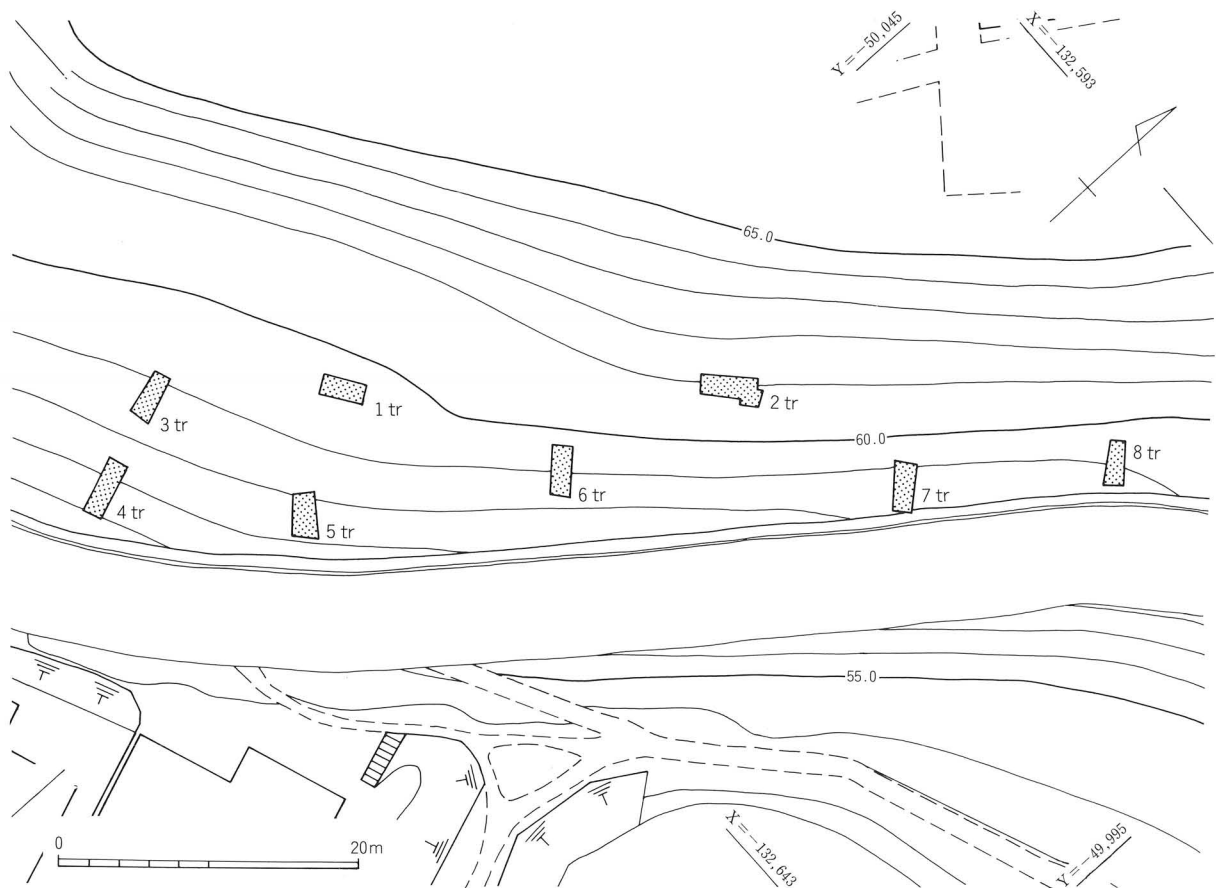
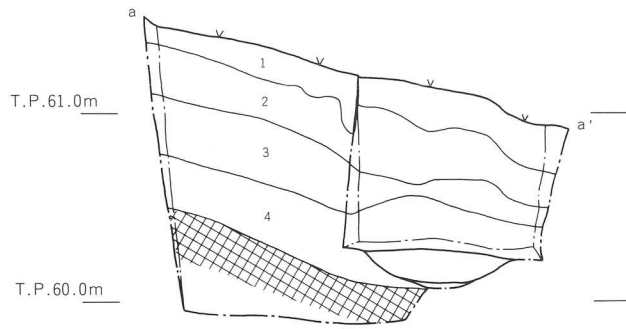


図55 調査区配置図



 地山

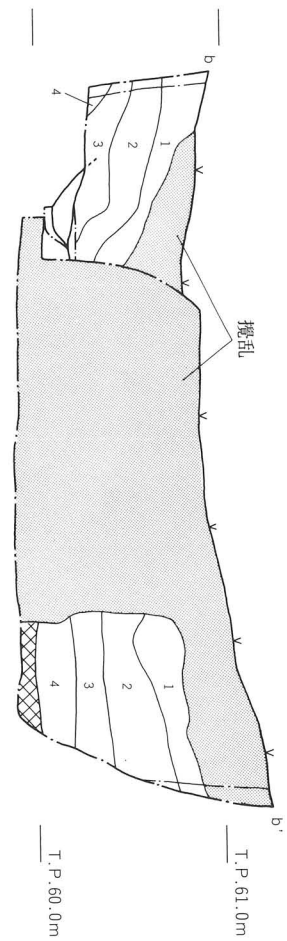
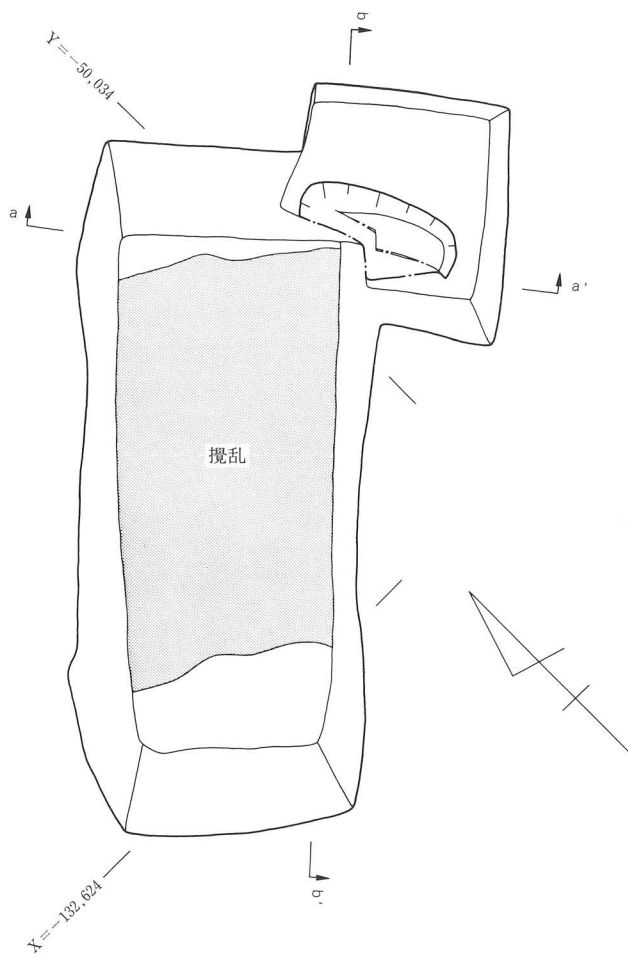


図56 第2トレンチ平面・断面図



図57 第2トレンチ

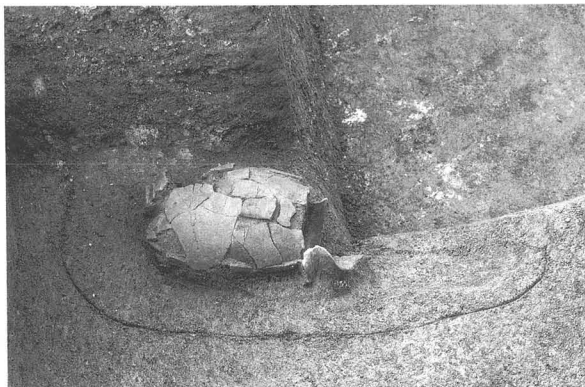


図58 土器棺出土状況1

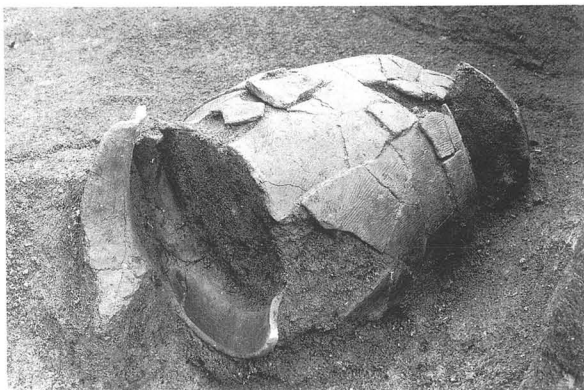


図59 土器棺出土状況2



図60 第7トレンチ

このうち、調査区の東隅の断面にある第3層には土器片が含まれていた。この土器片の実態を確認するため、土層断面図作成後に土器を採取しようとしたところ、土器片は壁の奥まで続くことが判明した。土層断面では確認できなかったものの、遺構の可能性も考えられたので、調査区の東隅を拡張し、土器を平面において検出することとした。第3層上面まで掘削して精査したが、この時点では掘り方を確認できなかったため掘削を続けたところ、横位になった甕を検出した。あらためて周辺を精査したところ掘り方を確認することができ、土器棺であることが判明したのである。

土器棺については後述するとして、他の調査区の報告を先に進めることとする。他の調査区においても部分的に攪乱を被っているところがあるものの、第4・第5・第6トレンチでは造成土下から旧表土が検出され、造成時に削平は受けていないようである。第7・第8トレンチにおいては造成土の堆積すら見られず、造成前の地形を残しているようである。いずれの調査区でも、旧表土下に1層あるいは2層の間層をはさんで地山を検出している。遺構は検出されていないものの、第6トレンチの攪乱土中から須恵器片が数片出土している。(清家)

土器棺墓 第2トレンチの東隅コーナー付近、地表下約0.7~0.8m、標高約60.3mで検出した。土壇の平面形は不整な楕円形で、長軸がおよそ南北方向である。土壇西側の大部分は攪乱を受け削られている。土壇は南壁土層の観察から第3層より掘り込まれたと推測される。土壇の掘り込み下端は南壁および東壁土層の観察から地山直上の第4層に達していると捉えられた。

残存する土壇の長径は0.88m、短径は0.27m、最深部の深さは0.18mを測る。土壇断面の形状は緩やかな弧状を呈する。

土壇内埋土は明褐色シルトで、土器棺の下半部を覆っている。土器棺設置の際に施されたと推測される置き土の層は、不明瞭なため見出せなかった。土器棺内埋土は褐色シルトである。土器棺内埋土から

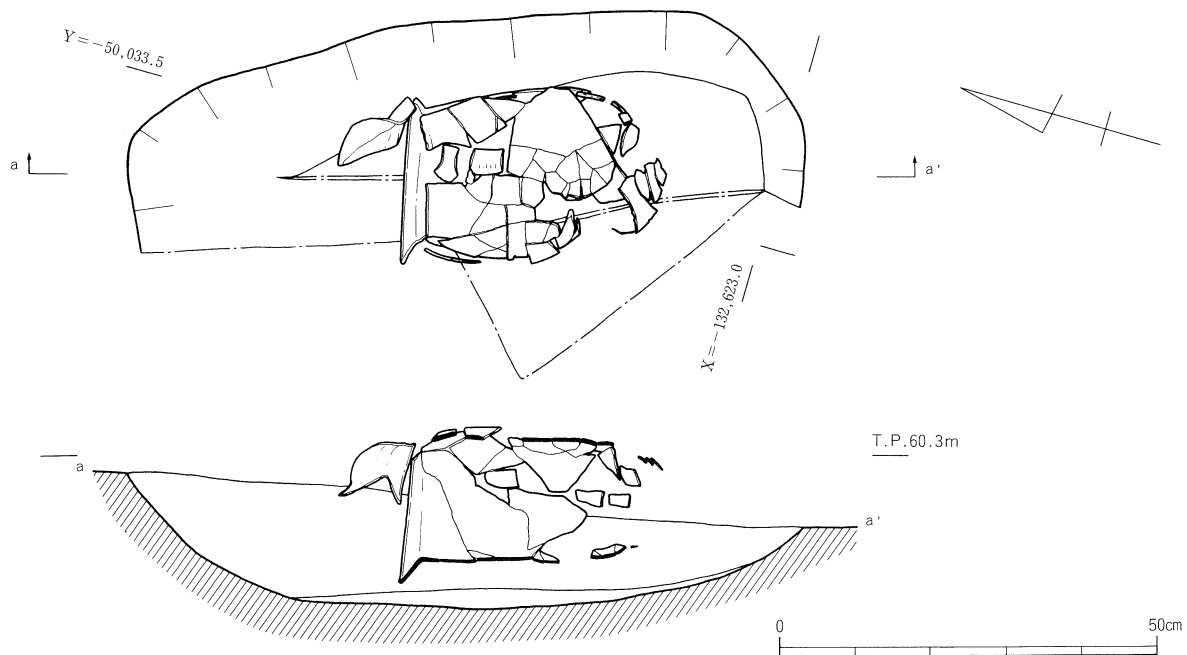


図61 土器棺平面・断面図

は、土器片数点を検出したにとどまった。

土器棺は2個体の土師器甕の口縁を合わせ、ほぼ横位の状態で出土した。土器棺の長軸は土壌の長軸に沿っており、ほぼ南北方向である。

北側から出土した土器棺は、土壌同様に西側の大部分が攪乱を受けていたため残存状況が良好でなかった。ただし、口縁部から胴部にかけての東側の一部は原状をとどめており、南側から出土した土器棺との関係が捉えられた。なお、攪乱を受けて原位置をとどめていないと判断された土器片については、随時とりあげた。

南側から出土した土器棺は、残存状況が良好であったため、ほぼ原状をとどめていと推測された。しかし、検出過程において胴部から底部の一部では欠けている部分が存在することが確認された。その欠けた部分のうちの一部は、土器棺内部の埋土に含まれていた土器片と接合する。

出土遺物 土器棺に使用された土器は2個体で、いずれも土師器甕である。棺に使用された土器以外に遺物は出土していない。

1は南側に埋置された甕である。残存率は約

60~70%で主に底部付近を欠くが、特に打ち欠いた形跡は認められない。

口縁部断面は「く」字状に屈曲しやや直線的に開く。口縁端部は外傾し端面をもつ。胴部はやや長胴であり張らない。底部は丸底を呈する。分量は口径が22.2cm、胴部最大径が21.5cm、残存器高が29.2cmである。

内面調整は、口縁部付近が断続的なヨコハケ、頸部付近がヨコナデ、胴部上位がヨコハケ後ナデ、胴部中位から下位がタテ方向のケズリ後ナデである。また内面には粘土帯の継ぎ目や指頭圧痕が残されており、粗雑な仕上げがうかがえる。現状で観察しうる粘土帯幅は約2.5~3.0cmである。

外面調整は口縁端部から頸部付近がヨコナデ、胴部が断続的なタテハケ、底部付近が不定方向のハケである。また口縁部の一部には、胴部に施したハケ工具の終点と考えられる痕跡が認められる。

胎土は石英や白色粒、赤色粒などの砂粒・細粒を若干含む。色調は内外面とも橙色で、焼成は良好である。胴部片側下半には黒斑が認められるが、煤の付着はなく煮炊きに使用された痕跡はない。

2は北側に埋置された甕である。残存率は約

20~30%で口縁部から胴部上半が残存していた。

口縁部断面は「く」字状に屈曲しやや直線的に開く。口縁端部は外傾し端面をもつ。胴部はやや長胴であり張りがない。底部は残存していないためその形状が不明であるが、胴下部の形状から丸底が推定される。法量は口径が22.4cm、胴部最大径が22.6cm、

残存器高が22.9cmである。

内面調整は、口縁部から頸部付近が断続的なヨコハケ、胴部上位がヨコハケ後ナデ、胴部中位から下位がタテ方向のケズリ後ナデである。また内面には粘土帯の継ぎ目や指頭圧痕が残されており、粗雑な仕上げがうかがえる。現状で観察しうる粘土帯幅は

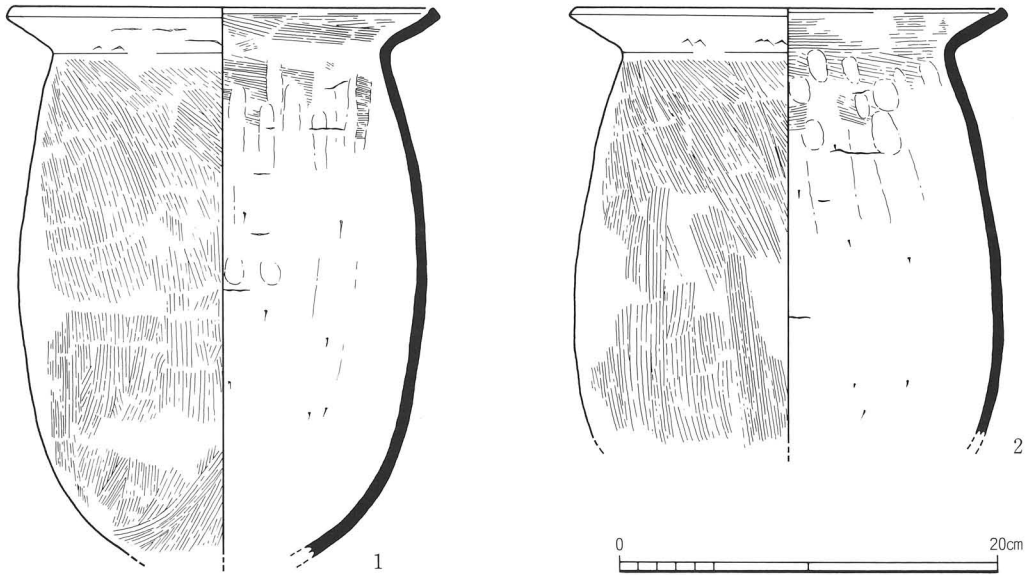


図62 出土遺物実測図



図63 土器棺 1

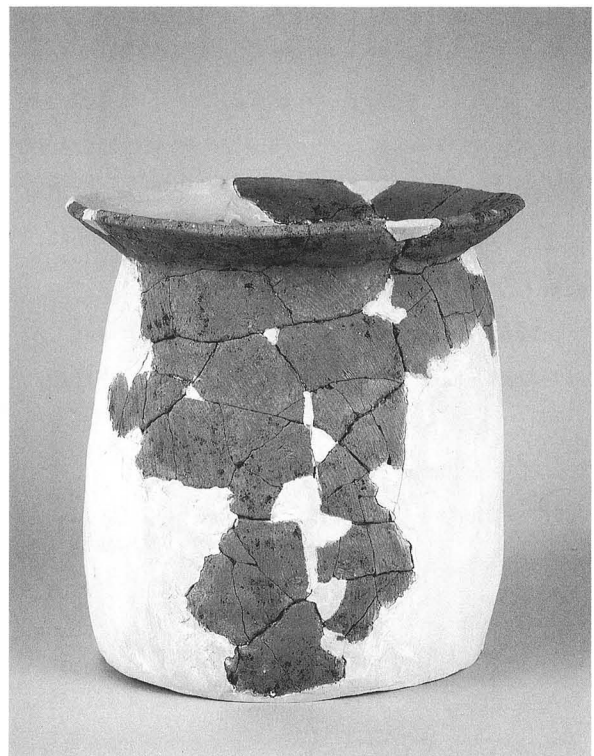


図64 土器棺 2

約2.5～3.0cmである。

外面調整は口縁端部から頸部付近がヨコナデ、胴部が断続的なタテハケである。また口縁部の一部には、胴部に施したハケ工具の終点と考えられる痕跡が認められる。

胎土は石英や白色粒、赤色粒などの砂粒・細粒を若干含む。色調は内外面とも橙色で、焼成は良好である。現状で観察しうる残存部位に黒斑および煤の付着はない。

以上のように両者はほぼ同型式と捉えられる。両者は口縁部断面が「く」字状を呈すること、調整がタタキや受け具の痕跡を残す段階以前のものであることなどから、所属時期は8世紀前半頃と推測される。土器の地域的特徴は小笠原好彦氏の分類による「河内型」及び「和泉型」に近似し、大阪湾沿岸地域との共通性がうかがえる（小笠原1980：pp.55～56）。本事例に類似した古代土師器の合口土器棺の例は、摂津地域で土室古墳群（大阪府高槻市）、梶原古墳群（大阪府高槻市）などがある。これらはいずれも丘陵先端の微高地上に位置する。（西谷）

小 結 この調査区は、キャンパス造成に伴う攪乱が及んでいる部分があるものの、旧地形が保存されている箇所も多いことが明らかとなった。第2トレンチからは奈良時代の土器棺が検出され、他のトレンチから須恵器片も数片出土していることから、当調査地点に土器棺以外の遺構が遺存している可能性は高い。

奈良時代の遺構は大阪大学石橋団地内では初の検出例となる。キャンパスの南側に位置する南刀根山からは奈良時代の骨蔵器が見つかった（豊中市史編纂委員会1960：図版43・44）。今回調査された土器棺と時期が近く、墓という遺構の性格も共通する。

当調査地点の眼下には奈良時代の大集落である宮ノ前遺跡が広がっており、そうした集落域に対応する墓域の性格を持っていた可能性があろう。今後の調査に期待したい。（清家）

参考文献

- 秋山浩三 1996「近畿南部の煮炊具—播磨・摂津・河内・和泉・紀伊・淡路—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4煮炊具—』古代の土器研究会、奈良：pp.27—35
- 小笠原好彦 1980「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27巻2号 考古学研究会、岡山：pp.53—65
- 佐藤隆 1996「摂津東部」『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会、奈良：pp.214—234
- 豊中市史編纂委員会 1960『豊中市史』史料編1 豊中市役所、大阪
- 三好美穂 1996「都城の煮炊具—藤原京・平城京・長岡京・平安京—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4煮炊具—』古代の土器研究会、奈良：pp.6—26
- 山田良三 1979「土師器合口甕棺墓について」『橿原考古学研究所論集』第四 吉川弘文館、東京：pp.405—432
- 名神高速道路内遺跡調査会 1998『土室古墳群』、大阪
- 名神高速道路内遺跡調査会 1998『梶原古墳群』、大阪

第10調査地点の成果

調査面積：24m²

調査期間：010130～010331

調査担当：清家 章

調査区の設定 第10調査地点は第9調査地点の東側にあり、大学の入り口、通称石橋門から北へ続く私道沿いに位置する。地形的には丘陵の最高所から南東方向に延びる尾根頂部先端部分とその南側斜面を下りきった平坦面にあたる。尾根頂部に2箇所、平坦面に4箇所のトレンチを設定した。

調査成果 尾根頂部には第1トレンチと第2トレンチを設定した。両トレンチともに表土直下から地山が検出されている。キャンパス造成時に削平を受けたものであろう。遺構・遺物ともに認められなかった。

第3トレンチは石橋門の私道を挟んだ北側に設置した。2m四方の調査区を設けたが、地表下70cmまで瓦礫を多数含んだ造成土が堆積し、その直下から地山が検出されている。

第3トレンチの東側25mには、時期は不明であるが、4.5m×1.5mの長方形を呈する深さ0.5～2mに及ぶ掘削跡が存在していた。この掘削跡を精査し第4トレンチとした。第4トレンチの壁面を観察すると、表土下30cmで旧表土が認められた。旧表土の直下からは地山が検出された。つまり、この付近は地山まで及ぶ掘削が1度行われた後、しばらく地山が露出していたものと思われる。その後、造成土がおかれ、再び掘削が行われたのだと考えることができる。

第4トレンチのさらに10m東に第5トレンチ、さらに5m東に第6トレンチを設置した。第5・第6トレンチ付近は造成が行われた様子は観察されなかった。表土下1.0mで地山面を検出した。表土から地山上面までは、大阪層群に由来すると思われる土が流れ込んで堆積していた。その土層の中から、第5・



図65 調査区配置図

第6トレンチの両方において須恵器が数片出土している。小破片のため図示できなかったが、おそらく古墳時代のもと思われる。

小 結 尾根頂部ならびに平坦面の西半部は大きな削平を被り旧地形はほとんど遺存していなかった。

しかし、東半部は造成が行われた様子がまったくなく、流土中からの出土ではあるが、須恵器が数片出土した。おそらく第10地点の北側に古墳時代の遺構があり、そこから流れ込んできたものと思われる。今回は遺構こそ検出できなかったが、当調査地点の東半部には、遺物が少なからず含まれている可能性が高い。今後の開発には注意が必要である。

(清家)



図66 第1トレンチ

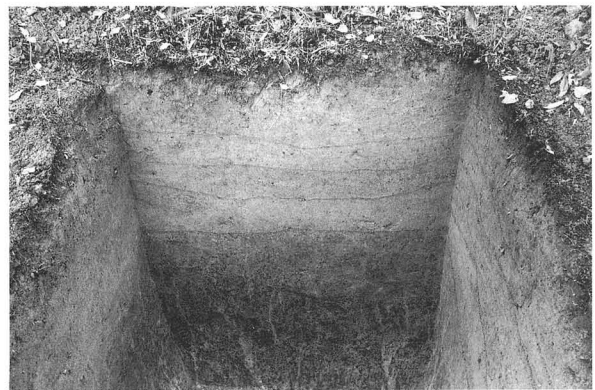


図67 第6トレンチ

第13調査地点南半部の成果

調査面積：44㎡

調査期間：980309～980313

調査担当：杉井 健

調査地点の立地 当調査地点は丘陵の最高所から南西方向に延びる尾根の頂部先端にあたる。ここにはかつて医療技術短期大学の校舎が建設されていたので、丘陵頂部とはいえ、かなり広い平坦地となっている。このため、校舎建設に際して平坦地を確保する目的で丘陵頂部を削平するような地形の変更が行われていることが、調査前から予想された。そこで、旧地形が残存している可能性の高い平坦地周縁部を中心に試掘坑を設定した。

調査成果 丘陵頂部の周縁部分に第1～第4と第8・第9トレンチを設定した。丘陵頂部の平坦面に第5～第7トレンチを設置した。

まず、丘陵頂部の平坦面について報告する。第5～第7トレンチの地山上面は標高65.2～65.6mの高さで水平に整地されていた。いずれのトレンチにおいても地山直上に瓦礫を多く含む造成土ないし盛土

が堆積していた。校舎建設時に丘陵頂部が地山まで削平され水平に整地されたものと考えられる。

次に丘陵頂部の北側周縁部に設けた第1～第3トレンチを見てみよう。第1トレンチでは黄褐色シルトからなる地山が地表下2mで検出されている。第2・第3トレンチにおいては地表下20～30cmという浅いところから地山を検出している。いずれのトレンチでも地山直上に造成土が堆積している。つまり、一度地山まで削平された後に、造成土が堆積しているのである。

次に丘陵平坦地南側周縁部について記述を進める。第4トレンチでは、地表下約1mの深さで西側に傾斜する地山面を検出した。地山の直上に造成土が堆積している状況は他のトレンチと同様であるが、地山面で人為的な掘削が観察された。調査範囲が限られていたため、その性格と掘削時期は不明である。第8トレンチでは旧地表が残存していることが確認

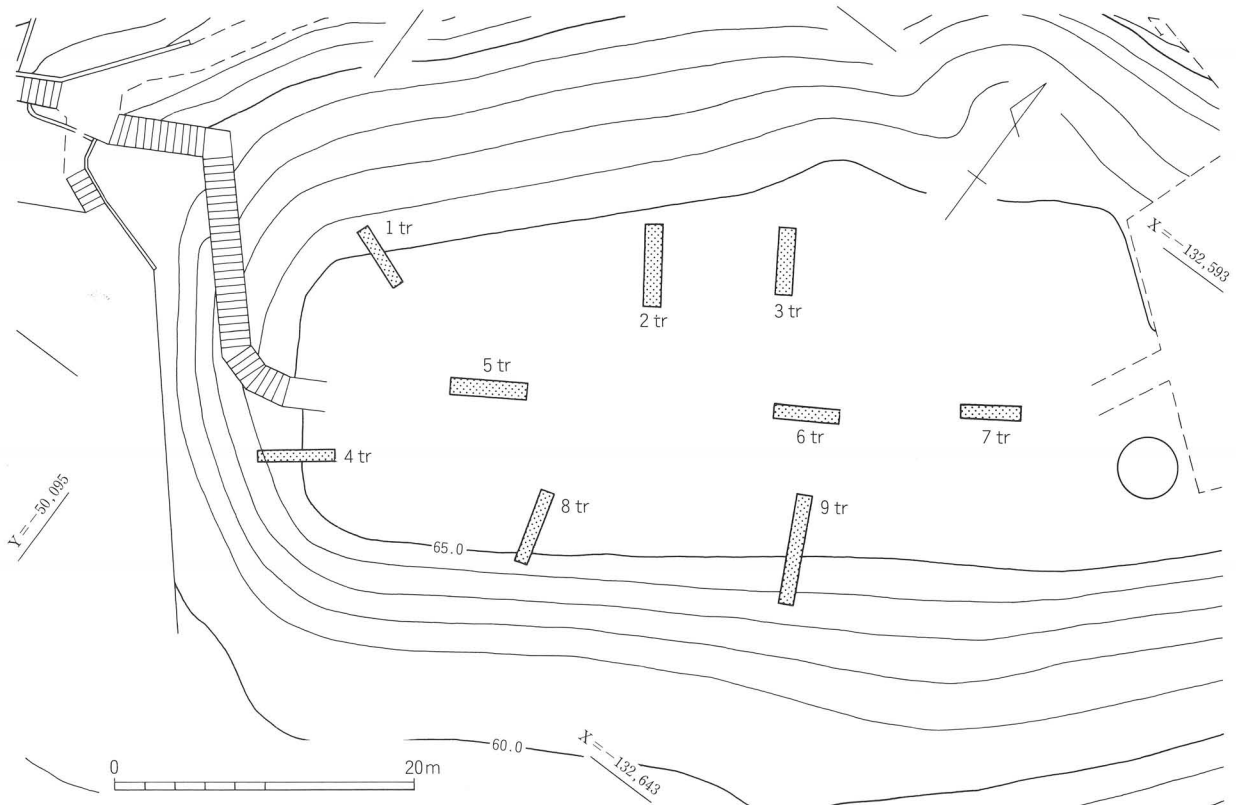


図68 調査区配置図

された。つまり、この周辺では地山に達するほどの改変を受けておらず、旧地形が残存しているのである。旧表土と地山の間には厚さ20cmの褐色粘質土層が認められる。この層からは遺物は出土しなかったものの、造成時に攪乱を受けていないので、遺物を含む可能性を持つ。第9トレンチでは厚さ5cmの造成土の下から地山面が検出されている。この付近はキャンパス造成時に地山まで削平を被ったものと思われる。



図69 全景

小 結 今回調査したほとんどのトレンチにおいて、地山の直上に、医療技術短期大学の校舎建設に伴うと考えられる造成土が堆積していることを確認した。遺構と遺物はともに検出されていない。とくに頂部平坦地は、地山に達するまで改変を受けているため、埋蔵文化財を包含するような層は残存していない。よって、頂部平坦面の開発行為に関しては支障はないものと判断される。しかし、当調査地点の西側にある第7調査地点では上部から流れ込んできたと思われる埴輪片が1点出土しており、かつては本調査地点に古墳があった可能性もある。下に述べるように当調査地点南西部においては旧地形や包含層の存在の可能性が指摘されることから、平坦地から傾斜変換点付近については立合調査などの処置を施す必要を感じる。



図70 第1トレンチ

当調査地点の西端部にある第4トレンチでは人為的な掘り込みが確認され、第8トレンチでは旧地形が残存していることが判明している。限られた範囲の調査なので第4トレンチの掘り込みの時期や性格は不明であるが、遺構である可能性も存在する。第4・第8トレンチ周辺ならびに丘陵西側斜面部分における今後の開発行為前には、何らかの調査処置が必要と考える。とくに丘陵頂部平坦地から斜面への傾斜変換点付近は十分注意する必要がある。



図71 第3トレンチ

(杉井・清家)



図72 第8トレンチ

Ⅲ 大阪大学石橋団地内における試掘調査と立会調査

III 大阪大学石橋団地内における 試掘調査と立会調査

大阪大学のキャンパスにはさまざまな時代の遺跡の存在が確認されている。石橋団地の全域が待兼山遺跡の中にあり、中之島の医学部跡地は近世の蔵屋敷跡として、周知の遺跡の範囲内にある。大阪大学では、大学内の遺跡の調査と保存に対応するため、「大阪大学埋蔵文化財調査委員会」を設置している。委員会では、学内の建設に伴う遺跡調査に関する事項を協議し、調査に関わる専門委員をおいて、種々の工事と調査の対応を行っている。

委員会による指導の下、校舎建築工事などの大規模な工事や遺構・遺物が検出される可能性の高い地点に関しては試掘調査を行って、事前に埋蔵文化財の有無を確認している。配管や道路標識など軽微な工事に関しては立会調査を行って文化財の保全に対応している。

これまでに1988年に学術報告書を発行し、1988年



図73 共同溝ステーション立会調査

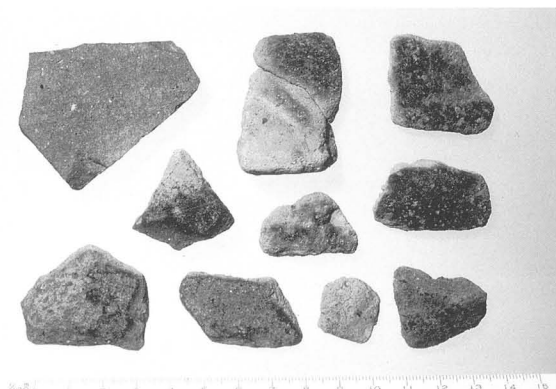


図74 ガス整圧機試掘調査出土遺物

3月までに行われた調査については、そこで報告がなされている（福永編1988：pp. 5—6）。それ以後も、本学構内では工事計画が中断なく続き、その度に調査を行っている。

本章では、1988年4月から2000年12月までに行われた調査について報告を行うものである。旧医療技術短期大学における試掘調査については、前章で示しているため、ここでは割愛した。

なお、以下の報告の執筆は、基本的に調査担当者が行っている。調査報告の番号は図112の番号に対応している。（清家）

参考文献

福永伸哉編 1988『待兼山遺跡II』大阪大学埋蔵文化財調査委員会、大阪

1 石橋団地基幹整備（共同溝）試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 880524～880607

調査結果 乳母ヶ谷池北西岸付近に設置するポンプ室工事に伴う試掘では、埋め立て後、池内に最大で深さ2mほどのトレンチを数カ所設定したが、ヘドロと砂層のみで、近世の池開削以前の層には届かず断念した。学生会館北西隣に設置するステーション工事に伴う試掘および立会調査では、上山池岸付近は5m以上の盛土で下の状況は不明。待兼山会館のある丘陵裾部では良好に旧地形は残存するが、トレンチ内からは遺物の出土なし。

2 ガス整圧機移設工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 881114～881117

調査結果 整圧機設置場所およびその周辺に7箇所のトレンチを設定して、試掘を行った。小規模な谷地形をしながら、中山池北東岸に下っていく旧地形が良好に残存していた。2箇所のトレンチから、羽釜などの中世土器片が出土した。地形から見て、北方の尾根部分に中世集落の中心部分が存在し、そこで用いられた日常用土器が調査地点に堆積したものと判断できる。本地点および周辺の開発にあたっては本調査が必要である。

3 教養部ロ大講裏自転車置き場等撤去立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9001

調査結果 ロ号館東隣に自転車置き場を設置する工事に伴う立会調査。現地表下50cm程度の盛土の下に地山が続く。地山はすでに削平を受けており、旧地形は残存しなかった。

4 刀根山寮周辺改修工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9002~9003

調査結果 寮周辺の雨水排水改修工事関係の工事立ち会い。U字溝などの埋設で浅い掘削のため、表土以下の状況は不明。

5 教養部物理学棟裏法面補修工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9003

調査結果 崩壊した法面を補修する工事に際して、土層観察。法面中に有機質味を帯びた黑色土の落ち込み状の土層変化を確認。土器などは確認できなかったが遺構の可能性あり。危険なため、精査は断念した。

6 ロ号館前シンボルゾーン整備工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9007~9008

調査結果 ロ号館前のメインストリートに舗床ブロックを設置する工事。掘削は浅く盛土内で終わる。

7 教養部二号館解体工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9107~9108

調査結果 厚さ1mから2.5mの造成土の直下から地山を検出した。遺構・遺物ともに無し。

8 基礎工学部情報工学科校舎建設試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 911030

調査結果 試掘の結果、地山上に造成土を盛り水平に整地していることが判明した。遺構・遺物は認められなかった。

9 附属図書館北側周辺工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9202

調査結果 藤棚周辺の樹木植え替え工事に立ち会い。最深1.5mの坪掘り。掘削範囲が狭くわかりにくいのが、盛土内で終わったもよう。

10 言語文化研究科校舎建設工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 921121~921125

調査結果 上山池を埋め立てた部分にあたる。現況では平坦面であるが、ほんらいは池の東端にあたる。東西方向にトレンチを4本設置したが、池底のヘドロなどのため十分な土層観察はできなかった。遺物は認められなかった。



図75 ロ大講裏自転車置き場撤去立会調査



図76 教養部物理学棟裏法面補修工事立会調査

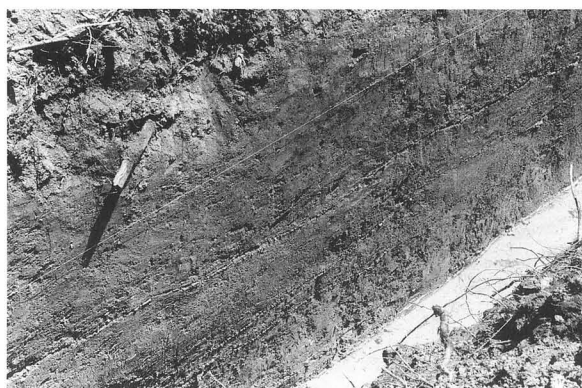


図77 教養部二号館解体工事試掘調査



図78 言語文化研究科校舎建設工事立会調査

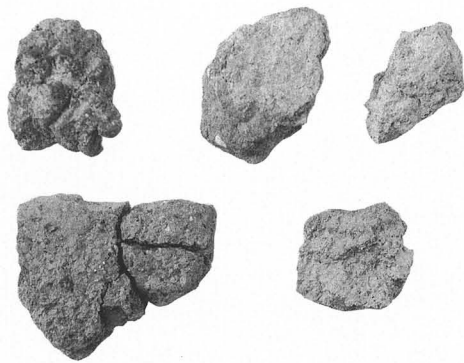


図79 駐車場建設工事試掘調査出土遺物



図80 基礎工学部ポンベ庫建設工事試掘調査



図81 教養部校舎建設工事立会調査



図82 理学部宇宙物理科校舎建設工事試掘調査

11 駐車場建設工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 921121～921125

調査結果 調査区南半では表土直下で地山を検出した。キャンパス造成時に削平を被ったものと思われる。一方、南半は厚い造成土の下に旧地形が残存していることが判明した。掘削深度が2.5m以上に及ぶため、造成土下の状況は十分追求はできなかったが、揚げ土から約10片の土器を採集した。弥生土器か埴輪と考えられる。

12 駐車場建設工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9301～9302

調査結果 1992年11月に試掘した箇所の上会調査で検出した遺物が出土した層まで届かない。

13 基礎工学部ポンベ庫建設工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9302

調査結果 工事域内の2箇所で坪掘りを実施。現地地表3mまで盛土。それ以下は改変が及ばないため未調査。この地点は乳母ヶ谷池に岬状に張り出す部分であるが、上層はほとんどがキャンパス造成時に押ししてきた盛土と判断。

14 情報ネットワーク設備工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9311～9312

調査結果 極限物質研究センター周辺の工区を重点的に調査を行う。現地地表下1m内外の掘削。ほとんどが盛土内で終始。

15 教養部校舎建設工事立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9312

調査結果 二号館解体後の校舎新設工事においてコンクリートパイル打設時の掘削揚げ土を観察するが、遺物は確認できなかった。

16 理学部宇宙物理科校舎建設工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 930707～930712

調査結果 15箇所のトレンチを設置したが、重機の掘削可能深度で地山を検出したトレンチは2箇所にすぎない。そこでも旧地形は大きく削平されていることが判明した。

17 理学部RⅠセンター増築工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 931220

調査結果 15本のトレンチを設置した。旧地形は南へ下る傾斜面であり、造成土を盛って平坦面が形作られている。4m以上掘削しても、地山に達しないトレンチが多く、造成土下の状況が判明した2本のトレンチによれば旧地形が失われていることが判明した。

18 基幹整備（ガス管埋設）関連立会調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9401

調査結果 地表下150cmまで濁黄褐色粘質土存在。木ぎれを含む汚れた粘質土で、キャンパス造成時の盛土と判断。工事掘削深度の関係で、調査は盛土下までは至らず。

19 国際交流会館建設工事試掘調査

担当者 福永伸哉 調査日程 9402

調査結果 池埋め立て部はオールケーシング作業時のあげ土を観察。遺物なし。池東岸方向の法面付近では旧地形良好に残存。出土遺物はないが、学内の他地点では遺物が出土した同じ層が存在しており、今後注意が必要である。

20 豊中地区総合グラウンド防球フェンス設置

担当者 福永伸哉 調査日程 9403

調査結果 乳母ヶ谷池北東岸付近の支柱設置場所の掘削に立ち会い。深度1～2m。すべて盛土の範囲内にあり、遺構・遺物ともに認められなかった。

21 文学部美学棟エレベーター工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 940526～940601

調査結果 現地地表下0.7mで地山を検出した。地山の直上まで造成土が堆積しており、遺構・遺物は認められなかった。

22 基幹・環境（共同溝）工事（正門付近）立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 940606～940608

調査結果 現地地表下1.7mで地山を検出した。地山の直上まで造成土が堆積しており、遺構・遺物は認められなかった。

23 旧教養部（ロ号館）エレベーター工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 940614

調査結果 現地地表より30cm、造成土直下で地山を検出した。

24 第2国際交流会館ガス配管工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 940620

調査結果 かつてのガス配管工事で掘削された箇所の再掘削であるので、掘削範囲には遺構や遺物は遺存していなかった。ただし、かつての掘削が及んでいないところでは、旧地形が残存していることが判明した。

25 石橋福利会館（待兼山会館）改築工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 940727～940824

調査結果 既存建物の整地層直下から地山が検出された。遺構・遺物ともに認められなかった。



図83 国際交流会館建設工事試掘調査



図84 文学部美学棟エレベーター工事立会調査

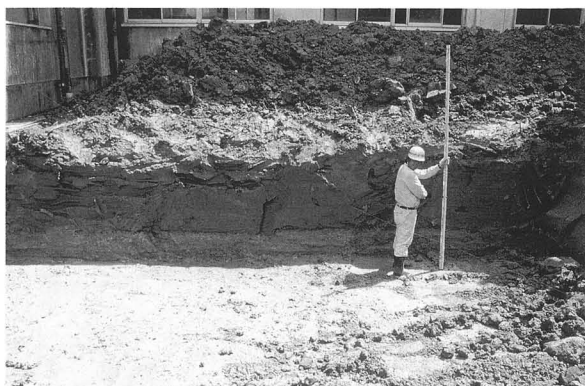


図85 旧教養部エレベーター工事立会調査

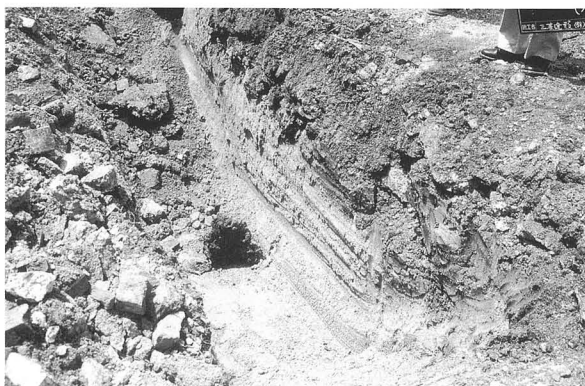


図86 石橋福利会館改築工事立会調査



図87 共同配水管設備工事立会調査



図88 井水配管及び給水管改修工事立会調査



図89 災害復旧（中山池周辺）工事立会調査



図90 石橋福利施設建設工事試掘調査

26 配管確認のための掘削立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 941013～941020

調査結果 いくつかの地点で旧地形が残存していることが明らかとなったが、遺構・遺物はともに認められなかった。

27 消火栓漏水原因探求に関する掘削工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 941214

調査結果 かつての給水管配管工事で掘削された箇所の再掘削であるので、掘削範囲には遺構や遺物は遺存していなかった。

28 共通教育管理講義棟新営機械設備工事に関する口号館系統屋外埋設汚染配水管の迂回工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 950118～950119

調査結果 工事の掘削は地表下3mまで及んだが、造成土の堆積内に掘削はとどまった。

29 共通教育管理講義棟その他工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 950217～950227

調査結果 当地点の南半は現地表より3m下でも造成土が堆積しており、旧地形や地山が残存していたとしても、さらに地下にあるものと思われる。北半では旧地形が残存しており、地山上に黄色粘性砂質土の堆積が認められた。この土層は他の調査地点では遺物を含むことがあるので、注意深く観察したが、この調査ではその存在を確認することはできなかった。

30 共同配水管設備工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 950306～950307

調査結果 かつての配管工事で掘削された箇所の再掘削であるので、その埋め戻しの土が確認されたにすぎない。遺物は出土していない。

31 井水配管及び給水管改修工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 950306～950329

調査結果 配管設置工事のため、工事によるすべての掘削は1m以内の深度で収まり、造成土を検出するにとどまった。

32 災害復旧（中山池周辺）工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 950307～950315

調査結果 工事は、1994年9月7日におきた水害の際に移設した水道管を復旧する作業であった。掘削深度は1m程度であり、地表下から掘削深度までは造成土で占められていた。一部で地山を検出している。

33 石橋福祉施設建設工事試掘調査

担当者 杉井 健 調査日程 950314～950322

調査結果 すべてのトレンチにおいて表土直下あるいは造成土直下から地山が検出された。

34 機械設備災害復旧工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 950523

調査結果 基礎工学部前のメインストリート西側にある斜面を掘削した。メインストリートに近いところでは、表土直下から地山が検出された。ただ、丘斜面上方では旧地形が遺存していることが確認された。

35 仮設課外活動施設建設工事試掘調査

担当者 杉井 健 調査日程 950626～950627

調査結果 現地表から3m以上掘削を行ったが、造成土が確認されたにとどまる。旧地形や地山はさらに深いところにあるものと考えられる。

36 ゴルフ練習場建設工事試掘調査

担当者 杉井 健 調査日程 950707～950711

調査結果 現地表から地下50cmで地山を検出した。当地点はかつて旧医療技術短期大学校舎が建っていた場所に当たり、その造成時に大きく削平を被ったと思われる。

37 理学部東側配管工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 951024

調査結果 二尾池西側にある井戸から理学部への配管工事による掘削に立ち会う。掘削箇所は二尾池への傾斜地、および理学部東側の駐車場である。二尾池への傾斜地では、配管をすえる基礎部分のみの掘削（掘削深度50～70cm程度）であったため、表土とその下部の造成土を確認したにとどまる。理学部東側の駐車場では、掘削深度が1.5mにおよぶ筋掘りであったが、青灰色粘土、および黄褐色粘土の造成土の堆積を確認しえたのみである。

38 配水管敷設工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 951026～951101

調査結果 ラジオ・アイソトープセンター西側道路から南へ向かっての筋掘りに立ち会う。掘削深度は3m程度におよんだが、中央環状線道路付近およびその北側の空閑地では、造成土の堆積を確認したにとどまる。一部では、掘削深度最下層において、かつて埋設されたヒューム管を検出している。一方、ラジオ・アイソトープセンター西側道路地点では、深度1.5～2mにおいて、南へ傾斜する旧地表を検出した。その直下に礫混じりの黄色砂質土が厚さ数10cm程度堆積していたが、遺物の包含を確

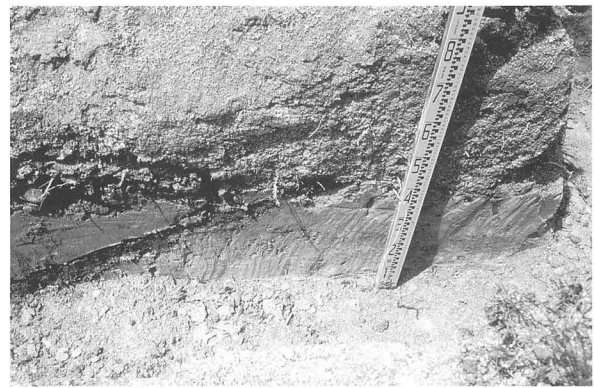


図91 仮設課外活動施設建設工事試掘調査

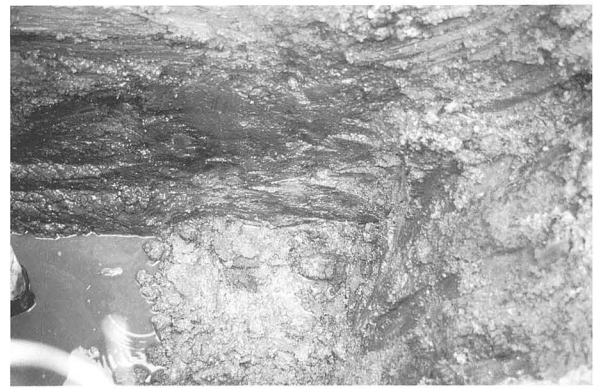


図92 ゴルフ練習場建設工事試掘調査

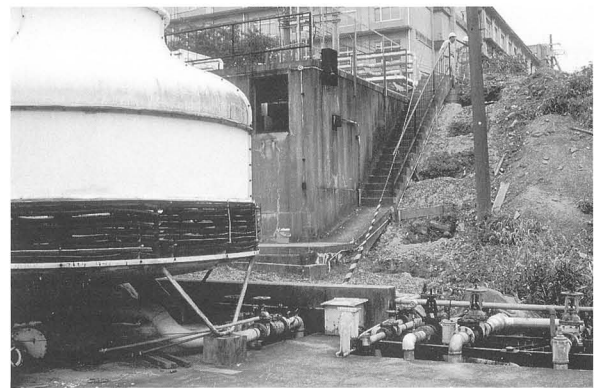


図93 理学部東側配管工事立会調査



図94 配水管敷設工事立会調査



図95 文法経棟中庭プレハブ建設工事試掘調査



図96 図書館本館西側入口前掘削工事立会調査



図97 鑿井工事立会調査



図98 共通教育校舎新管配管埋設工事立会調査

認することはできなかった。黄色砂質土の直下には、南へ傾斜する地山が存在することを確認した。

39 文法経棟中庭プレハブ建設工事試掘調査

担当者 杉井 健 調査日程 951114～951117

調査結果 2箇所に試掘坑を設定した。両トレンチでは造成土直下から地山が確認されたが、地山が確認されたレベルが1.6mも異なる。ほんらいこの地は南から北へ下る傾斜地であったものと推察される。

40 基幹・環境整備（共同溝）工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 9512～9606

調査結果 東食堂から理学部および基礎工学部東側へ通じる道路において行われた共同溝建設工事に随時立ち会った。掘削深度が5mに達する部分もあったが、そのほとんどの部分で造成土を検出するにとどまった。ただし、基礎工学部付近では造成土の堆積層が薄くなり、その直下に黄褐色粘土の地山が存在することを確認した。

41 図書館本館西側入口前掘削工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960111

調査結果 図書館本館の西側出入口前の掘削中に立ち会った。掘削深度は50cm程度であり、造成土を確認したにとどまった。

42 基礎工学部南側道路掘削工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960207

調査結果 基礎工学部および理学部側からラ・フォーレ食堂へ通じる道路の北端に沿った筋掘り（掘削深度60cm）に立ち会い、そのほとんどの部分で黄褐色粘土の地山と思われる土層を表土直下で検出した。ただし、筋掘りの東端部分では、地山が傾斜してレベルを下げていき、その直上に地山ブロック混じりの造成土が堆積している。

43 鑿井工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960329～960404

調査結果 当地はかつて建築物が存在したため、すでに造成された箇所であった。鑿井工事に伴って約7×2mの面積を深度1m程度掘削する工事に立ち会った。その上半部は造成土のみであったが、地表下50cm程度において、北西側に傾斜する旧地表を検出した。その下位には褐黄色粘質土が薄く堆積していたため慎重に精査したが、遺物の包含を確認することはできなかった。褐黄色粘質土の下位は、よくしまった灰黄色粘質土をはさんで地山にいたる。なお、掘削範囲の南東部では、すでに旧地表や褐黄色粘質土などは失われ、造成土の直下に地山が存

することを確認した。

44 共通教育校舎新営にかかる配管埋設工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960418～960422

調査結果 ロ号館解体に先立つ配管移設工事の筋掘りに立ち会い、掘削が造成土中にとどまることを確認した。

45 機械整備工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960510

調査結果 理学部校舎の東側中庭における配管工事の筋掘りに立ち会い、掘削が造成土中にとどまることを確認した。

46 共同溝工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960513～960528

調査結果 情報処理教育センター西側のテニスコート部分から文法経棟南側の道路にかけて行われた共同溝建設工事に立ち会った。掘削深度は3mにおよんだが、現地表下に、テニスコート造成に伴う約50cmの整地層が存在し、その直下は青灰色粘質土、および黄褐色砂質土の地山であった。

47 配管工事（基礎工学部北側）立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960618～960619

調査結果 基礎工学部北側における配管工事の筋掘りに立ち会い、掘削が造成土中にとどまることを確認した。

48 漏水箇所確認工事（柔剣道場東側）立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960624

調査結果 柔剣道場東側のアスファルト敷設部分を面積2×2m、深度1.5mにわたって掘削する工事に立ち会い、掘削が造成土中にとどまることを確認した。

49 ATMケーブル工事（ロ号館北側）立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960705～960708

調査結果 ロ号館北側道路における筋掘りに立ち会い、掘削深度が2mにおよんだが、青灰色粘土の造成土を確認するとどまった。

50 ATMケーブル工事（極限物質センター北側）立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960716

調査結果 極限物質センター北側道路における筋掘りに立ち会った。現地表下1m程度において、一部に旧地表が残存していることを確認した。掘削深度が1.3mにおよんだため注意深く観察したが、遺物の包含を確認するこ



図99 機械整備工事立会調査



図100 共同溝工事立会調査



図101 配管工事（基礎工学部北側）立会調査



図102 国際公共施設建設工事試掘調査



図103 旧医療技術短期大学跡地建物撤去立会調査



図104 基礎工学研究科実験棟建設工事試掘調査



図105 附属図書館建設工事試掘調査

とはできなかった。しかし、当地の南側では、以前の調査で遺物包含層の存在が確認されているため、今後の工事においても慎重に掘削を行う必要がある。

51 共通教育校舎(口号館南側建物西半部)立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 960821~960930
 調査結果 共通教育校舎新営工事に伴う基礎掘削中に随時立ち会ったが、造成土の存在を確認するにとどまった。

52 国際公共施設建設工事試掘調査

担当者 杉井 健 調査日程 970819
 調査結果 4箇所のトレンチを設置した。すべてのトレンチで造成土直下から地山を検出した。遺物・遺構ともに認められなかった。

53 理学部宇宙物理学棟建設工事立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 980127~980210
 調査結果 工事に伴う基礎掘削中に随時立ち会った。掘削深度は5mにおよんだが、造成土の存在を確認するにとどまった。

54 旧医療技術短期大学跡地建物撤去立会調査

担当者 杉井 健 調査日程 980212~980225
 調査結果 旧医療技術短期大学校舎の撤去工事に随時立ち会ったが、既設の上屋、および基礎の一部を撤去するにとどまったため、土層堆積状況を詳細に確認することはできなかった。

55 旧医療技術短期大学跡地第13地点南半試掘調査

担当者 杉井 健 調査日程 980309~980313
 調査結果 本書掲載

56 基礎工学研究科実験棟建設工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 980706~980708
 調査結果 7箇所の試掘坑を設置した。いずれの試掘坑においても、4m以上の造成土が堆積し、造成土下の状況を確認することはできなかった。当地は二尾池に続く谷地形であったと推察される。

57 防火水槽建設工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 981005~981006
 調査結果 2箇所の試掘坑を設置したが、地表下20cm前後で地山(大阪層群)を検出した。遺構・遺物とは認められなかった。

58 附属図書館建設工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 980928~981002
 調査結果 8箇所の試掘坑を設置した。いずれの試掘坑

においても、4 m以上の造成土が堆積し、造成土下の状況を確認することはできなかった。

59 旧医療技術短期大学跡地試掘調査 第1・第2・第5・第6調査地点

担当者 清家 章 調査日程 981201～990331

調査結果 本書掲載

60 文・法・経合同校舎建設工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 980217～980218

調査結果 当地点は、テニスコートとなっている平坦面とその南側の傾斜面からなる。平坦面では、現地表から2.6mの地下で地山を検出した。地山の直上まで造成土が堆積していたので、旧地形の削平後盛土が施された可能性が高い。南側の傾斜面では、地表下60cmで造成前の旧地表を検出した。さらに現地表から80～180cmで地山を確認した。遺構・遺物はともに認められなかった。

61 共通教育棟北側崖面掘削工事立会調査

担当者 清家 章 調査日程 9803

調査結果 崖面の頂部に2箇所、斜面に1箇所の試掘坑を設置した。地表下40～100cmで地山を検出した。地山の直上まで造成土が堆積していた。

62 上山池埋め立て工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 990420～990427

調査結果 護岸されていない池の南岸と北岸に試掘坑を設置したが、いずれも表土直下から地山が検出された。

63 仮食堂建設工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 990601～990602

調査結果 2箇所の試掘坑を設置した。地表下50～80cmで地山を検出した。地山の直上まで造成土が堆積していた。検出した地山は大阪層群と思われるが、その土中に貝殻のネガティブな痕跡が多数存在するのを確認した。

64 共通教育棟建設工事立会調査

担当者 清家 章 調査日程 990816

調査結果 基礎掘削中に立ち会い、現地表から3 mあまりまで掘削したが、造成土を検出したにとどまった。

65 RⅠセンター排水処理施設設備更新工事試掘調査

担当者 清家 章 調査日程 991004～991006

調査結果 当地は二尾池へ続く傾斜地にあたる。3 m以上掘削したが、造成土が確認されたにとどまる。



図106 上山池埋め立て工事試掘調査

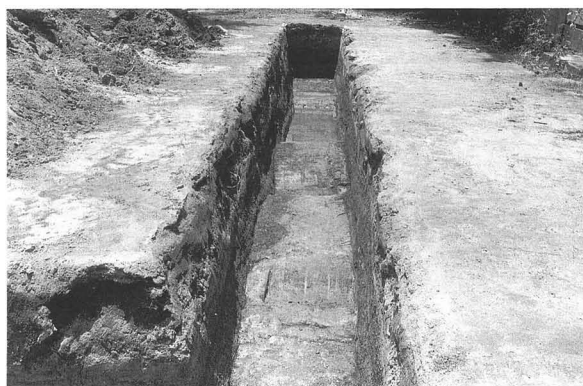


図107 仮食堂建設工事試掘調査



図108 排水処理施設設備更新工事試掘調査



図109 旧医療技術短期大学跡地内駐輪場設備工事

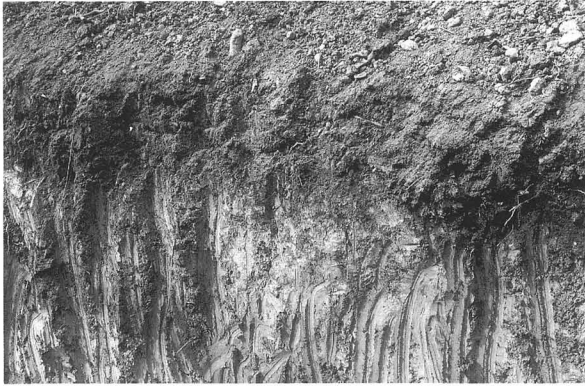


図110 大高の森石垣整備工事立会調査



図111 旧医療技術短期大学跡地内第9調査地点の土器棺

66 旧医療技術短期大学跡地内駐輪場設備工事立会調査

担当者 清家 章 調査日程 991214

調査結果 基礎掘削中に立ち会い、現地表から1.5mあまりまで掘削した。地表下1.2mまで造成土が堆積し、その下から造成前の旧地表を検出した。遺物・遺構ともになし。

67 大高の森石垣整備工事立会調査

担当者 清家 章 調査日程 000222～000225

調査結果 古い石垣の解体中、ならびに新規の石垣を設置するための基礎掘削時に立ち会いを行った。古い石垣設置時に、削平が行われていることが確認された。

68 旧医療技術短期大学跡地試掘調査 第3・第4・第7・第8調査地点

担当者 清家 章 調査日程 000228～000331

調査結果 本書掲載

69 文法経研究棟中庭連絡通路屋根建設立会調査

担当者 清家 章 調査日程 000315

調査結果 支柱設置時の基礎掘削に立ち会い、基礎が造成土中にとどまることを確認した。

70 旧医療技術短期大学跡地内イチョウ植え替え 工事立会調査

担当者 清家 章 調査日程 000531

調査結果 イチョウ植え替え時の掘削に立ち会い、内1本は、掘削深度が造成土中にとどまることを確認した。もう1本は第3調査地点内にあり、造成土ならびに造成前の旧表土中に掘削がとどまることを確認した。抜き取り痕を確認したところ、抜き取り穴の底で包含層が部分的に検出された。

71 旧医療技術短期大学跡地試掘調査 第9・第10調査地点

担当者 清家 章 調査日程 010130～010331

調査結果 本書掲載



図112 石橋団地内試掘・立会調査地点位置図（番号は本文48～58頁に対応）

Ⅳ 考察

1 古墳時代中期における倭王権の地域支配方式

—豊島地域における小古墳の検討を通して—

寺前直人

はじめに

大阪府豊中市に所在する大阪大学旧医療技術短期大学跡地（以下医短と略す）における第2調査地点では、部分的ながら2条の溝が検出され、古墳時代中期に属する埴輪が多数出土している。このような遺物と遺構のありかたから、本報告では1辺10m程度の方墳の存在を推定し、待兼山5号墳と命名した（本書：p.17）。そこで、本稿では待兼山遺跡における古墳築造の変遷をまとめたうえで、猪名川東岸地域の中期古墳の状況を検討することにより、待兼山5号墳のような小規模古墳の築造背景の追究を行う。

I 待兼山遺跡における古墳築造状況

時期的変遷 それでは、まず当古墳群の時期的変遷について検討していく。待兼山5号墳の東方約500mに位置する柴原待兼山古墳は、四神四獣鏡や鉄形石などが出土していることから前期古墳であるとみられる。墳丘形態は不明瞭ながら前方後円墳である可能性が指摘されている（藤沢1961）。

柴原待兼山古墳に後続する古墳時代中期前葉の古墳築造状況は現状では不明な点が多い。中期中葉以降になると次のような状況が認められる。医短第2調査地点では、周溝状遺構より無黒斑で突帯貼付後に静止ヨコハケが施された小型の普通円筒埴輪と

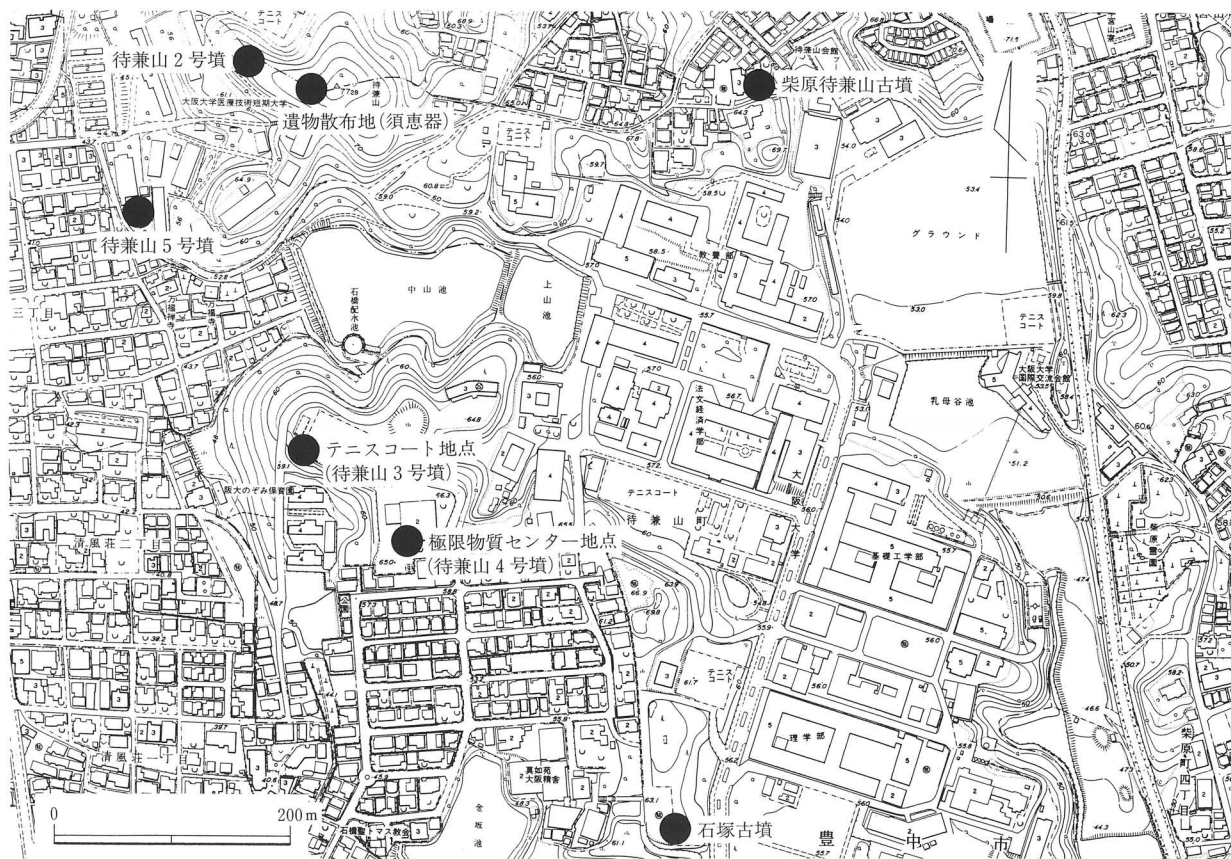


図113 待兼山遺跡における古墳の分布

もに、細片ではあるが2次調整が省略された円筒埴輪片が出土している。これら円筒埴輪の編年的位置については、周辺地域での類似した埴輪と須恵器の共伴例なども考慮した結果、田辺昭三の陶邑編年TK208型式の時期(田辺1966)、すなわち古墳時代中期中葉であるとした(本書: pp.14—22)。当地点における状況と共通したありかたは、1987年に調査されたテニスコート地点(待兼山3号墳)や極限物質研究センター地点(待兼山4号墳)でも認められる(福永編1988)。テニスコート地点では、丘陵斜面の堆積土中よりTK208型式の須恵器とともに無黒斑でヨコハケが施された小型の円筒埴輪と少数の2次調整が省略された小型の円筒埴輪が出土している。また、極限物質研究センター地点においても、丘陵頂部下の遺物包含層より、無黒斑の埴輪片が出土している。その構成は他の地点とは異なり、1点のヨコハケがみられる個体を除き、突帯貼付以前に施されたタテハケのみで調整を終えた小型の円筒埴輪片で占められている。同層からはTK47型式と思われる須恵器杯蓋片が出土している。ただし、後の2地点については、いずれも包含層資料であることから、須恵器との関係を含めその一括性はやや不安定である。

さらに待兼山5号墳の北東約150mには古墳状の高まりが認められ、裾部付近からは5世紀末から6世紀前半頃の須恵器片が表採されている。

古墳分布状況(図113) 次に各地点の位置関係について検討する。待兼山5号墳とテニスコート地点・極限物質センター地点とは直線距離でも約200m離れており、その間には谷地形をはさむ。また、かつて埴輪が表採され石塚古墳と命名されている地点は極限物質研究センター地点から、さらに約300m南東に位置している。各地点間における遺構の有無は、当遺跡が早い段階から造成や削平が行われているため、今日では不明な点が多い。ただし、図113にみられるように広域に埴輪出土地点が展開しているのには注意が必要である。

以上の状況をまとめると、待兼山遺跡では古墳時代前期に柴原待兼山古墳が築造された後、中期中半

の古墳築造状況は不明瞭となる。そして、中期中葉以降になると、窖窯焼成の埴輪をもつ古墳が広域に連続して営まれ、表採されている須恵器片から推測すると後期前半に至るまで古墳の築造が続いていた可能性がある。また、窖窯焼成の埴輪が検出されている3地点は約500m四方の範囲に分布しており、大幅な地形の改変を受けている現状では推定の域をでないものの、とくに古墳時代中期中葉以降、広い範囲で古墳築造が行われていた可能性も否定できない。

II 豊島地域における小古墳の動向

小古墳の定義 まず、当地域における小古墳の定義について検討する。図114は大阪府北部地域⁽¹⁾の古墳時代中期⁽²⁾に属する古墳の全長を、墳形および時期ごとに比較したグラフである。当図によれば、大阪府北部において前方後円墳(前方後方墳を含む)は全長226mから40mのものが認められる。ただし、茨木市所在の太田茶臼山古墳が全長226mと群を抜いて大きい以外は、いずれも100mを下回る。また、円墳は56mから6mと規模のばらつきが大きく、なかでも豊中市大塚古墳(全長56m)、高槻市土保山古墳(全長36m)、豊中市南天平塚(全長24m)など、全長20m以上の円墳には複数の短甲や刀剣類などの豊富な副葬品をもつ古墳が認められる。一方、方墳は60例以上の類例があるが、全長20m以上のものは認められず、10m前後のものが主流であることが、図114からはみてとれよう。さらに確実に中期中葉に属する方墳は今のところ認められず、中期中葉以降一気に増加している。大阪府北部におけるこのような各墳形のありかたに基づき、本稿では墳丘長20m以下のものを小古墳と呼ぶこととする。

豊島地域の状況 豊島地域は、早くから市街地化が進んだため多くの古墳が明確な記録も残されず破壊されており、全域での古墳の動向は今ひとつ不明瞭である。例えば、猪名川の支流である千里川南岸の低位段丘上に広がる桜塚古墳群は、明治時代の段階で36基の古墳が存在することが知られていたが(藤沢1961)、その後の開発のために多くの古墳が破壊され、今日では5基を残すのみである。しかしながら

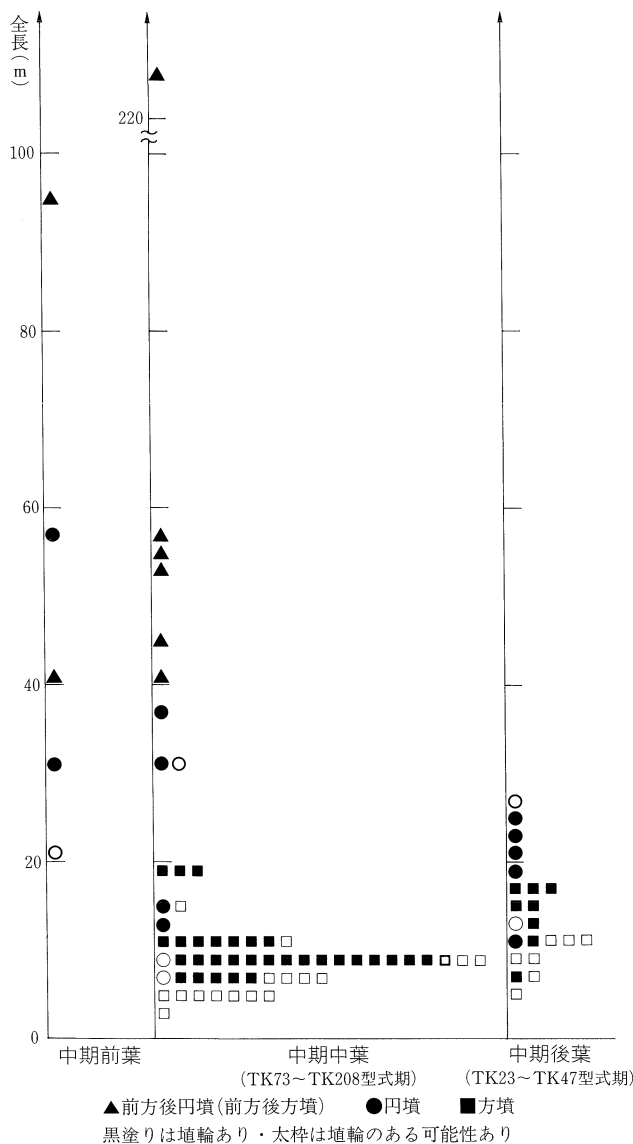


図114 大阪北部地域における
中期古墳の規模と形態

近年の調査によって、かつて破壊された古墳についても墳丘などに関する情報が明らかとなっており、古墳時代前期後半から中期後葉までの連続した古墳の築造が認められる。一方、待兼山遺跡の所在する千里川北岸の地域は、古墳時代前期には先述の柴原待兼山古墳や池田茶臼山古墳など腕輪形石製品等が副葬された有力な古墳の造営が認められるものの、古墳時代中期の動向については不明な点が多く、目立った古墳築造は認められない。

そこで以下では比較的状况が明らかとなっている桜塚古墳群の状況を中心に豊島地域の中期古墳の動

向についてみていきたい。まず、桜塚古墳群において古墳時代前期後半に全長76m以上の前方後円墳である大石塚古墳、全長49mの前方後円墳である小石塚古墳が連続して築造される(服部・柳本1980)。そして、古墳時代中期前葉になると墓域の移動がみられ、大石塚・小石塚の東方約1kmに直径56mと畿内地域でも有数の大型円墳である豊中大塚古墳(豊中市教育委員会1987)が築かれる。ただし、近年桜塚古墳東群に位置する嫁廻塚古墳より豊中大塚古墳に先行する可能性のある埴輪が出土しており(清水1994)、桜塚古墳東群の形成が従来考えられていたより遡る可能性が指摘されている。続く中期中葉には全長55mの前方後円墳である御獅子塚古墳が築造される。当古墳では突帯貼付後に静止ヨコハケが施された窖窯焼成の埴輪が樹立されており、またTK73型式に比定される須恵器の破片が検出されている(山元1986)。

御獅子塚古墳築造後の桜塚古墳群については不明な点が多い。副葬品等から南天平塚、北天平塚、豊中狐塚などが後続する古墳として考えられる。1937年の調査において短甲および衝角付冑そして杏葉を含む馬具が出土した南天平塚古墳(小林1937)は、近年の調査により直径24mの円墳であることが判明しており、静止ヨコハケをもつ窖窯焼成の埴輪の樹立が確認されている(柳本・清水1992:p.96)。これら円筒埴輪の中には2次調整が省略された個体もみられることから^③、御獅子塚古墳より後出する古墳であるといえよう。また、三角板鋌留短甲および横矧板鋌留短甲が出土している豊中狐塚古墳(小林1962)も、埴輪等の状況は不明であるが、南天平塚古墳や北天平塚古墳(藤沢1961、橘田1993)と近い時期の築造が考えられている(森岡・吉村1992)。

御獅子塚古墳以降に築造されるこれらの古墳には複数の甲冑や馬具、刀剣類など多数の副葬品が認められることから当古墳群の盟主墳的存在であることは確実である。しかしながら、墳丘規模は、30m以下の円墳、もしくは前方後円墳であるとしても50m以下であると考えられ、御獅子塚古墳以前と比べ墳丘規模の縮小が認められるのである。また、確実な

前方後円墳が御獅子塚古墳以降に存在しないということにも注意が必要である。

御獅子塚古墳以降における桜塚古墳群のもう一つの特徴としては、小規模な方墳の増加があげられる。桜塚古墳群第1次調査では、古墳周溝とみられる直線的な溝よりTK208型式前後の須恵器と共に埴輪が出土している(服部1992：p.45)。周溝が調査区外にのびるため、古墳の規模は不明であるが、方墳であるとすれば1辺15m以上となる。また、桜塚古墳群第3次調査では豊中大塚古墳に先行し桜塚古墳東群最古の古墳である可能性も指摘されている嫁廻塚古墳(円墳・30m)に近接して、桜塚第38号墳が発見されている。TK216型式からON46型式の須恵器が周溝から出土しており、1辺8m前後の方墳が想定されている(清水1994：p.50)。そして、第5次調査では、明治時代の絵図から小塚古墳が存在したと考えられる位置よりL字状の溝が検出された。溝からはわずかに埴輪片と須恵器小片が出土したにすぎないが、古墳時代中期中葉に属する可能性が指摘されており、1辺10m以上15m以下の方墳が想定されている(清家1995：p.30)。さらに1937年に破壊された北天平塚古墳が存在したと推定される地点の調査において、堆積状況の異なる2条の溝状遺構が検出されている(橘田1993)。そのうち南側に位置する周溝からは内面のタタキをすり消された須恵器大甕とともに、2次調整をもつ埴輪ともたない埴輪とが出土している(橘田1993)。報告者は、2つの溝の性格について、①両者を同一の古墳のものとして、北天平塚は前方後円墳となる可能性、②堆積状況や埴輪の出土状況から2条を異なる古墳のものであるとして、南側の溝は方墳を構成する溝となる可能性、の2案を提示している。堆積および埋没状況を根拠として後者見解をとるならば、さらにもう一つの方墳が、桜塚古墳群に加わることとなろう。なお図115では後者の見解に基づき、作図している。

以上のありかたからは、桜塚古墳群において中期中葉以降小規模な方墳の増加が認められるのである。

このような状況は、桜塚古墳群以外の豊島地域でも認められる。例えば桜塚古墳群の南方約1.5kmの低

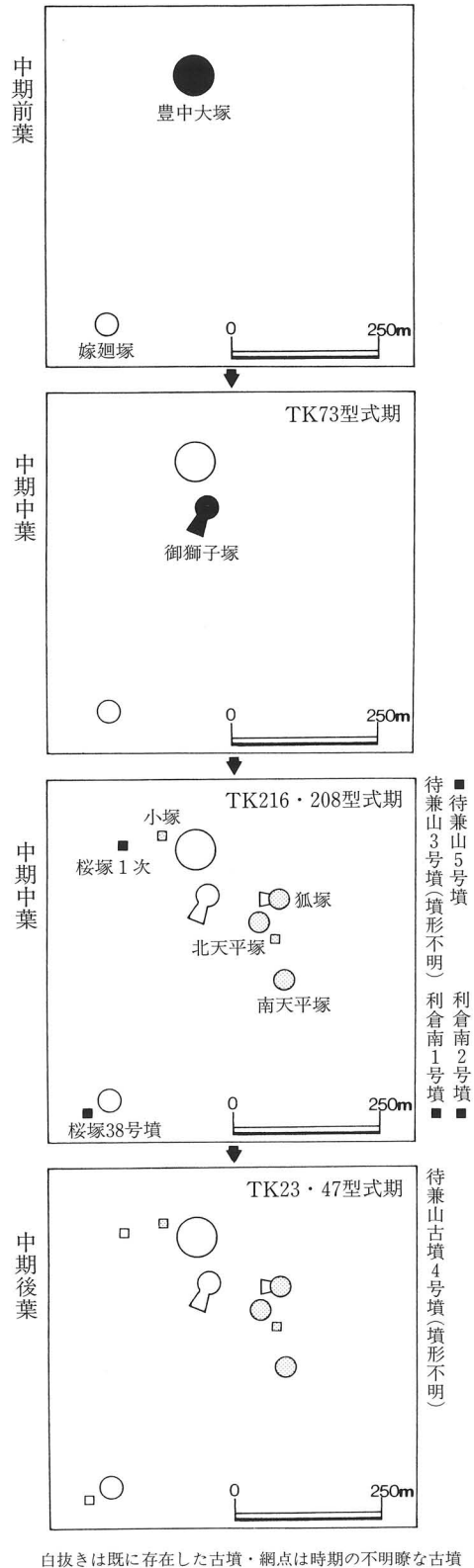


図115 桜塚古墳東群および周辺地域における中期古墳の展開

地部に位置する利倉南遺跡では、中期中葉から後葉と考えられる1辺8mの方墳が2基検出されている(豊中市教育委員会1988)。さらに、千里川以北に位置する待兼山遺跡においても、3ヶ所で中期中葉から後葉に属する埴輪が出土しており、待兼山5号墳は1辺10mの方墳である可能性があるということは、先に述べたとおりである。

以上のような豊島地域における中期古墳の展開は図115のようにまとめることができよう。つまり、当地域における大きな画期としては、御獅子塚古墳築造以後に生じる次のような現象があげられる。

まず、盟主墳とみられる古墳の規模の縮小化があげられる。桜塚古墳群東部において中期前半に属する豊中大塚、御獅子塚古墳はいずれも墳丘長50mを上回る規模を有する。一方、それ以降に築造される南天平塚、北天平塚、豊中狐塚古墳は、いずれも円丘部が30~20m程度であり、仮に前方後円墳であったとしても50mを下回することは確実である。

次に、盟主墳の縮小と相前後する時期に起こる小規模方墳の増加があげられる。ここで重要なのは、このような現象が、桜塚古墳群のみならず中期中葉には古墳築造が不明瞭であった豊島地域北部や、中期中葉以前には、古墳の築造がほとんどみられない桜塚古墳以南の地域にも認められるということである。

周辺地域の状況 周辺地域の状況についても簡単に触れておきたい。まず、猪名川をはさんで対岸に位置する猪名野古墳群では桜塚古墳群と同じく中期中葉にわたり比較的大規模な古墳の築造が連続して認められる。その伸長についても次のような点で先に検討した桜塚古墳群と類似している。つまり、中期中葉には全長71mの前方後円墳である池田山古墳が、中期中葉には全長92mの前方後円墳である伊居太古墳が築造されると考えられている(森岡・吉村1992)。後者は古墳時代中期の摂津西部地域において最大規模の古墳である。しかし、次に築造される御願塚古墳は全長52mと規模が縮小しており、前方部に規制を受けた帆立貝式古墳となることから、盟主墳に対する規制が指摘されている(森岡1990:

p.265・森岡・吉村1992:p.72)。同様の状況は、さらに西側に位置する六甲山南麓の金津山古墳などにも認められるようである(森岡1995)。

III 古墳時代中期における古墳築造に関する研究の視角と課題

前章における分析の結果、古墳時代中期中葉の豊島地域において①盟主墳の縮小化、②小方墳の増加という現象が認められた。では相前後する時期に起こったこの2つの現象の背景には、いかなる要因が考えられるだろうか。まずは、この2つの現象に関連する先行研究を検討し、これらの現象の背景を論じる手がかりとしたい。

盟主墳の縮小化 小野山節は、大王墓の変遷と各地の盟主墳の墳形変化から古墳時代中期に2度にわたる墳丘形態の規制を想定した(小野山1970)。各地域における古墳群の墳形の変化といわゆる大王墓の規模の伸長を対比することにより、中央権力の地方に対する支配力の変化を読みとるといふ小野山の視点は、今日でもきわめて有効であるといえよう。また、野上丈助は畿内各地における古墳群の動向を検討する中で、5世紀になると大阪府高槻市の弁天山古墳群の墳丘規模が縮小化することを指摘し(野上1970:p.56)、平野部において築造される太田茶白山古墳との対比を通して、中期中葉以降弁天山古墳D群に墳丘規模の規制が行われた可能性を指摘している(野上1970:p.61)。

さらに都出比呂志は小野山の研究を批判的に継承し、京都府桂川右岸地域の古墳を対象に次のような首長墓系譜の分析を行った(都出1988)。それは古墳時代前期において前方後円墳の連続した築造が認められた向日グループは、中期に至ると前方後円墳の築造を停止するが、その時期隣接する長岡グループでは恵解山古墳や今里車塚古墳などの前方後円墳が認められることを指摘したのである。このような事実関係に基づき、当地域において盟主墳的古墳をだすグループが、5世紀前葉、5世紀後葉、6世紀前葉に画期をもって移動し、さらに3つの画期が、地域内の自主的な動きではなく全国的に連動する現象

であるとの評価を与えた。そして、このような各地における盟主墳の移動が大王権力周辺の政治的変動と連動した現象であるという結論を導き出したのである。ここで注意が必要なのは、5世紀後葉の画期を述べるなかで、都出が京都府桂川右岸地域において恵解山古墳と穀塚古墳との間に少なくとも1世代分の盟主墳の空白期があることを指摘していることである。この点について、都出は将来の課題としつつも、当地域において盟主墳的大規模古墳を欠く時期がある可能性を認めている(都出1988:p.10)。同様の指摘は、和田晴吾の古墳編年を整理する試みのなかでも認められる(和田1987)。和田は古墳時代中期中葉に該当する「(古墳小期)七・八期には、各地の首長墳・大首長墳の発達にかけりが見えはじめ、墳丘規模の縮小化、前方後円形式の廃絶といった現象」(カッコ内筆者補)がみられることを指摘し、その要因として「政権化における大王権が著しく卓越してくる一方で、首長・大首長による地域支配を弱体化させ、解体せしめる動き」をあげた(和田1987:p.53)。

ただし、和田はこれ以後の研究において、むしろ中期前葉における前方後円墳の規制と中期後葉(和田の後期段階)における馬見古墳群などの大型古墳群の衰退、中小前方後円墳の増加、そして後に述べる古式群集墳の出現を強調しており(和田1992・1994・1998)、中期中葉における盟主墳の縮小化に対する言及はほとんどみられない。なお、都出比呂志は首長墓系譜の変動に地域差があることを指摘し、各地域ごとに首長系譜変動パターンの追究が必要であることを指摘している(都出1999)。

小方墳の増加 次に古墳時代中期における小規模古墳に関する先行研究について検討していきたい。

まず、横穴式石室出現以前の群集墳についての研究としては、都出比呂志による次のような研究があげられる(都出1970)。都出は、首長の規制力が弱まるなかで有力家族が台頭した結果、彼らが墳丘をもった墓を5世紀末葉から造営しはじめるという理解を示し、その「先駆的な」ものとして兵庫県西条古墳群や奈良県新沢古墳群などを類例に挙げた(都出

1970:p.133)。この見解は、古墳時代後期の横穴式石室群集墳を有力家族墓の台頭の結果であるとみなした近藤義郎の見解(近藤1952)の影響が窺われるが、一方で奈良県龍王山古墳群など大古墳と近接する等質的な小墳の群集に注目し、「畿内では、盟主的古墳を核として持つ群集墳も存在する一方で、首長集団の大古墳群と群集墳の断絶が存在するのは」、「大王権力やそれに取り込まれた官僚層と共同体成員との分離が他の地域よりも早く五世紀代に進んだためと考えられる」(都出1970:pp.142-143)という理解を示した。個別現象に対する解釈はさておき、すでにこの段階において小古墳のありかたと大王権力との関係に地域差がある可能性を指摘されている点には注意が必要である。

また、石部正志は当時発見が相次いでいた弥生時代の方形周溝墓に注目し、大阪府菩提池遺跡などを例として、古墳時代前期にも連続して弥生時代と同様の墓制が営まれていることを指摘した。そして、横穴式石室を採用しない群集墳を「古式群集墳」と命名した(石部1975:p.57)。ただし、石部は住居域に近接して方形周溝をもつ墓制が検出された大阪府七の坪遺跡における状況と、集落から隔絶した位置に営まれ埴輪をもつ菩提池遺跡や大阪府寺山古墳群における状況との差異を指摘し、「近畿でも、周辺部と畿内中枢部などでは、四世紀に入ってから群集墓のありかたに相違」があり、首長権力との関係により、密集土壙墓のような墓制が形成される一方で、「首長のミウチとして一定の身分が保証されて、従来とは異なる厚葬を実現する一団」も存在した可能性を指摘している(石部1980:pp.387-388)。埴輪の有無や立地さらには群集形態の違いによって、小型の方形墳のなかにも首長権力との関係に差異が存在するという指摘は、奈良県矢部遺跡を検討した寺澤薫(寺澤1986:p.323)や奈良県宇陀地域を分析した楠元哲夫によって行われている(楠元1986)。また、都出比呂志は墳丘高地表2m前後を目安として、墳丘墓を低塚系と高塚系に区分し、古墳時代に属する前者を低塚古墳と呼称した。低塚古墳の性格については、共同体成員の一部と墓域を共にするという

表1 和田晴吾の墳丘墓分類

分類	時期	墳丘形態	名称
a類	弥生時代	方形	方形周溝墓
b類	古墳時代前期・中期	方形	小型低方墳
c類	古墳時代後期前半(TK23~)	円形	古式群集墳
d類	古墳時代後期後半	円形	新式群集墳

墓域のありかたから、より在地性の強い下位の小首長であるとする(都出1986:p.261)。ただし、前方後円墳を頂点とする階層秩序の中で理解できるといふ見解も同時に示している(都出1986:p.224)。

さらに、1970年代以降の発掘調査の進展は次のような新たな知見をもたらした。それは古市古墳群と近接する位置に営まれ、100基を上回る均質的な方墳群を形成する長原古墳群の発掘成果の蓄積である。長原古墳群のありかたは、横穴式石室群集墳以前の小型墳に対するイメージを、大きく転換させていくことになるのである。例えば、広瀬和雄は「長原古墳群に結集した(正確にはさせられたと言うべきであろう)多くの人格は、前方後円墳を造営した王との2次的な政治関係を形成しながら、なかばヤマト政権との第1次的政治関係に組み込まれつつある原初的な「官僚」と評価できるのではなかろうか」と論じるとともに、「大半が円墳で占められる石光山古墳群や、方墳も顕著な新沢千塚古墳群などと質的な距離はあまり大きくないすこぶる畿内的な「古式」群集墳のあり方ということになる」と述べている(広瀬1984:p.22)。広瀬のこの見解は、長山雅一(長山1988)や岸本道昭(岸本1989)に引き継がれる。とくに岸本はこれらの方墳が弥生時代の方形周溝墓と比べ埋葬施設数が少なく、周溝の共有がないことから、世代墓の様相が希薄であると述べており、古墳時代の小方墳に対する前述の石部正志の見解に対して、反論している(岸本1989:pp.223-224)⁽⁴⁾。また、細川修平は、古墳時代前期末において塚ノ本古墳のような大型円墳と円筒埴輪棺で構成される長原古墳群が、中期中葉になると等質的な小方墳が多数営まれるようになるという変遷の背景について次のように推定した(細川1988)。それは「完全に盟主墳に従属するだけの人格が成長し、盟主墳を規制する古式小古墳の造墓主体へと成長する」という解釈である(細川1988:p.120)。この見解は、先に検討し

た①盟主墳の縮小化と②小方墳の増加という現象を、整合性をもって説明しうる解釈として非常に魅力的であるといえよう。ただし、細川のいう古式小古墳造営主体者の人格成長を、自律的なものとするか他律的なものとするかによって、その歴史的解釈は大きく異なるといえる。

一方、和田晴吾は南地域の古墳の動向を概観するなかで相楽郡木津町の上人ヶ平遺跡(小池1989・石井ほか1989)などにみられる低墳丘で一辺10m前後の規模をもつ中期の墳丘墓を「小型低方墳」と呼び、「弥生時代以来の方形周溝墓の伝統を引く有力な共同体成員とその家族のもの」と捉え、後期(本稿の中期後葉)の群集墳とは一線を画し(カッコ内筆者補)ている(和田1988:p.29)。これに対して、同じく南山城地域の小規模方墳を検討した伊賀高弘は、当地域の小方墳に「典型的な古墳の属性の一つである埴輪の樹立や、いまだ日常什器として定着していない古手の須恵器の副葬がかなり一般的に認められることから」、小規模な方墳も「王権の規制下におかれた墓制」として位置づけている(伊賀1991:p.306)。ただし、王権と小規模方墳の関係は間接的な政治関係であるとした(伊賀1991:p.307)。

さらに和田晴吾は、前節において述べた各地域の盟主墳の動向をふまえた上で、小規模古墳について表1のような体系的整理を行っている(和田1992)。和田はb類とした「小型低方墳の被葬者にまではまだ直接的な政権の影響は及んでいない」(和田1992:p.328)と述べ、「ヤマト政権が推し進めた支配方式の基本は共同体を対象にその首長層の把握と序列化にあり、政権の手ははまだ首長の在地支配の内部にまでは及ばず、有力家長層は弥生時代以来の伝統をもとに在地の政治社会関係のなかで小型低方墳を造りつづけた」(和田1992:p.333)との理解を示した。そして、c類の古式群集墳の成立こそが、それまで「地域首長のもとにあった有力家長層」が「ヤマト政権」により、掌握された証(和田1992:p.333)であると解釈し、小型低方墳と「あらたな制度的枠組のもとに全国的な規模でもって行われた古式群集墳以降の群集墳とは明確に区分されるべきものであ

ろう」(和田1992：p.335)と述べている。ここで注意が必要なのは、和田の小型低方墳に対する理解が、先に紹介した石部正志のいう古式群集墳の概念(石部1975：p.57)に対応するのであり、和田のいう古式群集墳の定義と石部のそれとは用語こそ同じもののその内容は大きく異なるという点である。

さらに、広瀬や岸本が王権との1次的関係を想定し、原初的な官僚層の墓制として位置づけた長原古墳群に対して、和田は「群集墳に先立って、政権に掌握された渡来人も含む有力家長層の墳墓であると推定される」が、「特定の墓域に数多く集中して築かれていること、言い換えれば、在地は離れて営まれているものも考えられることを除けば、他の小型低方墳と質的にはほとんど変わらないのである」(和田1992：p.335)と述べている。

しかしながら、すでに石部正志や寺澤薫そして楠元哲夫らによって、小型の方墳のなかにも立地や群集形態そして副葬品のありかたから、倭王権⁵⁾との遠近が想定されていることは重要である。とくに楠元は区画墓群と古式群集墳とが「同じ方形形態を採ることがあっても史的な存在意義、意味あいを異とすること」を指摘し、「個別個々の群ごとの具体的内容を詳細に分析、吟味して判別する作業」の重要性を強調していることには注意が必要である(楠元1996：p.159)。

IV 盟主墳の縮小化と小方墳の増加

それでは、以上の研究史をふまえた上で、古墳時代中期中葉の豊島地域にみられる盟主墳の規模縮小化と小方墳の増加について考えてみたい。まず、盟主墳の縮小化は豊島地域だけではなく、猪名川西岸の猪名野古墳群においてもみられることから(森岡・吉村1992)、盟主墳の縮小化を猪名川下流域における首長間の序列変化とみなすことは困難である。ただし、当地域における盟主墳の縮小化をもって、単純に猪名川流域を基盤とする首長層の地位低下を想定するのは、やや早計である。田中晋作は桜塚古墳群の盟主墳より出土している甲冑が、各時期における最新の機能をもつものによって構成されている

ことから、甲冑の配給元と考えられる百舌鳥・古市古墳群と桜塚古墳群との密接な関係を想定し、桜塚古墳群を百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団を実質的に支える中小集団の典型例であるとした(田中1990：p.36)。つまり、副葬品からの推定が許されるならば、桜塚古墳群の盟主墳を築造した集団は、古墳時代中期を通して倭王権との密接な関係を維持していたと考えられるのである。以上のようなありかたから、筆者は当地域における盟主墳の縮小化を、倭王権を上位とする密接な関係に基づく地域支配原則のスムーズな受容形態として評価する。

では、同時期に生じる小方墳の増加は、どのように考えられるであろうか。まず、研究史をみてきたなかでの大きな対立点は、「低墳丘で一辺10m前後の規模をもつ中期の墳丘墓」に対する評価であろう。和田晴吾はこれらを有力家長層が弥生時代以来の伝統をもとに在地の政治社会関係のなかで造りつけた墓制であるとみなしているのに対して(和田1992：p.333)、広瀬和雄や岸本道昭は小方墳で構成される長原古墳群の状況に基づき、より直接的な王権との関係性を想定する。また、伊賀高弘は埴輪や初期須恵器といった盟主墳と共通した品目をもつことから、和田が小型低方墳の典型例であるとする上人ヶ平遺跡についても、王権の規制下におかれた墓制であると述べている。

以上の議論で明らかなのは、墳形の類似性のみをもって、一律的に弥生時代の方形周溝墓と古墳時代の小方墳の性格を同一視あるいは区分することは、困難であるということである。少なくとも、楠元哲夫が指摘したように墳形以外の属性、例えば副葬品目や配置、あるいは埴輪等の外表施設をふまえなければ、倭王権と小古墳の被葬者層との政治的関係の有無や濃淡について議論することは不可能である。そういった意味で、本稿で検討した中期中葉以降に増加する小方墳の多くには、当時の最新技術である窖窯で製作された埴輪が樹立されていることが一般的であるという事実は重要である(図114)。なぜなら、自律的成長を遂げた在来の有力家長層が自らの需要に応じて窖窯焼成の埴輪を、独自に生産あるいは入

手したという状況は、当該期に関する埴輪研究の成果、すなわち墳丘の規模に応じた埴輪の使い分け(坂1988、天野・松村1992、高橋1994)が指摘されている研究動向からは想定しづらいからである⁽⁶⁾。

つまり、伊賀が指摘したように(伊賀1991)、埴輪という葬制上の器物の共有を通して、小方墳の被葬者層は大古墳の造営層との関係を表示した、もしくはさせられたと考えざるを得ないのではないだろうか。もちろん、「王権は」「間接的に小規模方墳の被葬者との間に政治的関係を結んだ」(伊賀1991:p.307)、あるいは「直接的に大首長に支配されない階層の墓が低墳丘方形墓」(小池1991:p.315)という見解があるように、ここで問題となるのは倭王権と小方墳の被葬者との間に存在する地域首長の位置づけである。

そこで重要となるのが、この現象が地域の盟主墳の縮小化と同時に進行するという事実である。盟主墳の縮小が、小野山節の提唱(小野山1970)以来多くの論者により支持されてきたように倭王権の政治的意志の反映であるならば、同時期に起こる小方墳の増加もまた、自律的な「有力世帯層」の台頭というよりは、地域首長を規制した倭王権との政治的関係のもとに生じた現象であると考えられるのである。また、このような観点から先述の図114をみかえすと、時期を追うごとに盟主墳と小古墳のみかけ上の格差は解消されていくという傾向が認められるのである。

したがって、桜塚古墳群における盟主墳の縮小と、桜塚古墳群内のみならず豊島地域内に広くみられる小方墳の増加は、在来の地域首長勢力に墓制上の規制を加えつつ、下位集団に対しては小方墳築造と埴輪樹立⁽⁷⁾を振興するという倭王権の新たな「支配」方式としてみなすことができるのではないだろうか。とくにそれまで墳墓を築造しなかった集団に対しても、大規模古墳と共通する埴輪樹立を容認あるいは強制することは、彼らの子孫や被葬者の属する集団が倭王権との共同体幻想を抱くことを期待されたと考えられるのである。

ただし、以上のような現象を小古墳造営層からみ

るならば、倭王権の新たな「支配」方式を最大限自己の属する集団の振興に活用した結果であるとみなしうるかもしれない。さらに規制される対象である地域首長にとっても、王権側の意図を柔軟に受容することは、実際上の権限の維持、強化を意図した結果である可能性が、例えば御獅子塚古墳以降の桜塚古墳群の盟主墳の縮小化と相反して維持される副葬品目からは指摘できるかもしれない。ただし、こういった多角的な視点をもって古墳築造の意味を分解し個別化したとしても、一貫してそこに存在するのは巨大前方後円墳を頂点とする墓制上の秩序であり、その正当性の再生産と拡大の過程である。したがって、この原理の頂点を構成した倭王権の意図を無視して、古墳築造を行う集団の相対的増加を理解することは困難である。

小方墳に対する以上のような理解は、先に紹介した和田晴吾の古式群集墳の概念、すなわち「地域首長のもとにあった有力家長層の掌握」(和田1992:p.333)とほぼ同一である。ただし、すでに明らかのように和田の想定した古式群集墳の定義とは①発生時期、②墳形の2点で異なる。ここで注意が必要なのは和田が古式群集墳を「あらたな制度的枠組のもとに全国的な規模でもって行われた」(傍点筆者)墓制であるとみなしている点である(和田1992:p.335)。つまり、和田は広域な地域現象を包括して説明できる概念として古式群集墳を用いているのである。しかしながら、すでに都出比呂志が1970年の段階でその差異を強調しているように(都出1970)、有力氏族の基盤地域である奈良盆地や大阪湾沿岸地域、すなわち後の律令期における畿内地域とそれ以外の地域では地域支配原理の変遷が異なっていることは容易に想像できよう。また、鉄製甲冑にみられる桜塚古墳群と倭王権との密接さは(田中1990)、以上のような豊島地域のありかたを猪名川下流域の地域内独自の現象としてだけではなく、倭王権の畿内地域における地域支配方式の典型例とみなしうる根拠とできるのである。